

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
23	Koebis M, Ohsawa N, Kino Y, Sasagawa N, Nishino I, Ishiura S	Alternative splicing of myomesin 1 gene is aberrantly regulated in myotonic dystrophy type 1.	Genes Cells 16(9): 961-972, Sep, 2011	エクソン・アレイを用いることで、筋強直性ジストロフィー-I型 (DMI) の骨格筋において、マオタンシン1 (MYOM1) 遺伝子のエクソン17aがmRNAに取り込まれることを明らかにした。この取り込みはMBNL1-3のみならずCELF1-2でも抑制された。一方、CUGリピート伸長により、MBNL1のMYOM1ミニゾーンに対する効果は阻害されたが、CELF1の効果は阻害されなかった。このことは、DMI筋においては、MBNLの抑制がMYOM1エクソン17aの異常スプライシングを惹起していることを示唆している。
24	Ohsawa N, Koebis M, Suo S, Nishino I, Ishiura S	Alternative splicing of PDLIM3 / ALP, for α -actinin-associated LIM protein 3, is aberrant in persons with myotonic dystrophy.	Biochem Biophys Res Commun 409(1): 64-69, May, 2011	筋強直性ジストロフィー-I型 (DMI) 患者骨格筋において、新たにPDLIM3/ALPおよびFNI遺伝子のスプライシング異常があることを同定した。スプライシング異常により、 α -actinin 2との必要なZASP-like motifを欠いたPDLIM3が産生されることがDMIの筋症状の原因であると考えられた。
25	Mitsueda-Ono T, Ikeda A, Inouchi M, Takaya S, Matsumoto R, Hanakawa T, Sawamoto N, Mikuni N, Fukuyama H, Takahashi R	Amygdalar enlargement in patients with temporal lobe epilepsy.	J Neurol Neurosurg Psychiatry 82: 652-657, 2011	側頭葉てんかんの患者で扁桃体の体積増加を報告
26	Kato K, Tsuji AB, Saga T, Zhang MR	An Efficient and Expedient Method for the Synthesis of ¹¹ C-labeled α -Aminoisobutyric Acid: A Tumor Imaging Agent Potentially Useful for Cancer Diagnosis	Bioorg Med Chem Lett 2437-2440, 2011	[¹¹ C]AIBの簡便な標識合成法を開発し、腫瘍PETイメージングへのAIBの有用性を示した。
27	Kuriyama K, Honma M, Shimazaki M, Horie M, Yoshiike T, Koyama S, Kim Y	An N-methyl-d-aspartate receptor agonist facilitates sleep-independent synaptic plasticity associated with working memory capacity enhancement.	Scientific Reports. 1: 127. 2011.	NMDA受容体がヒトの記憶増強に関与することが示唆されている。高次認知の中核を担う作働記憶の容量増大は睡眠中の記憶増強メカニズムに依存することが明らかにされているが、NMDA受容体作動薬が睡眠中の作働記憶容量増大プロセスを促進する可能性は明らかとされていない。本研究は、健康被験者を対象にNMDA受容体部分作動薬であるD-サイクロゼリン(DCS)の作働記憶容量増大プロセスへの経口投与効果を、1重盲検デザイン(RCT)を行い検討し、NMDA受容体作動薬により作働記憶容量の増大に関わる神経可塑性が、覚醒時間帯のみ促進され、睡眠時間帯と覚醒時間帯の神経可塑性が異なる分子神経生理学的機序で駆動している可能性を明らかにした。
28	Mori R, Kusuda S, Fujimura M; Neonatal Research Network Japan (Ohta H.)	Antenatal corticosteroids promote survival of extremely preterm infants born at 22 to 23 weeks of gestation.	J Pediatrics. 2011; 159: 110-114.	妊娠22-23週で出生した早産児11607人(日本人)を対象に、コルチコステロイド投与が児の生存率を向上させるか否かを検討した。その結果、コルチコステロイド投与により、妊娠24-29週における呼吸窮迫症候群、重度脳室内出血の頻度が減少し、妊娠22-23週で出生した早産児の生存率が向上することが明らかになった。この結果は妊娠22-23週で出生した早産児に対するコルチコステロイド投与の治療の重要性を示している。
29	Suzuki S, Ohta M, Shimizu Y, Hayashi YK, Nishino I	Anti-signal recognition particle myopathy in the first decade of life.	Pediatr Neurol 45(2): 114-116, Aug, 2011	10歳未満発症のSRPミオパチー2例を報告した。発症年齢はそれぞれ5歳と9歳であった。SRPミオパチーは通常成人が罹患し、10歳未満で発症することは極めて希である。両例とも進行性の筋萎縮を示し、顔面肩甲上腕型筋ジストロフィーと肢帯型筋ジストロフィーが当初の鑑別診断であった。筋組織学的検査では、壊死・再生線維を認めたが、リンパ球浸潤は認めなかった。進行性筋萎縮を示す小児例においてもSRPミオパチーを鑑別に上げる必要がある。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
30	Sanagi T, Yuasa S, Nakamura Y, Suzuki E, Aoki M, Warita H, Itoyama Y, Uchino S, Kohsaka S, Ohsawa K	Appearance of phagocytic microglia adjacent to motoneurons on spinal cord tissue from a presymptomatic transgenic rat model of amyotrophic lateral sclerosis	J Neurosci 88:2736-2746, 2010	SOD1 トランスジェニックマウスを用いて神経細胞死の機序を解明する為に行った研究であり、特にミトコンドリアの役割に注目した
31	Takano H, Fujii Y, Yugeta N, Takeda S, Wakao Y	Assessment of Left Ventricular Regional Function in Affected and Carrier Dogs with Duchenne Muscular Dystrophy Using Speckle Tracking Echocardiography.	BMC Cardiovasc Disord. 11:23 doi:10.1186/1471-2261-2011	二次元スペックルトラッキング・心エコー法(STE)を用いて、筋ジストロフィー犬の左心室心筋における機能障害の評価を行った。心不全の明確な臨床徴候はみられなかった時期についても、エコー上の歪み速度では拡張期の障害を検出することが出来たことから、STEは初期の心機能障害を検出する有用な手法であることを示唆している。
32	Kishi T, Kitajima T, Kawashima K, Okochi T, Yamanouchi Y, Kinoshita Y, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N.	Association Analysis of Nuclear Receptor Rev-erb Alpha Gene (NR1D1) and Japanese Methamphetamine Dependence.	Curr Neuropharmacol. 9: 129-32, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、NR1D1 遺伝子多型との相関研究を報告した。
33	Kobayashi H, Ujike H, Iwata N, Inada T, Yamada M, Sekine Y, Uchimura N, Iyo M, Ozaki N, Itokawa M, Sora I.	Association analysis of the adenosine A1 receptor gene polymorphisms in patients with methamphetamine dependence/psychosis.	Curr Neuropharmacol. 9: 137-42, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、adenosine A1 受容体遺伝子多型との相関研究を報告した。
34	Yoshimura T, Usui H, Takahashi N, Yoshimi A, Saito S, Aleksic B, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Iwata N, Sora I, Iyo M, Ozaki N.	Association analysis of the GDNF gene with methamphetamine use disorder in a Japanese population.	Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry. 35: 1268-72, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、GDNF 遺伝子多型との相関研究を報告した。
35	Kobayashi H, Ujike H, Iwata N, Inada T, Yamada M, Sekine Y, Uchimura N, Iyo M, Ozaki N, Itokawa M, Sora I.	Association analysis of the tryptophan hydroxylase 2 gene polymorphisms in patients with methamphetamine dependence/psychosis.	Curr Neuropharmacol. 9: 176-82, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、tryptophan hydroxylase 2 遺伝子多型との相関研究を報告した。
36	Ujike H, Kishimoto M, Okahisa Y, Kodama M, Takaki M, Inada T, Uchimura N, Yamada M, Iwata N, Iyo M, Sora I, Ozaki N.	Association Between 5HT1b Receptor Gene and Methamphetamine Dependence.	Curr Neuropharmacol. 9: 163-8, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、5HT1b 受容体遺伝子多型との相関研究を報告した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
37	Fuji T, Ota M, Hori H, Sasayama D, Hattori K, Teraishi T, Yamamoto N, Hashikura M, Tatsumi M, Higuchi T, Kunugi H.	Association between the functional polymorphism (C3435T) of the gene encoding P-glycoprotein (ABCB1) and major depressive disorder in the Japanese population.	J Psychiatr Res.;46(4):555-9. Epub 2012 Feb 4.	私たちは今回、血液関連のストレスホルモン排出ポンプであるP-糖タンパク質(ABCB1)の機能低下型遺伝子について、日本人の「大うつ病性障害」患者631人、健常者1100人を対象として解析し、機能低下型対立遺伝子(アリル)T9435(rs1045642)は患者群に有意に多くみられること、さらに父親と母親双方からこのアリルを受け継いでいる人の頻度も、患者に有意に多くみられることを示しました。この結果が他のサンプルでも再現されれば、うつ病発症の分子メカニズムを解明し、その後の治療への応用を切り開く上で、重要な意味を持ちます。
38	Okahisa Y, Kodama M, Takaki M, Inada T, Uchimura N, Yamada M, Iwata N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Ujike H.	Association between the Regulator of G-protein Signaling 9 Gene and Patients with Methamphetamine Use Disorder and Schizophrenia.	Curr Neuropharmacol. 9: 190-4, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、Regulator of G-protein Signaling 9 遺伝子多型との相関研究を報告した。
39	Takata A, Kim SH, Ozaki N, Iwata N, Kunugi H, Inada T, Ujike H, Nakamura K, Mori N, Ahn YM, Joo EJ, Song JY, Kanba S, Yoshikawa T, Kim YS, Kato T.	Association of ANK3 with bipolar disorder confirmed in East Asia.	Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet. 2011 Apr;156B(3):312-5.	ANK3遺伝子が双極性障害と関連することが欧米の全ゲノム解析で報告されており、東アジアでも関連が確認された。
40	Scott K M, Von Korff M, Angermeyer M C, Benjet C, Bruffaerts R, de Girolamo G, Haro J M, Lepine J P, Ormel J, Posada-Villa J, Tachimori H, Kessler R C	Association of childhood adversities and early-onset mental disorders with adult-onset chronic physical conditions	Archives of General Psychiatry, 68(8), 838-844, 2011	背景：児童期における心理的逆境の、身体的健康に対する結末は、精神的健康への結末と同様の影響を及ぼすかもしれない。しかし多くの先行研究が、代表的でない標本を採用し、specificな逆境や身体的結果に選択的に焦点を当てているため、これが本当であるかは不明瞭である。早発の精神病患と、その後が生じる身体的健康の悪化状態の関係は未だ十分に調査されていない。 目的：児童期の逆境と早発の精神病患が各自独立的に、文化的に多様な全成人年齢層の標本において、成人期に発症する一連の慢性的身体疾患の増大したリスクと、関連しているかを調査すること。 設計：10カ国の成人に対する横断的な地域調査 被験者：発症時におけるDSM-IV精神疾患の診断と年齢判定、児童期における家庭の逆境、慢性的身体疾患の診断または発症の年齢の情報があ る、18歳以上の成人 (N=18,303) 結果：3つ以上の児童期逆境の履歴が、6つの身体疾患全てと、独立に関連していた (hazard ratios, 1.44 to 2.19)。現在の精神疾患の影響を調整しても、これらの関連はほとんど影響を受けなかった。早発の精神疾患は、5つの身体疾患の発症と独立に関連していた (hazard ratios, 1.43 to 1.66)。 結論：これらの結果は、「児童期の逆境と早発の精神疾患は独立に、後年における多様な慢性的身体疾患のリスクの増大に幅広い影響がある」という仮説と一貫性がある。前向きに設計された研究による確認が必要である。
41	Sasayama D, Hori H, Teraishi T, Hattori K, Ota M, Matsuo J, Kawamoto Y, Kinoshita Y, Amano N, Kunugi H.	Association of cognitive performance with interleukin-6 receptor Asp358Ala polymorphism in healthy adults.	J Neural Transm. 2012 Mar;119(3):313-8.	IL-6受容体遺伝子多型Asp358Alaと認知機能との関連を調べるために、健常成人576名に対しウェクスラー成人知能検査を施行した。Asp/Asp遺伝子型の対象者はAla/Ala保有者と比較して言語性IQが高く(P = 0.005)、とくに、長期記憶を必要とする言語性の下位検査で有意な差がみられた。Ala/Ala保有者ではIL-6および可溶性IL-6受容体濃度が高いことが知られており、過剰のIL-6シグナルが長期記憶を必要とする言語性認知能力の獲得に悪影響を及ぼしている可能性が示唆される。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
42	Sasayama D, Hori H, Terashi T, Hattori K, Ota M, Matsuo J, Kawamoto Y, Kinoshita Y, Higuchi T, Amano N, Kunugi H	Association of interleukin-1β genetic polymorphisms with cognitive performance in elderly females without dementia	J Hum Genet. 56(8): 613-6, 2011	99名の高齢健康女性においてWAIS-RにてIQを測定した結果、IL-1β遺伝子rs1143634およびrs1143633の遺伝子型によって言語性IQが有意に異なることが示された。IL-1β遺伝子の多型が高齢女性の認知機能に影響を与えることが示唆された。
43	Baba T, Takeda A, Kikuchi A, Nishito Y, Hosokai Y, Hirayama K, Hasegawa T, Sugeno N, Suzuki K, Mori E, Takahashi S, Fukuda H, Itoyama Y	Association of olfactory dysfunction and brain metabolism in Parkinson's disease	Mov Disord 26:621-628, 2011	パーキンソン病の初期病変として嗅神経の機能障害が生じる。その機能として主に嗅覚の認知障害が関与していると考えられる。
44	Yoneatsu Osaki, Kenji Suzuki, Kiyoshi Wada, Shin-ichi Htsumoto	Association of Parental Factors with Student Smoking and Alcohol Use in Japan	Jpn. J. Alcohol & Drug Dependence 46(2): 270-278, 2011.	中高校生の飲酒、喫煙は、親の飲酒、喫煙に対する態度の影響を強く受けていることを実証した。
45	Sasayama D, Wakabayashi C, Hori H, Terashi T, Hattori K, Ota M, Ishikawa M, Arima K, Higuchi T, Amano N, Kunugi H.	Association of plasma IL-6 and soluble IL-6 receptor levels with the Asp358Ala polymorphism of the IL-6 receptor gene in schizophrenic patients.	Journal of Psychiatric Research, 45(11):1439-44. 2011 Nov	IL-6R遺伝子 Asp358Alaの遺伝子型は、統合失調症患者および健康者において血漿IL-6濃度および可溶性IL-6R濃度と有意な関連を示した。統合失調症患者では健康者と比較して血漿IL-6濃度が有意に高かったが、可溶性IL-6R濃度は有意な差を認めなかった。
46	Horiuchi Y, Iida S, Koga M, Ishiguro H, Iijima Y, Inada T, Watanabe Y, Someya T, Ujike H, Iwata N, Ozaki N, Kunugi H, Tochigi M, Itokawa M, Arai M, Niizato K, Iritani S, Kakita A, Takahashi H, Niawa H, Arinami T	Association of SNPs linked to increased expression of SLC1A1 with schizophrenia	Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet 2012 Jan;159B(1):30-7	SLC1A1はグルタミン酸トランスポーターEAAT3/EAAC1をコードする遺伝子である。本研究は、この遺伝子と統合失調症との関連を19のタグSNPsを用いて解析した。その結果、rs7022369と有意な関連を示した(多重比較修正)。さらに、死後脳の遺伝子発現をみたところ、この多型のリスク遺伝子はトランスポーターの発現上昇と関連していた。以上から、SLC1A1は統合失調症の病態に関与することが示唆された。
47	Yokobayashi E, Ujike H, Kotaka T, Okahisa Y, Takaki M, Kodama M, Inada T, Uchimura N, Yamada M, Iwata N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Kuroda S.	Association study of serine racemase gene with methamphetamine psychosis.	Curr Neuropharmacol. 9: 169-75, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、serine racemase 遺伝子多型との関連研究を報告した。
48	Okahisa Y, Kodama M, Takaki M, Inada T, Uchimura N, Yamada M, Iwata N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Ujike H.	Association Study of Two Cannabinoid Receptor Genes, CNR1 and CNR2, with Methamphetamine Dependence.	Curr Neuropharmacol. 9: 183-9, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、カンナビノイド受容体(CNR1 and CNR2)遺伝子多型との関連研究を報告した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
49	Matsuoka Y, Nishi D, Nakaya N, Sone T, Hamazaki K, Hamazaki T, Koido Y	Attenuating posttraumatic distress with omega-3 polyunsaturated fatty acids among disaster medical assistance team members after the Great East Japan Earthquake: The APOP randomized controlled trial.	BMC Psychiatry 2011,11:132.	東日本大震災の被災現場で急性期に活動した災害派遣医療チーム(DMAT)の医師、看護師、業務調整員を対象に、地震発生後1か月時点の心理状態を評価した。その後、心理教育にω3系脂肪酸サプリメントの12週間摂取を加えた介入が、心理教育のみの介入に比して地震発生後1か月時点の心的外傷後ストレス症状の軽減に有効かどうかを検討する単盲検ランダム化並行群間比較試験を計画した。本論文はそのプロトコルである。
50	Hori H, Richards M, Kawamoto Y, Kunugi H.	Attitudes toward schizophrenia in the general population, psychiatric staff, physicians, and psychiatrists: a web-based survey in Japan.	Psychiatry Res. 2011 Apr 30;186(2-3):183-9.	統合失調症に対するステイグマは現在なお根深い。しかし、専門職と一般人との間で統合失調症へのステイグマの程度を比較した研究は少ない。本研究では、ウェブ調査により、一般人、精神科スタッフ、一般科医師、精神科医の4群間で統合失調症へのステイグマを比較した。本研究により、ステイグマは精神科医で最も少なく、一般人と一般科医師で最も顕著であることが明らかになった。
51	Yonekawa T, Saito Y, Sakuma H, Sugai K, Shimizu Y, Inagaki M, Sasaki M.	Augmented startle responses in opsoclonus-myoclonus syndrome.	Brain Dev 2011;33:335-338.	Opsoclonus-myoclonus症候群における驚愕反射亢進の機序を論じた。
52	Kuwano Y, Kamio Y, Kawai T, Katsuura S, Inada N, Takaki A, Rokutan K	Autism-associated gene expression in peripheral leucocytes commonly observed between subjects with autism and healthy women having autism children	PLoS ONE, 6(9):e24723.Epub 2011 Sep 15.	自閉症スペクトラム障害(ASD)に関連する遺伝子は多く同定されているが、病態との因果関係は十分に説明されていない。本研究は、自閉症と非罹患患者における自閉症特性の分子レベルにおける病態解明を目的として、ASD成人21名とASDのある子を有する母親(本研究のASD群とは血縁関係なし)21名、そしてそれぞれに年齢と性をマッチングしたコントロール群を対象として、末梢白血球の遺伝子発現解析を行った。その結果、ASD群とASD母親群ではコントロール群と比較して、自閉症関連遺伝子(FMR1, MEC2, NEDD4L, SHANK3)に加え、シナプス形成、エキソーム制御、タンパク質合成に関わる126遺伝子の発現が共通して変化し、神経系の分化と機能に関わる遺伝子ネットワークの異常がトピックにランクされることわかつた。これより、末梢血中のこれらの遺伝子の発現パターンは、自閉症フェノタイプの発現の病態解明に有望なツールとなると考えられる。
53	Matsuda H, Mizumura S, Nemoto K, Yamashita F, Imabayashi E, Sato N, Asada T	Automatic Voxel-Based Morphometry of Structural MRI by SPM8 plus Diffeomorphic Anatomic Registration Through Exponentiated Lie Algebra Improves the Diagnosis of Probable Alzheimer Disease	Am J Neuroradiol. 2012 Jun;33(6):1109-14. Epub 2012 Feb 2.	VSRADの改訂を行った
54	Deng J, Hou H, Giunta B, Mori T, Wang Y.J, Fernandez F, Weggen S, Araki W, Obregon D, Tan J	Autoreactive- β antibodies promote APP β -secretase processing.	J Neurochem 120, 732-740, 2012	β アミロイドに対する自己抗体はアミロイド前駆体タンパクの β セクレターゼ切断を促進する作用を持つことを報告
55	Asami J, Inoue YU, Terakawa YW, Egusa SF, Inoue T.	Bacterial artificial chromosomes as analytical basis for gene transcriptional machineries.	Transgenic Res. 2011 Aug;20(4):913-24.	独自に開発した細菌人工染色体を解析単位とするゲノム機能解析法の有効性をまとめた論文。掲載後、ダウンロード数が千件を超えている顕著な成果である。
56	Takeda A, Sudo A, Yamada M, Yamazawa H, Izumi G, Nishino I, Ariga T	Barth syndrome diagnosed in the subclinical stage of heart failure based on the presence of lipid storage myopathy and isolated noncompaction of the ventricular myocardium.	Eur J Pediatr 170(11): 1481-1484, Nov, 2011	Barth症候群の13歳男児を報告した。Barth症候群はミオパチー、白血球減少症、成長障害、心筋症を来すX連鎖遺伝性疾患である。原因遺伝子Tafazzin (TAZ)にp.Gly216Arg変異を見出した。本例は、酸性ナトリウムペプチド高値、孤立性心室心筋非圧縮に加えて、筋生検で脂質蓄積性ミオパチーの所見を認めた。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
57	Wakabayashi C, Numakawa T, Ninomiya M, Chiba S, Kunugi H.	Behavioral and molecular evidence for psychotropic effects in L: -theanine.	Psychopharmacology (Berl). 2012 Feb;219(4):1099-109	マウスを用いて、テアニンの向精神薬作用について検討した結果、感覚情報障害障害(アプレパルシオン)の低下)を改善する効果があることと、持続的投与では、その効果に加えて意欲改善効果もあることも示唆された。また、海馬での脳由来神経栄養因子の増加が観察された。
58	Furuse T, Yamada I, Kushida T, Masuya H, Miura I, Kaneda H, Kobayashi K, Wada Y, Yuasa S, Wakana S.	Behavioral and neuromorphological characterization of a novel Tuba1 mutant mouse.	Behav Brain Res. 227:167-174, 2012.	ENUを用いて、多様なミュータントを作るプロジェクトの中で、Tuba1の特異な部位にミューテーションの入るミュータントを見いだした。この動物は、hyperactivityを示し、リタリンで症状が治まるという点で、新しいAD/HDなどの発達障害のモデルとして用いられると考えられ、今後の飛躍が期待される。
59	Hou, I.C., Suzuki, C., Kanegawa, N., Oda, A., Yamada, A., Yopshikawa, M., Yamada, D., Sekiguchi, M., Wada, E., Wada, K., Ohinata, K.	b-lactotensin derived from bovine b-lactoglobulin exhibits anxiolytic-like activity as an agonist for neurotensin NTS2 receptor via activation of dopamine D1 receptor in mice.	J. Neurochem., 119, 785-790, 2011	牛乳消化産物ペプチドの抗不安様作用を発見した。
60	Hattori K, Tanaka H, Yamamoto N, Teraishi T, Hori H, Kinoshita Y, Matsuo J, Kawamoto Y, Kunugi H.	Blood CADPS2 Δ Exon3 expression is associated with intelligence and memory in healthy adults.	Biol Psychol. 2012 Jan;89(1):117-22.	CADPS2はBDNFやモアミンの開口放出に関わる分子で、その異常変異体CADPS2ΔExon3は自閉症の血液に発現していることが報告されている。BDNFやモアミンは、記憶・学習に重要な役割を果たしているため、健康成人の脳機能と血中CADPS2ΔExon3発現との関係を検討した。その結果、健康成人にも一定数のCADPS2ΔExon3陽性者があり、陽性者は陰性者に比べIQや記憶力が低いことが判明した。すなわち、CADPS2ΔExon3が健康成人の知的機能にも関わり、その測定が発達障害や知的機能のマーカールとして使用できる可能性が見出された。
61	Kwan W, Magnusson A, Chou A, Adame A, Carson MJ, Kohsaka S, Masliah E, Møller T, Ransohoff R, Tabrizi SJ, Björkqvist M, Muchowski PJ.	Bone Marrow Transplantation Confers Modest Benefits in Mouse Models of Huntington's Disease.	J Neurosci. 1, 133-142, 2012	ハンチントン病はハンチンチン遺伝子の異常によって引き起こされる重篤な神経変性疾患である。これまで、ハンチンチン遺伝子が全身の臓器に発現されているにも関わらず、脳にのみ異常があらわれる理由が不明であった。この論文においては、ハンチンチン病モデルマウスの骨髄に正常マウスの骨髄を移植した場合、ハンチンチン病の症状が軽減されることを示した。即ち、異常なハンチンチン遺伝子を持つ骨髄単球形の細胞が異常なハンチンチン遺伝子により機能異常をきたし、病気の発症に一部関与していることを示している。
62	Adachi Y, Sato N, Okamoto T, Sasaki M, Komaki H, Yamashita F, Kida J, Takahashi T, H Matsuda	Brachial and lumbar plexuses in chronic inflammatory demyelinating polyradiculoneuropathy: MRI assessment including apparent diffusion coefficient	Neuroradiology. 53(1): 3-11, 2011	CIDPにおけるMRI診断の評価を行った
63	Takanashi J, Saito S, Aoki I, Barkovich J, Itoh Y, Inoue K.	Brain N-acetylaspartate is increased in mice with hypomyelination.	J Magn Reson Imaging. 2012;35:418-425.	動物用抗解像度MRIを用いたspectroscopyなどによりPelizaeus-Merzbacher病のモデルマウスmsdを解析し、髄鞘形成不全に伴ってNAAおよびNNAGが上昇することを初めて明らかにした。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
64	Ito M, Nakajima S, Fujisawa D, Miyashita M, Kim Y, Shear K, Ghesquiere A, Wall MM	Brief measure for screening complicated grief: Reliability and discriminant validity.	PLoS One 7(2):e31209, 2012.	本論文は、日本人の一般成人を対象として、簡易版悲嘆尺度 (Brief Grief Questionnaire; BGQ) の信頼性と妥当性と検討した。研究参加者は、層化二段抽出により無作為により選ばれた。計915名が分析対象者となった。分析の結果、BGQの信頼性、因子的妥当性、ならびに全般的な精神症状との弁別的妥当性が確認された。
65	Osterhout JA, Josten N, Yamada J, Pan F, Wu SW, Nguyen PL, Panagiotakos G, Inoue YU, Egusa SF, Volgyi B, Inoue T, Bloomfield SA, Barres BA, Berson DM, Feldheim DA, Huberman AD.	Cadherin-6 mediates axon-target matching in a non-image-forming visual circuit.	Neuron. 2011 Aug 25;71(4):632-639.	神経回路形成における細胞接着分子カドヘリン6を先進型遺伝子操作マウスの解析を通して初めて明らかにした国際共同研究。神経科学のトップジャーナルに掲載された顕著な成果である。
66	Kokubo Y, Morimoto S, Shindo A, Hirokawa Y, Shiraiishi T, Saito Y, Murayama S, Kuzuhara H	Cardiac 123I-Meta-Iodobenzylguanidine Scintigraphy and Lewy Body Pathology in a Patient with Amyotrophic lateral Sclerosis and Parkinsonism-Dementia Complex of Kii, Japan.	Mov Disord. 2011 Oct;26(12):2300-1	紀伊半島の筋萎縮性硬化症/パーキンソン症候群認知症のケースのレビュー小体病理とMIBG心筋シンチの関係性を報告。
67	Setoya Y, Sato S, Satake N, Ito J	Care Management in Japanese Acute Psychiatric Units: A National Study.	International Journal of Mental Health, 40(3),pp41-54, 2011.	救急病棟におけるケアマネジメント(CM)の普及の程度を測るために、大規模なクロスセクショナル調査を実施した。ケア会議の開催状況は、病棟によって大きく異なり、多くの病棟で家族や地域サービススタッフは参加していなかった。また、20%の病棟だけが、CMツールを使っていた。CMを行っている病棟では、そうでない病棟と比較し、患者の地域移行率や入院日数が少なかった。
68	Sakuma H, Katayama A, Saito Y, Komaki H, Nakagawa E, Sugai K, Sasaki M.	CD4(+)CD25(high) regulatory T cell in childhood ocular myasthenia gravis.	Brain Dev 2011;33:442-444.	眼球型重症筋無力症のT細胞機能の検討
69	Shiga A, Nozaki H, Yokoseki A, Nihonmatsu M, Kawata H, Kato T, Koyama A, Arima K, Ikeda M, Katada S, Toyoshima Y, Takahashi H, Tanaka A, Nakano I, Ikeuchi T, Nishizawa M, Onodera O.	Cerebral small-vessel disease protein HTRA1 controls the amount of TGF-β 1 via cleavage of proTGF-β 1.	Hum Mol Genet. 2011 May 1;20(9):1800-10.	CARASILの原因遺伝子であるHTRA1とTGF-β 1の機能関連を解析した研究である。HTRA1はproTGF-β 1のpro-domainに結合し切断され、proTGF-β 1はERで処理される。TGF-β 1の量はこの系制御されることを明らかにした。
70	Satake N, Hazama K, Sono T, Ito J	Changes in antipsychotic medication in clients of assertive community treatment in Japan: a one-year follow up.	Clinical Practice & Epidemiology in Mental Health 7:1-3, 2011.	包括型地域生活支援(ACT)における投薬量の減少の効果について、分割時系列調査(Interrupted time series)を用いて検討した(N=52)。1年の追跡調査の結果、抗精神病薬の量は、平均1,131.3 mg から731.3 mgに有意に減少した(Z = -2.505, p = 0.012)。ACTは、個々の患者の投薬量の減少に貢献すると示唆される。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
71	Shi Z, Hayashi YK, Mitsuhashi S, Goto K, Kaneda D, Choi YC, Toyoda C, Hieda S, Kamiyama T, Sato H, Wada M, Noguchi S, Nonaka J, Nishino I	Characterization of the Asian myopathy patients with VCP mutations.	Eur J Neurol. 19(3): 501-509, Mar, 2012.	VCP変異はIBMPFDの他、家族性ALSの原因でもある。これまでに報告されているアジア人VCP変異は1例のみでありまれな疾患と考えられていた。我々は縁取り空胞を伴うアジア人ミオパチー154家系についてVCP変異をスクリーニングし、6家系7人(4%)に変異を認めた。神経筋症状はこれまで報告されているものより多彩である一方、骨病変の合併はまれであったことから、報告例が少なかった者と考えられた。筋病理学的には、筋原性変化とともに神経原性変化を認め、早期の核およびミトコンドリア異常が重要所見であることを新たに明らかにした。
72	Shi S, Hida A, McGuinness OP, Wasserman DH, Yamazaki S, Johnson CH	Circadian clock gene Bmal1 is not essential; functional replacement with its paralog, Bmal2	Curr Biol 20: 316-21, 2011.	Bmal1ノックアウト動物の活動量パターンは概日リズム性がなくなることから、Bmal1遺伝子は概日時計システムに必須な遺伝子であると考えられているが、そのパラログであるBmal2遺伝子の働きはあまり明らかでない。我々は、Bmal2遺伝子が、Bmal1ノックアウト動物に認められる概日時計機能および代謝機能(活動量リズム、代謝リズム、低体重、脂肪沈着)の異常をレスキューすることを示した。Bmal1ノックアウト動物ではBmal1遺伝子のみならずBmal2遺伝子の発現も抑制されていることから、Bmal1ノックアウト動物が示す表現型は、Bmal1、Bmal2両遺伝子の機能障害に起因すると考えられる。これらの知見から、Bmal12遺伝子も概日時計機能および代謝機能を有し、同機能において今まで考えられていたよりも重要な役割を担っている可能性が示唆された。
73	Hiroyuki Suzuki, Yoshitake Kaneita, Yonewatsu Osaki, Masumi Minowa, Hideyuki Kanda, Kenji Suzuki, Kiyoshi Wada, Kenji Hayashi, takashi Ohida	Clarification of the factor structure of the 12-item General Health Questionnaire among Japanese adolescents and associated sleep status	Psychiatry Research 188: 138-146, 2011.	日本の思春層を代表する対象に対して、精神健康状態と睡眠との関係を調べた。その結果、睡眠時間が7時間未満の群では抑うつ/不安傾向と積極的感情の喪失傾向が強いのに対して、8時間以上の群では積極的感情の喪失傾向のみが強いことが示唆された。
74	Matsuoka RL, Chivatakarn O, Badea TC, Samuels IS, Cahill H, Katayama K, Kumar SR, Suto F, Chédotal A, Peachey NS, Nathans J, Yoshida Y, Giger RJ, Kolodkin AL	Class 5 transmembrane semaphorins control selective Mammalian retinal lamination and function	Neuron. 71:460-473, 2011	網膜は光感受性細胞の細胞体と情報伝達のレベルを送る軸索終末が細胞種により異なる層に、終末を作り情報の混乱を防いでいる。しかし、この美しい構造がどのようにして出来るかの原理は不明であった。この研究は、セマフォリンという分子がこの結合を形成するのに重要な役割を演じているのを示した研究で、網膜の再生医療などに強いインパクトを与えると考えられる。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
75	Matsumoto T, Azekawa T, Uchikado T, Ozaki S, Hasegawa N, Takekawa Y, Matsushita S	Comparative study of suicide risk in depressive disorder patients with and without problem drinking	Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 529-532, 2011	本研究の目的は、問題飲酒の有無によってうつ病性障害患者におけるうつ状態の重症度、ならびに自殺リスクがどのように異なるかを明らかにすることにある。対象は、2009年12月に5箇所の精神科クリニックを受診したうつ病患者784名(男性287名, 女性497名)である。情報収集は、K10, AUDIT (Alcohol Use Disorder Identification Test), およびM.I.N.I. (Mini International Neuropsychiatric Interview)の自殺傾向の質問文をそのまま採用したなどから構成される、無記名の自記式調査票によって行った。得られた結果は、男女それぞれについて、AUDIT得点によって分類された3群間(問題飲酒なし群・中等度問題飲酒群・重度問題飲酒群)について、K10ならびにM.I.N.I.得点を比較した。その結果、男性うつ病患者では、問題飲酒の有無や重症度によってK10得点やM.I.N.I.得点に有意差は認められなかったが、女性の場合には、中等度以上の問題飲酒を呈するだけでもK10得点とM.I.N.I.得点が顕著に高くなることが明らかになった。以上のことから、女性のうつ病患者の診療では、依存水準はもとより、通常範囲内のものも含めて、飲酒状態に十分な注意を払う必要がある可能性が示唆された。
76	Manit Srisrapanont, Suwanna Arunpongpaal, Kiyoshi Wada, John Marsden, Robeft Ali, Ronnachai Kongsakon	Comparison of methamphetamine psychosis and schizophrenic symptoms: A differential item functioning analysis	Progress in Neuro-Psychopharmacology & Biological Psychiatry 35: 959-964, 2011.	覚せい剤精神病患者と統合失調症患者の症状について、その構成要素と重篤度を比較した。統計解析の結果、両疾患とも、その症状群は3つの構成要素に分けることができ(陰性症状、陽性症状、不安・抑うつ症状)、その重篤度も同じ程度であることが示唆された。
77	Matsuoka Y, Nishi D, Nakaya N, Sone T, Noguchi H, Hamazaki K, Hamazaki T, Koïdo Y	Concern over radiation exposure and psychological distress among rescue workers following the Great East Japan Earthquake	BMC Public Health 2011 March 28, 12:249	東日本大震災直後、被災地で活動を行った緊急医療援助隊のうち、原発事故による放射線被ばくを心配していた人は、そうでない人に比して精神的苦痛(うつ症状、PTSD症状)が強いことを見出した。
78	Honda S, Satomura S, Hayashi S, Imoto I, Nakagawa E, Goto Y, Inazawa J	Concomitant microduplications of MECP2 and ATRX in male patients with severe mental retardation.	J Hum Genet.2012; 57(1):73-7.	精神遅滞に関係する2つの遺伝子MeCP2とATR-Xとをそれぞれ含む領域の重複が認められた。
79	Ishiyama A, Saito Y, Sugai K, Sasaki M, Yamazaki H, Kohama M	Concurrence of multiple types of eyelid synkinesia in a patient with congenital anomalies.	Brain Dev 2012;34:140-142.	Marcus-Gunn現象を含む眼瞼異常運動を来した先天奇形症候群の1例を報告した。
80	Sato S, Ohi T, Nishino I, Sugie H	Confirmation of the efficacy of vitamin B6 supplementation for McArdle disease by follow-up muscle biopsy.	Muscle Nerve 45: 436-440, Mar, 2012.	McArdle病に有効な治療法はない。McArdle病の日本人例に対してビタミンB6補充療法を行ったところ、筋アオスフォリラーゼ活性が上昇するとともに、前腕運動試験で乳酸値が上昇するようになった。ビタミンB6補充は筋アオスフォリラーゼの残存酵素活性を高めると考えられる。
81	Zhang, M., Deng, Y., Luo, Y., Zhang, S., Zou, H., Cai, F., Wada, K., Song, W.	Control of BACE1 and APP processing by ubiquitin carboxyl-terminal hydrolase L1 in Alzheimer's Disease Pathogenesis.	J. Neurochem., 120, 1129-138, 2012.	神経変性疾患原因蛋白質の一つであるUCH-L1がアルツハイマー病原因物質であるAbetaの産生に関わるBACEの分解を促進することを見いだし、アルツハイマー病の治療法開発戦略において、UCH-L1の賦活化が重要である可能性を示した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
82	Aihara T, Takeda Y, Takeda K, Yasuda W, Sato T, Otaka Y, Tanaka S, Hanakawa T, Honda M, Liu M, Kawato M, Sato M, Osu R	Cortical current source estimation from electroencephalography in combination with near-infrared spectroscopy as a hierarchical prior	Neuroimage 59: 4006-21, 2012	機能的MRIとNIRSの空間情報を用いた階層ベイズ法により、運動中のEEG活動から精密な特徴量を抽出することができた。NIRSとEEGの組み合わせがbrain machine interfaceなどの治療的応用に有用である可能性を示す。
83	Sado M, Yamauchi K, Kawakami N, Ono Y, Furukawa T A, Tsuchiya M, Tajima M, Kashima H, Nakane Y, Nakamura Y, Fukao A, Horiguchi I, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Orui, M, Funayama K, Naganuma Y, Hata Y, Kobayashi M, Ahiko T, Yamamoto Y, Takeshima T, Kikkawa T	Cost of depression among adults in Japan in 2005	Psychiatry and Clinical Neurosciences, 65(5), 442-450, 2011	目的: 大うつ病は20年までに世界において、病が社会にもたらす負担に対する最大の貢献者となると予想される。先行研究は、うつ病の社会的コストは、心臓血管性疾患やエイズのような他の主な疾患のコストよりも小さくないことを示してきた。にもかかわらず、うつ病のコストは日本においては調査されたことがない。本研究の目的は、日本におけるうつ病の総コストを見積もり、その負担の性質を明確化することであった。 方法: うつ病の総コストを測定するために、有病率ベースのアプローチが採用された。うつ病の総コストは、直接的コスト、疾病コスト、死亡コストで成るものとした。本研究に含まれる診断は、ICD-10によるdepressive episodesと recurrent depressive disorder、またはDSM-IVによるmajor depressive disorderであった。データは公的に利用可能な統計とWorld Mental Health Japan Surveyのデータベースより集められた。 結果: 2005年の日本の成人におけるうつ病の総コストは2兆円と推定された。直接的コストは0.18兆円であった。死亡コストが0.88兆円である一方、疾病コストは0.92兆円であった。 結論: うつ病により日本にもたらされる社会的コストは、他の先進国と同様に膨大である。低い疾病コストと非常に高い死亡コストが日本における特徴である。自殺を予防する効果的な介入が、うつ病の社会的コストを低減することができるだろう。
84	Yoshida T, Suga M, Arima K, Muranaka Y, Tanaka T, Eguchi S, Lin C, Yoshida S, Ishikawa M, Higuchi Y, Seo T, Ueoka Y, Tomotake M, Kaneda Y, Darby D, Maruff P, Iyo M, Kasai K, Higuchi T, Sumiyoshi T, Ohmori T, Takahashi K, Hashimoto K.	Criterion and construct validity of the CogState Schizophrenia Battery in Japanese patients with schizophrenia.	PLoS One, 2011;6(5):e20469. Epub 2011 May 26	統合失調症の簡易認知機能評価方法であるCogState Schizophrenia Batteryの日本語版を日本人統合失調症患者に適用し、有効な方法であることを証明した。
85	Pichavant C, Aartsma-Rus A, Clemens PR, Davies KE, Dickson G, Takeda S, Wilton SD, Wolff JA, Wooddell CI, Xiao X, Tremblay JP	Current status of pharmaceutical and genetic therapeutic approaches to treat DMD.	Mol Ther. 19: 830-840, 2011	難治性のDuchenne型筋ジストロフィーに対する新規治療法の中で、最も有望な薬物治療および遺伝子治療の最新動向について、世界を代表する本研究分野の研究者と共に前臨床的研究と治療の観点から概説した。
86	Ito K, Kurihara K, Ishibashi A, Morooka M, Mitsuimoto T, Minamimoto R, Kubota K.	Cut-off value for normal versus abnormal right-to-left shunt percentages using 99mTc-macroaggregated albumin	Nucl Med Commun 32(10): 936-40, 2011	99mTc-MAAの基準値を算出した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
87	Kenichi Tomiyama K, Mashiko Funada	Cytotoxicity of synthetic cannabinoids found in "Spice" products: the role of cannabinoid receptors and the caspase cascade in the NG 108-15 cell line.	Toxicol Lett. 10;207(1): 12-17, 2011.	違法ドラッグとして、「スパイス」が流通している。その主要成分である合成カンナビノイドの細胞毒性を、NG108-15細胞を利用して評価した。その結果、強力な毒性を有し、カスパーゼ経路を介してアポトーシスが誘導されることが明らかになった。
88	Kuriyama K, Honma M, Koyama S, Kim Y	D-cycloserine Facilitates Procedural Learning but not Declarative Learning in Healthy Humans: A Randomized Controlled Trial of the Effect of D-cycloserine and Valproic Acid on Overnight Properties in the Performance of Non-emotional Memory Tasks.	Neurobiol Learn Mem 95(4): 505-509, 2011.	NMDA部分アゴニストであるD-サイクロセリンと、ヒストンアセチル化酵素阻害作用を持つβ-グルタミン酸の、非情動記憶および手続き記憶への影響を確かめるため、ランダム化プラセボ対象試験を行い、D-サイクロセリンによる、睡眠依存性の手続き記憶強化促進作用を明らかにした。
89	Ikezawa K, Ishii R, Iwase M, Kurimoto R, Canuet L, Takahashi H, Nakahachi T, Azechi M, Ohi K, Fukumoto M, Yasuda Y, Iike N, Takaya M, Yamamori H, Kazui H, Hashimoto R, Yoshimine T, Takeda M.	Decreased alpha event-related synchronization in the left posterior temporal cortex in schizophrenia	a magnetoencephalography-beamformer study. Neurosci Res. 2011 Nov;71(3):235-43.	統合失調症患者22名と性・年齢マッチした健常群20名を対象に、閉眼時α帯域の同期を脳磁計で計測し、臨床指標との関連を検討した。事象関連同期(ERS)の発生源推定はmultiple source beamformer、群間比較はBrain Voyagerを用いて行った。左後側頭領域のupper α帯域(10-13Hz)のERSは、統合失調症群では健常群と比べ減弱しており、視覚記憶課題成績と相関した
90	Shimizu-Fujwara M, Komaki H, Nakagawa E, Mori-Yoshimura M, Oya Y, Fujisaki T, Tokita Y, Kubota N, Shimazaki R, Sato K, Ishikawa T, Goto K, Mochizuki H, Takanoha S, Ogata K, Kawai M, Konagaya M, Miyazaki T, Tatara K, Sugai K, Sasaki M.	Decreased resting energy expenditure in patients with Duchenne muscular dystrophy.	Brain Dev 2012;34:206-212.	Duchenne型進行性筋ジストロフィーの多数の患者で、呼吸エネルギー代謝量を計算したところ、エネルギー消費が非常に減少していることが確認できた。
91	Kaido T, Otsuki T, Kaneko Y, Takahashi A, Omori M, Okamoto T	Deep brain stimulation for Tourette syndrome: A prospective pilot study in Japan.	Neuromodulation 14: 123-129, 2011	トアレット症候群に対する脳深部刺激療法 (DBS) の有効性に関する報告
92	Takada H, Yuasa S, Araki T.	Demyelination can proceed independently of axonal degradation during Wallerian degeneration in wild mice.	Eur J Neurosci. 34(4):531-537, 2011	ワラー変性が著明に遅延するモデルマウスにおいて、神経傷害後、形態的に健全な軸索の周りでも初期の脱髄は通常のマウスと同じように進行し、その後も徐々に進行していくことから、ワラー変性に伴って見られる脱髄には、神経軸索変性と無関係に進行する成分と、軸索変性を必要とする成分が存在することを明らかにした。
93	Tateyama M, Fujihara H, Itoyama Y	Dendritic cells in muscle lesions of sarcoidosis.	Hum Pathol 42:340-346, 2011	サルコイドーシスによる筋障害のマカニズムを樹状細胞の関与を中心に研究した
94	Matsumoto T, Matsushita S, Okudaira K, Naruse N, Cho T, Muto T, Ashizawa T, Konuma K, Morita N, Ino A	Depression and suicide risk of outpatients at specialized hospitals for substance use disorder: Comparison with depressive disorder patients at general psychiatric clinics	Japanese Journal of Alcohol and Drug Dependence 46 (6): 554-559, 2011.	7箇所の依存症専門医療機関に受診したSUD患者1,419名と、5箇所の一般精神科医療機関に受診したDD患者917名を対象として、自記式調査票による調査を行った。その結果、SUD患者は全体としてはDD患者よりもうつおよび自殺傾向が軽微であったが、薬物乱用を伴う者、あるいは女性の場合には、DD患者よりもはるかに深刻な自殺傾向が認められた。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
95	Iwata M, Hazama GI, Nakagome K.	Depressive state due to isolated adrenocorticotrophic hormone deficiency underlies school refusal.	Psychiatry Clin Neurosci, 66(3): 243-244, 2012.	12歳時、父親の死を契機に登校拒否を伴ううつ病を発症した症例報告。父親の命日がある春から夏にかけてうつ症状の増悪を認め、抗うつ薬への反応が乏しかった患者に対して、19歳時、うつ症状増悪時に身体的精査を行い、ACTH値および cortisol値の低下が認められ、その他の諸検査の結果JADと診断され、ヒドロコルチゾン投与後1週間で劇的な症状の改善が認められた。治療抵抗性うつ病については、内分泌に関する精査を行う必要性が示唆された。
96	Matsumoto A, Susaki E, Onoyama I, Nakayama K, Hoshino M, Nakayama KI	Deregulation of the p57-E2F1-p53 axis results in nonobstructive hydrocephalus and cerebellar malformation in mice.	Mol Cell Biol 31, 4176-4192, 2011	p57-E2F1-p53という分子経路が、小脳発生において細胞死を司ることによって、小脳発生に関与しているとうことを示した論文。また、この経路が破綻すると、水頭症が引き起こされることも示している。
97	Sasakura K, Hanaoka K, Shibuya N, Mikami Y, Kimura Y, Komatsu T, Ueno T, Terai T, Kimura H, Nagano T.	Development of a highly selective fluorescence probe for hydrogen sulfide.	J. Am. Chem. Soc. 133, 18003-18005, 2011	生理活性物質硫化水素の選択的かつ高感度な蛍光プローブを開発した。これによって、生体内硫化水素の動態がリアルタイムで計測することが可能になる。
98	Takahashi K, Saitoh A, Yamada M, Iwai T, Inagaki M, Yamada M.	Dexamethasone indirectly induces Ndrdg2 expression in rat astrocytes.	Journal of Neuroscience Research 90(1):160-6,2012	脳内でglucocorticoid処置やストレス処置で発現が変化し、細胞増殖、分化、アポトーシスとの関連が報告されているN-myc downstream-regulated gene 2 (Ndrdg2)は、glucocorticoid response element half-size (GER1/2)により調節されると仮説されていたが、それとは異なることを見出した。Ndrdg2発現はdexamethasoneにより間接的にDNAレベルで調節されており、NFkBやPax5などの転写因子結合サイトへの結合を介していることが示唆された。
99	Sasayama D, Hori H, Teraishi T, Hattori K, Ota M, Matsuo J, Kawamoto Y, Kinoshita Y, Hashikura M, Koga N, Okamoto N, Sakamoto K, Higuchi T, Amano N, Kunugi H	Difference in Temperament and Character Inventory scores between depressed patients with bipolar II and unipolar major depressive disorders	J Affect Disord. 132(3): 319-24, 2011	単極性うつ病患者90名、双極II型障害患者36名、健常対照者306名に対して、Temperament and Character Inventory (TCI)を用いて、気質・性格プロフィールを比較した。自己超越および新奇性追求の得点は、女性の単極性うつ病患者と双極II型障害患者との間で有意な差があり、両疾患の鑑別に有用である可能性が示唆された。
100	Moriguchi Y, Negreira A, Weierich M, Dautoff R, Dickerson BC, Wright CI, Barrett LF	Differential hemodynamic response in affective circuitry with aging: an fMRI study of novelty, valence, and arousal.	J Cogn Neurosci. 2011 May;23(5):1027-41.	刺激の「新奇性」は、情動のなかで大きな割合を占めており、扁桃体をはじめとする情動ネットワークの活動を引き起こすことが知られている。この研究では、人間のライフスパンを通して、この生存に重要な情動の新奇性が保たれるかどうかをfMRIを用いて検証した。19人の若年者と、22人の老年者に対して、情動的な場面の視覚刺激をし、その主観的なインパクトの評価をもらいながら、脳血流を測定した。その結果、扁桃体の活動の大きさのピークは若年者と老年者で変わらなかつたが、老年者は刺激提示からのイベント関連の脳血流が「瘦せ細った」形になり、その形状の変化は、眼窩前頭野を含む領域の脳活動との機能的連関に影響を受けていた。この結果は、加齢に伴って、扁桃体の新奇性への反応自体は保たれるものの、他の領域の修飾をうける、という情動制御の変化のあり方を示唆するものである。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
101	Matsumoto Y, Tsunekawa Y, Nomura T, Suto F, Matsumata M, Tsuchiya S, Osumi N.	Differential proliferation rhythm of neural progenitor and oligodendrocyte precursor cells in the young adult hippocampus.	PLoS One.;6(11):e27628, 2011.	希突起膠細胞の前駆細胞が、若年の海馬で分裂し増え続け、やがて増え続ける神経細胞の分裂とタイムイングが相補的になっていることを示した。また、この分裂には、希突起膠細胞はCyclin D1、神経細胞はCyclin D2が関与していることを示した。上記の事実は、希突起膠細胞の前駆細胞が海馬の可塑性に関与している可能性を示しており、その制御により記憶の制御を行なえる可能性をしめした。
102	Kawaguchi M, Song JY, Irie K, Murakami Y, Nakayama K, Kitamura S.	Disruption of Sema3A expression causes abnormal neural projection in heavy oil exposed Japanese flounder larvae.	Mar Pollut Bull 63(5-12):356-361, 2011	重油による奇形を硬骨魚類を用いて調べた。その結果、顔の変形はSEMA3の関与によるものである事を示した。
103	Tsubomi H, Ikeda T, Hanakawa T, Hirose N, Fukuyama H, Osaka N	Dissociable neural activations of conscious visibility and attention	J Cogn Neurosci 24(2): 496-506, 2012	機能イメーシングを用いて視覚的見えと注意の過程を分離し、後頭部の活動が見えに関わり、前頭葉の活動が注意に関わることを示した
104	Pfeffer, M., Plenzig, S., Gispert, S., Wada, K., Korf, H.W., von Gall, C.	Disturbed sleep/wake rhythms and neuronal cell loss in lateral hypothalamus and retina of mice with a spontaneous deletion in the ubiquitin c-terminal hydrolase L1 gene.	Neurobiol. Age. , 33, 393-403, 2012	神経変性疾患原因蛋白質の一つであるUCH-L1が睡眠、概日リズムと関わっていることを発見した。脱ユビキチン化酵素と植物性機能の関連性で着目すべき発見である。
105	Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y, Komaki G, Akabayashi A	Does sleep aggravate tension-type headache?: An investigation using computerized ecological momentary assessment and actigraphy.	BioPsychoSocial Medicine 5:10, 2011	睡眠不足と睡眠過多は両方とも緊張型頭痛の増悪因子として挙げられてきた。しかしながら先研究は質問票や面接で患者に増悪因子を尋ね回答させたものであり、睡眠と頭痛の実際の関連ではなく緊張型頭痛の増悪因子に関する患者の信念を反映したものである可能性がある。本研究ではecological momentary assessmentで痛みを評価しactigraphyで客観的に睡眠を評価することにより、日常生活下での睡眠と頭痛の経時的な関係を直接調べた。その結果、睡眠時間と翌日の頭痛には正の関連が、睡眠の質の自己評価と翌日の頭痛には負の関連が認められ、睡眠時間が長いこと、睡眠の質が低いことが緊張型頭痛の増悪因子となる可能性が示唆された。
106	Irahara K, Saito Y, Sugai K, Nakagawa E, Saito T, Komaki H, Nabatame S, Kaneko Y, Hotate M, Sasaki M.	Effect of acetazolamide on epileptic apnea in migrating partial seizures in infancy.	Epilepsy Res 2011;96:185-189.	MPSI(乳児焦点移動性部分発作)のてんかん性無呼吸に対してアセタゾラミドが有効であった。
107	Yonekawa T, Nakagawa E, Takeshita E, Inoue Y, Inagaki M, Kaga M, Sugai K, Sasaki M, Kaidou T, Takahashi A, Ohtsuki T	Effect of corpus callosotomy on attention deficit and behavioral problems in pediatric patients with intractable epilepsy.	Epilepsy & Behavior, Volume 22, Issue 4, December 2011, Pages 697-704	難治てんかんの小児で注意機能や行動障害に及ぼす脳梁離断術(CC)の効果を検討した。2005年8月-2010年4月にCCを受けた小児15名(年齢3.1-17.9歳)で、術前後の注意機能や行動障害の変化をCBCLで評価した。全例drop attackやhead noddingを有し、対象発作(TS)と考えた。脳波変化から改善群(8例)、不変群(7例)に分けると、改善群では良好なTS予後に加え有意な注意機能の改善が得られた。CCは、TSの緩和に加え、脳波と共に注意機能も改善させる。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
108	Kuriyama K, Honma M, Soshi T, Fujii T, Kim Y	Effect of D-cycloserine and valproic acid on the extinction of reinstated fear-conditioned responses and habituation of fear conditioning in healthy humans: a randomized controlled trial.	Psychopharmacology (Berl). 218(3):589-597. 2011.	NMDA受容体部分作動薬であるD-サイクロセリン(DCS)は恐怖記憶の消去学習を促進することが動物研究で確かめられている。しかし、ヒトの恐怖記憶消去への有効性を明確に示した研究はない。これらの薬物はPTSDにおける持続暴露療法の効果促進薬としての期待が高く、本研究ではヒトにおけるDCSの消去学習促進効果を、視覚刺激と指先電気刺激をペアリングした恐怖条件付けパラダイムを用い検討し、DCSは消去学習過程自体を顕在的に促進しないが、再発刺激を与えた際の脆弱性を減ずる効果があることを明らかにした。
109	Matsumura K, Noguchi H, Nishi D, Matsuoka Y	Effect of omega-3 fatty acids on the psychological assessment for secondary prevention of posttraumatic stress disorder: an open-label pilot study.	Global J Health Science 4(1): 3-9, 2012	ω3系脂肪酸によるPTSD予防のオープン試験に参加した身体外傷患者を対象に、スクリーンおよび驚愕音に対する自律神経系反応として血圧、心拍数、皮膚コンダクタンスを調べた。その結果、PTSDを発症した者はそうでない者と比べて驚愕刺激に対する反応が大きかった。しかしスクリーンタイムシ法による刺激では差を認めなかった。以上より、自律神経系反応を多面的に評価することが重要と考えられた。 [doi:10.5539/hjhs.v4n1ps3]
110	Furusawa Y, Mori-Yoshimura M, Yamamoto T, Sakamoto C, Wakita M, Kobayashi Y, Fukumoto Y, Oya Y, Fukuda T, Sugie H, Hayashi YK, Nishino J, Nonaka I, Murata M	Effects of enzyme replacement therapy on five patients with advanced late-onset glycogen storage disease type II: a 2-year follow-up study.	J Inherit Metab Dis. 35(2): 301-310, Mar, 2012.	遅発型ポンペ病5例において、酵素補充療法の有効性を2年にわたって評価した。全例高度の呼吸障害を有し、6年以上の人口呼吸器使用歴があったが、4例において、筋力、呼吸機能、日常生活動作の改善が認められた。全例において、1年目の方が2年目よりも効果が著しかったものの、2年目においても有意な改善が認められた。著明な呼吸障害が認められる遅発型ポンペ病においても酵素補充療法は有効である。
111	Ikeda C, Saito Y, Sukigara S, Sakuma H, Sugai K, Komaki H, Sasaki M.	Effects of low-dose hydrochlorothiazide on urolithiasis and bone metabolism in severely disabled individuals: a pilot study.	Brain Dev 2011;33:400-405.	重症心身障害児の骨代謝異常と、それによる腎結石の予防にサイアザイド系利尿剤が有効であった報告。
112	Yamauchi T, Semba T, Sudo A, Takahashi N, Nakamura H, Yoshimura K, Koyama H, Ishigami S, Takeshima T.	Effects of psychiatric training on nursing students' attitudes towards people with mental illness in Japan.	International Journal of Social Psychiatry, 57(6), 576-579, 2011.	精神科看護実習前・後における看護学生の精神障害者観に関するレポートの語彙度解析により、実習が学生の精神障害者観に及ぼす影響について検討した。実習を通じ、学生の精神障害者観は概ねネガティブな内容からニュートラルもしくはポジティブな内容に変化した。精神科実習において実際に精神障害者と接することは看護学生の精神障害者観の形成および変容に影響を与えることが示唆された。
113	Kuriyama K, Mishima K, Soshi T, Honma M, Kim Y	Effects of sex differences and regulation of the sleep-wake cycle on aversive memory encoding.	Neurosci Res 70(1): 104-110, 2011.	PTSDの有病率が女性に多いこと、背景メカニズムを明らかにするために、PTSDの病理モデルである恐怖記憶の想起における性差およびそれに関わる睡眠覚醒リズムの影響を検討した。男性に睡眠覚醒リズムによる恐怖記憶想起成績の効果は見られなかったが、女性では有意に習慣的睡眠時刻以降の恐怖記憶想起成績が高まることを明らかにし、女性のトラウマイベントが夜半以降に多いことによるPTSD有病率への影響を考察した。
114	Kikuchi T, Okada M, Nengaki N, Furutsuka K, Wakizaka H, Okamura T, Zhang MR, Kato K	Efficient synthesis and chiral separation of 11C-labeled ibuprofen assisted by DMSO for imaging of in vivo behavior of the individual isomers by positron emission tomography	Bioorg Med Chem 3265-3273, 2011	DMSOの溶媒効果と光学分割を利用して ¹¹ C]Ibuprofenの両異性を効率的に標識合成し、PETでそれぞれの炎症組織への薬物動態を調べ、集積にCOXが関与しないことを明らかにした。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
115	Hori H, Teraishi T, Sasayama D, Fujii T, Hattori K, Ishikawa M, Kunugi H	Elevated cortisol level and cortisol/DHEAS ratio in schizophrenia as revealed by low-dose dexamethasone suppression test	The Open Neuropsychopharmacology Journal 2012, 5, 18-24	統合失調症は視床下部-下垂体-副腎系機能異常と関連することが知られているが、コルチゾール値に関する知見は一致していない。そこで本研究では、低用量のデキサメタゾンを用いたデキサメタゾン抑制テストにより、コルチゾール値とDHEAS値を測定し、コルチゾール/DHEAS比を調べた。統合失調症患者ではコルチゾール値に加えてコルチゾール/DHEAS比が上昇していることが明らかになり、統合失調症におけるHPA系異常が示された。
116	Kaido T, Otsuki T, Takahashi A, Kaneko Y	Epileptic activity in mesial frontal cortex in nocturnal paroxysmal dystonia.	Sleep and Biological Rhythms 2011; 9: 188-191	夜間発作性ジストニアの症状を呈した夜間前頭葉てんかんの治療例。
117	Fujimori J, Nakashima I, Fujihara K, Misu T, Sato S, Itoyama Y	Epitope analysis of cerebrospinal fluid IgG in Japanese multiple sclerosis patients using phage display method	Mult Scler Int. 2011; 5 pages(ID 353417), 2011	多発性硬化症 (MS) の髄液にはオリゴクロナールバンドが存在している。そのIgGの対応抗体の検索研究を行ったところ、EBVやヘルペスウイルスに相同性があるエピトープが多かった。
118	Marutani T, Maeda T, Tanabe C, Zou K, Araki W, Kokame K, Michikawa M, Komano H	ER-stress-inducible Herp, facilitates the degradation of immature nicastrin.	Biochim Biophys Acta-General subjects 1810, 790-798, 2011	ERストレスで誘導されるタンパクHerpが未成熟型のニカストリンの分解促進作用を持つことを報告
119	Sakihara K, Gunji A, Furushima W, Inagaki M	Event-related oscillations in structural and semantic encoding of faces.	Clinical Neurophysiology 2012;123: 270-277.	顔の個別情報の符号化に関連する皮質オシレーションについて検討した。健康成人にて自己顔、既知顔、未知顔に対する脳波を計測した。頭頂部、左側頭部でのδ波ERS反応が0-800msに既知顔へ未知顔より増大し、右側頭部でのβ波ERS反応が400-800msに自己顔へ未知顔より増大した。0-800msのδ波は顔の記憶想起に関与し、400-800msのβ波は自己顔知覚に関連する皮質領域と一致している。これらの反応は、顔の既知性と自己認知を反映する指標となるのではないかと考えられる。
120	Inagaki M	Executive functions in children: Diversity of assessment methodology and its relation to attention deficit hyperactivity disorder (ADHD).	Brain & Development 2011; 33: 454-455.	小児の実行機能評価法は進歩が著しい。行動学的指標や脳機能の面からの解析が最近、進んでいる。著者は抑制機能に注目してスイッチング機能ならびに事象関連電位の成分をADHD児童で解析した。その結果、注意機能、抑制機能など実行系と関わる中枢神経系機能が特異的に障害されていることを客観的に明らかにすることができた。今後は、実行系機能に関する非侵襲的評価が一層進むことが予想される
121	Hattori K, Tanaka H, Wakabayashi C, Yamamoto N, Uchiyama H, Teraishi T, Hori H, Arima K, Kunugi H.	Expression of Ca ²⁺ -dependent activator protein for secretion 2 is increased in the brains of schizophrenic patients.	Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry. 2011 Aug 15;35(7):1738-43.	CADPS2はプレシナプスにおいてBDNFやドーパミン・セロトニンなどの開港放出に関わる分子である。スタンレー研究所の精神疾患死後脳検体(60例)を用い、CADPS2の発現を解析したところ、統合失調症でCADPS2の発現が亢進していることが判明した。
122	Saito Y, Komaki H, Hattori A, Takeuchi F, Sasaki M, Kawabata K, Mitsuhashi S, Tominaga K, Hayashi YK, Nowak KJ, Laing NG, Nonaka I, Nishino I	Extramuscular manifestations in children with severe congenital myopathy due to ACTA1 gene mutations.	Neuromuscul Disord 21(7): 489-493, Jul, 2011	骨格筋型アクチンをコードするACTA1遺伝子変異を伴う3例の優性遺伝性乳児重症型ネマリンミオパチーを報告した。3例とも精神発達遅滞を示すとともに、前頭葉形成不全と脳室拡大を認めた。さらに1例では、骨形成不全、肝腫大、尿管閉鎖などの多発先天性奇形を伴っていた。これらの結果は、胎生期に筋外に発現する骨格筋型アクチンに何らかの機能的役割があることを示している。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
123	Aiba M, Matsui Y, Kikkawa T, Matsumoto T, Tachimori H	Factors influencing suicidal ideation among Japanese adults: From the national survey by the Cabinet Office	Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 468-475, 2011	本研究は、成人の自殺念慮に影響する要因を明らかにすることを目的として、ランダムに抽出された成人1080人を対象として、郵送留め置き法による質問紙調査を実施した。その結果、ストレス、ストレス解消法、社会的支援資源、うつ状態の程度、インターネット上の「自殺系サイト」へのアクセスといった項目のうち、20~50代の成人における自殺念慮に最も関連する要因は、インターネット上の「自殺系サイト」へのアクセスであった。一方、60歳以上の成人では、うつ状態の存在が最も強く自殺念慮に関連していた。
124	Aoki M, Warita H, Mizuno H, Suzuki N, Yuki S, Itoyama Y	Feasibility study for functional test battery of SOD transgenic rat (H46R) and evaluation of edaravone, a free radical scavenger	Brain Res. 25;1382:321-5, 2011	変異SODトランスジェニックALSラットを用いてエダラボンの有効性を検索した研究である。幾種類のアスタキサンチンがエダラボンの有効性が示された。
125	Uezumi A, Ito T, Morikawa D, Shimizu N, Yoneda T, Segawa M, Yamaguchi M, Ogawa R, Matev MM, Miyagoe-Suzuki Y, Takeda S, Tsujikawa K, Tsuchida K, Yamamoto H, Fukada S	Fibrosis and adipogenesis originate from a common mesenchymal progenitor in skeletal muscle.	J Cell Sci, 124(Pt 21):3654-3664, 2011	筋ジストロフィーが進行すると脂肪化・線維化が顕著になり、骨格筋再生を妨げていると考えられており、脂肪化・線維化のメカニズムの解明は治療法を開発するうえで重要である。我々は昨年PDGFR α 陽性の間葉系前駆細胞が変性筋に認められる脂肪細胞の起源であることを示した(Nat Cell Biol. 12:143-52, 2010)。本研究では同じ細胞が線維化にも関わっている事を示した。
126	Fujita M, Mitsubashi H, Isogai S, Nakata T, Kawakami A, Nonaka I, Noguchi S, Hayashi YK, Nishino I, Kudo A	Filamin C plays an essential role in the maintenance of the structural integrity of cardiac and skeletal muscles, revealed by the medaka mutant zacro.	Dev Biol. 361(1): 79-89, Jan, 2012	アクチン結合タンパク質であるフィラミンC遺伝子変異は心筋障害を伴う筋原線維性ミオパシーをひき起こす。我々はフィラミンC欠損マダカザクロの解析をし、心筋は拡張による心破裂を、骨格筋は筋収縮に伴う進行性の筋障害を引き起こすことを明らかにし、フィラミンCの筋細胞構造維持の重要性を示した。
127	Maruyama H, Kitajima H, Yonemoto N, Fujimura M.	Frequent Use of Fresh Frozen Plasma Is a Risk Factor for Venous Thrombosis in Extremely Low Birth Weight Infants: A Matched Case-control Study.	Acta Med Okayama. 2012 Feb;66(1):61-6.	新鮮凍結血漿(FFP)の頻回使用が極低出生体重児における静脈血栓のリスク因子であるかどうかをマッチドケースコントロール研究で検討し、日齢5までに>50mL/kgのFFP使用が影響することが示された。
128	Uezato A, Kimura-Sato J, Yamamoto N, Iijima Y, Kunugi H, Nishikawa T	Further evidence for a male-selective genetic association of synapse-associated protein 97 (SAP97) gene with schizophrenia.	Behav Brain Funct. 2012 Jan 6;8(1):2.	シナプス関連タンパク質SAP97は、各種のグルタミン酸受容体の局在を制御する足場タンパク質である。われわれは、以前にこの遺伝子の多型が統合失調症と男性特異的に関連することを報告したが、今回はその追試を行った。その結果、独立したサンプルでもrs9843659が劣性モデルで男性特異的に有意に関連していた。以上から、既報の結果を支持する証拠を得た。
129	Seki, K. and Fetz,EE.	Gating of Sensory Input at Spinal and Cortical Levels during Preparation and Execution of Voluntary Movement.	Journal of Neuroscience, 32(3): 890-902, 2012	手の運動を行っているサルの手皮膚感覚応答を脊髄と大脳皮質で同時に測定する方法を新たに開発した。その結果、大脳皮質で記録される運動中の感覚抑制は脊髄ですでに始まっていることを初めて証明した。さらに、大脳皮質の運動野においては運動中だけでなく運動準備の段階からこの抑制が始まっていた。それによって運動時の感覚抑制の役割の1つが、より良い運動の準備状態を作るためであることが示唆された。この結果は、自他の行動識別(自分の行動と、他人の行動により受け身で起こった運動の識別)に用いられている神経基盤の1つと考えられ、それが障害される統合失調症などの病態理解や診断に役立つことが期待される。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
130	Sun H, Satake W, Zhang C, Nagai Y, Tian Y, Fu S, Yu J, Qian Y, Qian Y, Chu J, Toda T.	Genetic and clinical analysis in a Chinese parkinsonism-predominant spinocerebellar ataxia type 2 family.	J Hum Genet. 56(4):330-4, 2011	パーキンソン病症状を有する2型脊髄小脳変性症の責任遺伝子座が通常の2型脊髄小脳変性症の責任遺伝子座と異なることを示した。
131	Okumura T, Okochi T, Kishi T, Ikeda M, Kitajima T, Kinoshita Y, Kinoshita Y, Kawashima K, Tsunoka T, Fukuo Y, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Ujike H, Iwata N.	Genetic Association Analysis of NOS1 and Methamphetamine-Induced Psychosis Among Japanese.	Curr Neuropharmacol. 9: 155-9, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、NOS1 遺伝子多型との相関研究を報告した。
132	Okochi T, Kishi T, Ikeda M, Kitajima T, Kinoshita Y, Kawashima K, Okumura T, Tsunoka T, Fukuo Y, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Iyo M, Sora I, Ozaki N, Ujike H, Iwata N.	Genetic association analysis of NOS3 and methamphetamine-induced psychosis among Japanese.	Curr Neuropharmacol. 9: 151-4, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、NOS3 遺伝子多型との相関研究を報告した。
133	Kumamaru E, Numakawa T, Adachi N, Kumugi H.	Glucocorticoid suppresses BDNF-stimulated MAPK/ERK pathway via inhibiting interaction of Shp2 with TrkB.	FEBS Lett. 2011 Oct 20;585(20):3224-8. Epub 2011 Sep 19.	脳由来神経栄養因子BDNFの機能低下とグルココルチコイド増加は、共にうつ病発症に関係するとされるが、両者の相互作用についてはほとんど分かっていない。今回、グルココルチコイド曝露に起因したBDNF依存性の神経細胞内のERKシグナルの抑制が、フォスファターゼshp2とBDNF受容体のTrkBとの結合の低下を原因とすることを発見した。
134	Ichikawa, D., M. Mizuno, T. Yamamura and S. Miyake	GRAIL (gene related to anergy in lymphocytes) regulates cytoskeletal reorganization through ubiquitination and degradation of Arp2/3 subunit 5 and coronin 1A.	J. Biol. Chem. 286: 43465-43474, 2011	自己免疫疾患の発症抑制状態である「免疫寛容」の維持に必要な分子として、新たにGRAILを同定した。GRAILは細胞骨格の形成・維持に重要なタンパク質であることを示し、その結合因子の同定にも成功した。
135	Kim Y	Great East Japan Earthquake and Early Mental-health-care Response.	Psychiatry and Clinical Neurosciences: 539-548,2011.	東日本大震災を受けて、件の境界を越えたところのケアチームの組織化、既存の精神医療の継続、薬物の供給確保などの対策が迅速に取られた。また急性期に被災者の恐怖を聞き出すとする方法についての批判的な検討が行われた。国立精神・神経医療研究センターとしてはいち早く情報支援サイトも立ち上げ、もっとも信頼されるデータベースとなった。精神神経学会でも対策本部が立ち上げられ、支援に当たった。
136	Numakawa T, Yamamoto N, Chiba S, Richards M, Ooshima Y, Kishi S, Hashido K, Adachi N, Kumugi H.	Growth factors stimulate expression of neuronal and glial miR-132	Neurosci Lett 2011 Nov 21;505(3):242-7.	脳神経系での小さなRNAの働きが目ざされている。我々は既に、脳由来神経栄養因子(BDNF)によるマイクロRNA132 (miR132) の発現増加と、それによるシナプス蛋白質増強を報告しているが、今回、BDNF以外の栄養因子による効果を神経細胞やグリア細胞を用いて解析した。そして塩基性線維芽細胞増殖因子が、神経、グリア細胞の双方に働きかけ、miR132を増加させることを見出した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
137	Fukada S, Yamaguchi M, Kokubo H, Ogawa R, Uezumi A, Yoneda T, Matev MM, Motohashi N, Ito T, Zolkiewska A, Johnson RL, Saga Y, Miyagoe-Suzuki Y, Tsujikawa K, Takeda S, Yamamoto H	Hes1 and Hes3 are essential to generate undifferentiated quiescent satellite cells and to maintain satellite cell numbers.	Development. 138:4609-4619, 2011	我々は以前Notchの標的遺伝子Hes3が静止期にある筋衛星細胞に特異的に発現している事を報告したが(Stem Cells 2007; 25:2448-59)、本研究では、筋衛星細胞の自己複製と未分化性維持にHes1とHes3が必須であることを遺伝子変異マウスを用いて明らかにした。
138	Kawashima H, Watanabe K, Morishima Y, Ioi H, Kashiwagi Y, Miyajima T, Takekuma K, Nishino I, Numabe H;	High concentration of middle chain fatty acid in a case of Duchenne muscular dystrophy with severe mental retardation.	Pediatr Int. 54(1): 137-140, Feb, 2012.	染色体異常によるデュシェンヌ型筋ジストロフィーの2ヶ月月男児を報告した。本例は、精神遅滞を合併するとともに中鎖脂肪酸濃度が上昇していた。染色体異常による何らかの遺伝子異常が、デュシェンヌ型筋ジストロフィーとしては非典型的な表現型の原因となっていると考えられた。
139	Iwata M, Shirayama Y, Ishida H, Hazama GI, Nakagome K	Hippocampal astrocytes are necessary for antidepressant treatment of learned helplessness rats.	Hippocampus, 21(8): 877-884, 2011	学習性無力ラットの歯状核、CA1、CA3領域における星状細胞の増加は、イミプラミンによる治療によって減少する傾向が見られた。一方、フルオロクエン酸によって星状細胞機能を抑制するとイミプラミンによる抗うつ様効果は認められなくなった。一方、フルオロクエン酸投与は薬物投与を行わなかったラットには何も影響をもたらしなかった。歯状回、CA3領域における星状細胞はイミプラミンの抗うつ様効果の発現に寄与することが示唆された。
140	Kita, Y. & Hosokawa	History of autism spectrum disorders: Historical controversy over the diagnosis.	東北大学大学院教育学研究科研究年報, 59(2), 147-166.	本研究では、自閉性障害の最初の研究報告から自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorders:以下 ASD)の概念までの歴史的な変遷を概観し、その変遷が診断に与えた影響を考察した。また、今日的にASDの概念が有する利点と問題点を示した。ASDの概念は、障害名にとられず、臨床症状に合わせた教育的支援を促すことや、自閉性障害とアスペルガー障害に共通した神経基盤を解明する可能性を秘めている。一方、ASDの概念にとりて必須となる、障害の重症度を評価する基準の確立は遅れていると述べられた。
141	Yuru Terasawa, Hirokata Fukushima, Satoshi Umeda	How does interoceptive awareness interact with the subjective experience of emotion? An fMRI Study	Human Brain Mapping, DOI: 10.1002/hbm.21458	感情を主観的に経験するためには、身体内部状態を参照することが重要であることが、提唱されてきた。しかし、この2者の関係については、常に議論が重ねられてきた。本論文では、fMRIを用いて、身体内部状態を評価するときと、感情を評価するときの神経基盤の共通性・独自性を検討した。この結果、身体状態の内部を評価する際に重要であると考えられてきた島皮質と前頭葉腹内側部の活動が、感情評価時にも活動し、感情の評価には身体状態を参照することが不可欠な過程であることが支持された。
142	Mikami Y, Shibuya N, Kimura Y, Nagahara N, Yamada M, Kimura H.	Hydrogen Sulfide Protects the Retina from Light-induced Degeneration by the Modulation of Ca2+ Influx	J. Biol. Chem. 286, 39379-39386, 2011	生体活性物質硫化水素が細胞内への過剰なCa流入を抑えることによつて、視神経を光障害から保護することを示した。
143	Mizuno H, Nakamura A, Aoki Y, Ito N, Kishi S, Yamamoto K, Sekiguchi M, Takeda S, Hashido K	Identification of Muscle-Specific MicroRNAs in Serum of Muscular Dystrophy Animal Models: Promising Novel Blood-Based Markers for Muscular Dystrophy.	PLoS One. 30; 6(3):e18388, 2011	筋ジストロフィーとmdxマウスを用いて、血清で検出される筋特異的miRNA (miR-1, miR-133a, miR-206) は、血清中のクレアチンキナーゼ活性よりも、運動負荷による影響を受けつづらく筋障害の程度をより正確に反映できる新しいバイオマーカーであることを示した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
144	Ishioka T, Hirayama K, Hosokai Y, Takeda A, Suzuki K, Nishio Y, Sawada Y, Takahashi S, Fukuda H, Itoyama Y, Mori E	Illusory misidentifications and cortical hypometabolism in Parkinson's disease.	Mov Disord. 26(5):837-43, 2011	パーキンソン病にみられる視覚認識の異常の機序をPETを用いて研究した。大脳の視覚領域における機能低下に伴う幻覚的な誤認識によっておこっていると考えられる
145	Satoh J, Tabunoki H, Ishida T, Yagishita S, Jimnai K, Futamura N, Kobayashi M, Toyoshima I, Yoshioka T, Enomoto K, Arai N, Arima K.	Immunohistochemical characterization of microglia in Nasu-Hakola disease brains.	Neuropathology. 2011 Aug;31(4):363-75	Nasu-Hakola病は遺伝子変異によりマウスモデルではミクログリアのDAP12/TREM2の機能喪失が病態の中心となると考えられている。しかし、ヒト剖検脳の検索により、ミクログリアのDDAP12/TREM2の機能喪失が神経病理学的表現型の一次的原因ではないことが示唆された。
146	J.Satoh, H. Tabunoki, T.Ishidat, Y.Saito and K.Arima	Immunohistochemical characterization of γ -secretaseactivating protein expression in Alzheimer's disease brains	Neuropathology and Applied Neurobiology 2012;38,132-141	アルツハイマー病の病因研究に寄与した。
147	Shin JH, Nitahara-Kasahara Y, Hayashita-Kinoh H, Ohshima S, Kinoshita K, Chiyo T, Okada H, Okada T, Takeda S	Improvement of cardiac fibrosis in dystrophic mice by rAAV9-mediated microdystrophin transduction.	Gene Ther. 18:910-919, 2011	ジストロフィン欠損のmdxマウスにマイクロ・ジストロフィン発現9型AAVベクターを経静脈的に投与したところ、発現は1年半以上続き、心筋繊維化や心不全の予防効果が認められた。本手法を応用したDMDにおける心筋症治療法の開発が期待される。
148	Suzuki N, Aoki M, Mori-Yoshimura M, Hayashi YK, Nonaka I, Nishino I	Increase in number of sporadic inclusion body myositis (sIBM) in Japan.	J Neurol. 259(3): 554-556, Mar, 2012.	封人体筋炎は国により頻度が異なることが知られている。特に日本では、欧米に比して頻度が著しく低いとされていた。今回、1991年での有病率が百万人あたり1.28人であったのが、2003年には9.83人と増加していることが明らかとなった。封人体筋炎の発症に生活様式の変化が影響している可能性が示唆される。
149	Sanvito L, Tomita A, Chihara N, Okamoto T, Lin Y, Ogawa M, Gran B, Aranami T, Yamamura T.	Increase of Ki-67+ natural killer cells in multiple sclerosis patients treated with interferon- β and interferon- β combined with low-dose oral steroids	J Neuroimmunol. 2011; 236: 111-117	ノッソングム大学との共同研究の成果の一つである。インターフェロン治療によって増殖型の表現型を有するナチュラルキラー細胞が増加することを示し、薬効との関連を論じた研究である。
150	Cowling BS, Toussaint A, Amoasi L, Koebel P, Ferry A, Davignon L, Nishino I, Mandel JL, Laporte J	Increased expression of wild-type or a centronuclear myopathy mutant of dynamin 2 in skeletal muscle of adult mice leads to structural defects and muscle weakness.	Am. J Pathol 178(5): 2224-2235, May, 2011	常染色体優性中心核ミオパチーの病態を明らかにするために、原因遺伝子であるdynamin 2 (DNM2)のR465Wミスセンス変異体を、アデノ随伴ウイルスベクターによってマウス骨格筋に発現させたところ、患者筋と同様の変化を示した。野生型DNM2でも僅かに同様の変化を示したことから、R465Wミスセンス変異はdynamin 2のGTPase活性を高めることにより筋障害を来していると考えられる。
151	Hida A, Kitamura S, Enomoto M, Nozaki K, Moriguchi Y, Echizenya M, Kusanagi H, Mishima K	Individual traits and environmental factors influencing an individual's sleep timing: a study of 225 Japanese couples.	Chronobiol Int 29: 220-6, 2011.	睡眠と覚醒のタイミングは概日時計システムと外的環境に影響を受ける。夫婦は遺伝要因を共有しないが生活習慣を共有することから、個人の特性と環境要因の影響を区別する理想的な実験対象であると考えられる。そこで、本研究では、225組の日本人夫婦を対象として、個人の特性と環境要因が睡眠のタイミングにおよぼす影響を調べた。その結果、環境要因も睡眠覚醒に有意に影響を及ぼすが、日周指向性を決めるクロノタイプが睡眠のタイミングを決定する主要な因子であることが明らかとなった。個人のクロノタイプを認識することで睡眠にかかわる生活の質を改善し、身体的・感情的・精神的健康度を促進することが示唆された。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
152	Kurimoto R, Ishii R, Canuet L, Ikezawa K, Iwase M, Azechi M, Aoki Y, Ikeda S, Yoshida T, Takahashi H, Nakahachi T, Kazui H, Takeda M.	Induced oscillatory responses during the Sternberg's visual memory task in patients with Alzheimer's disease and mild cognitive impairment.	Neuroimage. 2012 Feb 15;59(4):4132-40.	本研究では、早期アルツハイマー型認知症(AD)、軽度認知障害(MCI)中年齢をマッチさせた健常対照群の改変スタンバーク記憶課題施行中の脳磁図を測定した。AD群では健常群と比し、β律動の事象関連遅延同期(ERD)の減弱をright central areaに、MCI群と比して、γ律動のERDの減弱をleft prefrontal and medial parietal cortexに認めた。
153	Komaki H, Hayashi YK, Tsuburaya R, Sugie K, Kato M, Nagai T, Imataka G, Suzuki S, Saitoh S, Asahina N, Honke K, Higuchi Y, Sakuma H, Saito Y, Nakagawa E, Sugai K, Sasaki M, Nonaka I, Nishino I	Inflammatory changes in infantile-onset LMNA-associated myopathy.	Neuromuscul Disord 21(8): 563-568, Aug, 2011	LMNA変異は様々な疾患の原因と成る。我々は、LMNA変異による乳児期発症ミオパチーでは筋炎と鑑別困難な炎症性の筋病理変化を高頻度に見出すことを明らかにした。ステロイド治療に反応する例も半数に認められた。経過を追うにつれ、心症状、関節拘縮などの症状もみいだされ、LMNA変異による筋ジストロフィーの特徴を満たすようになる。乳児筋炎ではLMNA変異の有無を確認することが、予後規定因子である心症状の早期発見につながり、重要である。
154	Chihara N, Aranami T, Sato W, Miyazaki Y, Miyake S, Okamoto T, Ogawa M, Toda T, Yamamura T	Interleukin 6 signaling promotes anti-aquaporin 4 autoantibody production from plasmablasts in neuromyelitis optica	Proc Natl Acad Sci U S A 108: 3701-3706, 2011	視神経脊髄炎患者の末梢血では、インタロイキン6依存性のBリンパ球(形質芽球)が増加しており、アクアポリン4抗体の産生に関わっていることを示した。
155	Matsuo T., Kawasaki K., Osada T., Sawahata H., Suzuki T., Shibata M., Miyakawa Nakahara K., Iijima A., Sato N., Kawai K., Saito N. & Hasegawa I.	Intrasulcal electrocorticography in macaque monkeys with minimally invasive neurosurgical protocols.	Front. Syst. Neurosci. 5:34. doi:10.3389/fnsys.2011.00034.	本論文は、パリエレンを素材とした極薄の柔軟な皮質脳波電極(ECoG)電極を開発し、さらに脳外科分野の先端的な術式を援用することによって、マカクサル側頭葉の脳溝部に低侵襲的にECoG電極を慢性留置し、安定した電気生理事学記録を行うことに成功した、新たな手法を報告するものである。
156	Sanagi T, Nakamura Y, Suzuki E, Uchino S, Aoki M, Warita H, Itoyama Y, Kohsaka S, Ohsawa K.	Involvement of activated microglia in increased vulnerability of motoneurons after facial nerve avulsion in presymptomatic amyotrophic lateral sclerosis model rats.	Glia. 60, 782-793, 2012	筋委縮性側索硬化症(ALS)に於ける脊髄前角運動ニューロンの変性過程に於けるミクログリアの関与を検討する目的で、SOD1変異を伴うモデルラットを用いて症状が発症する以前の時期に於けるミクログリアの動態について解析した。その結果、早期より活性化されたミクログリアの集合体(クラスター)が出現していることが示され、また炎症性サイトカインの分泌も上昇していることが判明した。これらの結果は、病態初期からミクログリアが活性化し、細胞由来の炎症性サイトカインによって病態が進行することを示唆している。
157	Higurashi N, Hamano SI, Oritsu T, Minamitani M, Sasaki M, Ida H.	lomazenil hyperfixation in single photon emission computed tomography study of malformation of cortical development during infancy.	Eur J Paediatr Neurol 2011;15:372-375.	大脳皮質形成異常を呈した乳児に対するイオマゼニルSPECTの有用性
158	Misawa F, Shimizu K, Fujii Y, Miyata R, Koshishi F, Kobayashi M, Shida H, Oguchi Y, Okumura Y, Ito H, Kayama M, Kashima H	Is antipsychotic polypharmacy associated with metabolic syndrome even after adjustment for lifestyle effects? : a cross-sectional study.	BMC Psychiatry 11:118,2011.	統合失調症外来への抗精神病薬の多剤処方、メタボリックシンドロームへの影響を検討した。山梨県立北病院の334名の統合失調症外来患者の抗精神病薬処方パターン、メタボリックシンドローム、およびライフスタイルを測定した。その結果、22%がメタボリックシンドローム、18%が予備群、12%が内臓肥満であった。50%に多剤処方がなされていた。多変量ロジスティック回帰分析を行い、ライフスタイルを調整すると、多剤処方はメタボリックシンドロームには関連していなかったが、メタボリックシンドローム予備群と正の関連があった。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
159	Kishi T, Kitajima T, Tsunoka T, Okumura T, Kawashima K, Okochi T, Yamanouchi Y, Kinoshita Y, Ujiike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N.	Lack of association between prokineticin 2 gene and Japanese methamphetamine dependence.	Curr Neuropharmacol. 9: 133-6, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、prokineticin 2 遺伝子多型との相関研究を報告した。
160	Kishi T, Okochi T, Kitajima T, Ujiike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Correll CU, Iwata N.	Lack of association between translin-associated factor X gene (TSNAX) and methamphetamine dependence in the Japanese population.	Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry. 35: 1618-22, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、TSNAX 遺伝子多型との相関研究を報告した。
161	Ichikawa-Tomikawa N, Ogawa J, Douet V, Xu Z, Kamikubo Y, Sakurai T, Kohsaka S, Chiba H, Hattori N, Yamada Y, Arikawa-Hirasawa E.	Laminin $\alpha 1$ is essential for mouse cerebellar development.	Matrix Biol. 31, 17-28, 2012	細胞外マトリックスの一つであるラミニン $\alpha 1$ (LAMA1)の脳内機能を明らかにする目的でLAMA1のノックアウトマウスを作成し、脳の発達過程を検討した。その結果、LAMA1欠損マウスでは小脳の顆粒細胞・ニューロンの細胞・アポトーシス細胞等に異常が見られたことから、LAMA1は主に小脳発達に重要な役割を担っている事が示唆された。
162	Takeshita E, Saito Y, Nakagawa E, Komaki H, Sugai K, Sasaki M, Nezu A, Kitamura J, Itoh M, Sawano Y, Goto Y.	Late-onset mental deterioration and fluctuating dystonia in a female patient with a truncating MECP2 mutation.	J Neurol Sci. 2011 Sep 15;308 (1-2):168-72.	26歳の精神運動発達遅滞を呈する女性で、MECP2遺伝子変異(c.1196_1200delCCACC (p.P399QfsX4))を同定し、 Rett症候群と診断した。この患者は、退行が11歳と遅く、変動するジストニアを呈するなど、 Rett症候群としては非典型的な例であった。
163	Yoda M, Tanabe H, Nishino I, Suma H	Left ventriculoplasty for dilated cardiomyopathy in Fukuyama-type muscular dystrophy.	Eur J Cardiothorac Surg 40(2):514-516, Aug, 2011	福山型先天性筋ジストロフィーの原因遺伝子Fukutinに変異を有し拡張型心筋症を来した29歳男性について報告した。左室形成術を行い、一年後の経過で、新機能改善を認めた。本例は、Fukutin変異例に対する初めての左室形成術施行例である。
164	Orui, M., Kawakami, N., Iwata, N., Takeshima, T., Fukao, A	Lifetime prevalence of mental disorders and its relationship to suicidal ideation in a Japanese rural community with high suicide and alcohol consumption rates	Environmental Health and Preventative Medicine 16(6):384-389, 2011	世界精神保健調査の日本における調査の一環として、天童市と上山市で大うつ病性障害、アルコール使用障害、自殺念慮の有病率と関連性を面接調査した。大うつ病性障害の生涯有病率は先行研究とほぼ同じであったが、アルコール使用障害の有病率は高かった。自殺念慮と大うつ病性障害の間には有意な関連が見られたが、アルコール使用障害と自殺念慮の間には有意な関連はなかった。
165	Hideyuki H. Motohashi, Tadashi Sankai and Hidemi Kada.	Live offspring from cryopreserved embryos following in vitro growth, maturation and fertilization of oocytes derived from preantral follicles in mice.	J. Reprod. Dev., 57, 715-722, 2011.	雌乳前の幼若マウスから分離した成長途上卵母細胞の体外培養系を開発した。本培養系により体外成熟、体外受精および初期発生が可能であることを明らかにし、さらに凍結した初期胚からの胚移植により生存産子を作出した。本研究は、実験動物の系統維持およびスピードコンジャンクのための生殖補助技術としての応用が期待できる。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
166	Tsuburaya R, Suzuki T, Saiki K, Nonaka I, Sugita H, Hayashi YK, Nishino I	Lobulated fibers in a patient with 46-year history of limb-girdle muscle weakness.	Neuropathology 31(4): 455-457, Aug, 2011	症例は、46年間の経過で緩徐進行性の筋力低下を呈した78歳の男性例。筋病理所見では軽度の壊死・再生所見に加えて多数のLobulated fiberを認めた。臨床経過およびLobulated fiberの存在により肢体型筋ジストロフィー2Aを疑い、遺伝子解析により確定診断に至った。Lobulated fiberは非特異的な痙攣性筋原性の筋病理所見であるが、特にLGMD2Aの診断における有用性を鑑別診断とともに考察した。
167	Masamizu Y, Okada T, Kawasaki K, Ishibashi H, Yuasa S, Takeda S, Hasegawa I, Nakahara K	Local and retrograde gene transfer into primate neuronal pathways via adeno-associated virus serotype 8 and 9.	Neuroscience. 193: 249-258, 2011	神経回路機能を調べるため、光学と遺伝子導入技術を融合した光遺伝学が注目されている。今回、AAVベクターを用いて霊長類の脳組織におけるマーカー遺伝子の発現様式を検証し、順行性および逆行性に投射経路を確認することができた。将来、AAVベクターを応用した光遺伝学的手法により、様々な神経回路や機能的分子の解析が期待される。
168	Higashi, S., Moore, D.J., Minegishi, M., Kasanuki, K., Fujishiro, H., Kabuta, T., Togo, T., Katsuse, O., Uchikada, H., Furukawa, Y., Hino, H., Kosaka, K., Sato, K., Arai, H., Wada, K., Iseki, E.	Localization of MAPI-LC3 in vulnerable neurons and Lewy bodies in brains of patients with dementia with Lewy bodies.	J Neuropathol Exp Neurol., 70, 264-280, 2011	レヴィ小体病の病態を明らかにするために、LC3蛋白質の分布を免疫組織学的に明らかにした。
169	Kondo S, Kohsaka S, Okabe S.	Long-term changes of spine dynamics and microglia after transient peripheral immune response triggered by LPS in vivo.	Mol Brain. 17, 4-27, 2011	神経細胞の樹状突起上に形成されるシナプス構造の変化は周囲のミクログリアによって調節を受けることが知られていたが、本論文では末梢性に投与したLPSによってミクログリアが免疫学的に活性化され、これによって長期にわたるシナプス構造の変化が引き起こされることが明らかとなった。
170	Nitahara-Kasahara Y, Hayashita-Kinoh H, Ohshima-Hosoyama S, Okada H, Wada-Maeda M, Nakamura A, Okada T, Takeda S	Long-term engraftment of multipotent mesenchymal stromal cells that differentiate to form myogenic cells in dogs with Duchenne muscular dystrophy.	Mol Ther. 20:168-177, 2012	間葉系幹細胞とAAVベクターを応用したデュシェンヌ型筋ジストロフィー(DMD)に対する細胞遺伝子療法が期待されているが、移植細胞の生存率や筋再生能が十分ではなかった。今回、CD271を指標とした細胞調製法、分化誘導法、および移植方法を提案し、筋ジストロフィーの安全性と有効性を証明した。
171	Koo T, Okada T, Athanopoulos T, Foster H, Takeda S, Dickson G	Long-term functional adeno-associated virus-microdystrophin expression in the dystrophic CXMDJ dog.	J Gene Med. 13:497-506, doi: 10.1002/jgm, 2011	AAVベクターを用いたDMD遺伝子治療の臨床試験が開始されており、さらに臨床的効果高める工夫が求められている。従来、小型ジストロフィンコドン至適化による発現レベルの向上がマウスで証明されていたが、今回、筋ジストロフィーにおいて、コドン至適化イヌ小型ジストロフィンの8型AAVベクターを用いた骨格筋への導入実験を行った。病理症状の改善を伴う良好な発現が2ヶ月以上持続し、コドン至適化の効果が証明された。今後、この手法を用いたヒト治療遺伝子の開発が期待される。
172	Clement S, Lassman F, Barley E, Evans-Lacko S, Williams P, Pagdin R, Slade M, Rüşch N, Yamaguchi S, Thornicroft G	Mass media interventions for reducing mental health-related stigma: protocol.	Cochrane Database of Systematic Reviews 12, 2011 [DOI: 10.1002/14651858.CD009453].	本稿は、精神障害者に対するステイグマの是正を図るマスメディアを用いた介入を、システマティック・レビューによって検証するための研究プロトコルである。研究過程は、厳密であり、11のデータベースを使用し、データの選出・決定・抽出などすべての過程で2人以上の研究者がかわる。また、本研究は、無作為比較臨床試験および時系列分析研究において、精神障害者に対する偏見や差別をアウトカムとした研究が導入基準の対象となる。本研究の結果は、調査が終了次第Cochrane reviewとして公開される。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
173	Miyazaki D, Nakamura A, Fukushima K, Yoshida K, Takeda S, Ikeda S	Matrix metalloproteinase-2 ablation in dystrophin-deficient mdx muscles reduces angiogenesis resulting in impaired growth of regenerated muscle fibers.	Hum Mol Genet. 20:1787-1799, 2011	MMP-2を欠損させたmdxマウスを用いて、ジストロフィン欠損筋におけるMMP-2の役割は、血管新生を介した再生筋線維の成長の促進であることを始めて指摘した。
174	Gaebel W, Zäske H, Cleveland HR, Zielasek J, Stuart H, Arboleda-Florez J, Akiyama T, Gureje O, Jorge MR, Kastrup M, Suzuki Y, Tasman A, Sartorius N	Measuring the stigma of psychiatry and psychiatrists: development of a questionnaire.	Eur Arch Psychiatry Clin Neurosci, 261 (Suppl 2):119-123, 2011.	精神医療および精神科医に対するスティグマ、ステレオタイプを検討するために、尺度開発を行った。現在、世界精神医学界のプロジェクトとして、国際比較研究を実施している。
175	Colucci E, Kelly CM, Minas H, Jorm AF, Suzuki Y	Mental Health First Aid guidelines for helping a suicidal person; a Delphi consensus study in Japan.	Int J Ment Health Syst. 2011; 5: 12.	本研究は、日本の精神保健専門家における自殺念慮をもつ人への初期対応に関する合意形成を試みるものである。日本で自殺対策にかかわる32名の専門家を対象にデルファイ法を行い、合意形成を行った。オーストラリアで同様の手法で開発された初期対応ガイドラインの内容と、同様の項目について合意が得られた。文化的な側面からの考察が加えられた。合意が得られた推奨行動をもとに、自殺に関する初期対応ガイドラインが作成された。
176	Hayashi Y, Kawaji K, Sun L, Zhang X, Koyano K, Yokoyama T, Kohsaka S, Inoue K, Nakanishi H.	Microglial Ca2+-Activated K+ Channels Are Possible Molecular Targets for the Analgesic Effects of S-Ketamine on Neuropathic Pain.	J Neurosci. 48, 17370-17382, 2011	神経損傷の後に見られる神経因性疼痛に対するケタミンの鎮痛作用を検討した結果、ケタミンはニューロンのNMDA受容体を阻害するとともに、ミトコグリアに発現しているBKチャネルの阻害を通じ、同細胞の活性化と細胞移動を抑制することを明らかにした。
177	Toshiyuki Araki, Seitichi Nagano, Minako Tatenro, Misako Kaido, Katsuhisa Ogata, Kumimasa Arima	Misfolded SOD1 forms high-density molecular complexes with synaptic molecules in mutant SOD1-linked familial amyotrophic lateral sclerosis cases.	J Neurol Sci 314,(1-2) 92-96 (2012)	SOD1変異による遺伝性筋萎縮性側索硬化症(FALS)患者の剖検脳組織の生化学的解析により、変異型SOD1はシナプス領域に存在する多くの蛋白と強い結合した蛋白複合体を形成していることを示し、このような変化がFALSにおける神経機能低下機序の一部となっている可能性を示した。
178	Fugier C, Klein AF, Hammer C, Vassilopoulos S, Ivarsson Y, Toussaint A, Tosch V, Vignaud A, Ferry A, Messaddeq N, Kokunai Y, Tsuburaya R, de la Grange P, Dembele D, Francois V, Precigout G, Boulade Ladame C, Hummel MC, de Munain AL, Sergeant N, Laquerriere A, Thibault C, Deryckere F, Auboeuf D, Garcia L, Zimmermann P, Udd B, Schoser B, Takahashi MP, Nishino I, Bassez G, Laporte J, Furling D, Charlet-Berguerand N	Misregulated alternative splicing of BIN1 is associated with T tubule alterations and muscle weakness in myotonic dystrophy.	Nat Med 17(6): 720-725, Jun, 2011	筋強直性ジストロフィーには、先天性(CDM1)と症状の軽い典型的例(CDM2)があるが、CDM1において何故重篤な筋力低下を来すかは明らかではなかった。今回、CDM1においては、BIN1遺伝子のエクソン11が含まれないスプライシング・アイソフォームが多量に発現することにより、骨格筋のT管形成に異常を来して筋障害を呈することを明らかにした。
179	Yoshida K, Ito J, Ogawa M	Model Project of Home-Visit Living-Skills Coaching for Individuals with Severe Mental Illness in Japan.	International Journal of Mental Health,40(4):19-27,2011.12	重症精神障害者を対象とした障害者自立支援法における訪問による生活訓練のモデルプロジェクトに関する支援の実態記述並びに効果評価を行った。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
180	Sasayama D, Hori H, Iijima Y, Teraishi T, Hattori K, Ota M, Fujii T, Higuchi T, Amano N, Kunugi H	Modulation of cortisol responses to the DEX/CRH test by polymorphisms of the interleukin-1beta gene in healthy adults	Behav Brain Funct. 7: 23, 2011	健常成人179名に対しDEX/CRH負荷試験を行い、さらに、IL-1β 遺伝子の5個のタグSNPをタイピングした。IL-1β 遺伝子rs16944のGアレルとrs1143633のAアレルがDEX投与後のコルチゾール値の高値と有意な関連を示した。DEXによるコルチゾールの抑制にIL-1β 遺伝子が影響を与えていたことから、IL-1β がHPA系の機能に関与していることが示唆された。
181	Sasayama D, Hori H, Teraishi T, Hattori K, Ota M, Matsuo J, Kawamoto Y, Kinoshita Y, Hashikura M, Amano N, Higuchi T, Kunugi H.	More severe impairment of manual dexterity in bipolar disorder compared to unipolar major depression	J Affect Disord. 2012 Feb;136(3):1047-52.	気分障害ではさまざまな神経認知機能の障害がみられることが知られている。本研究では、単極性大うつ病98名、双極性障害48名、健常者158名に対して、Purdue pegboard検査を用いた手先の器用性の評価を行った。単極性大うつ病、双極性障害のいずれにおいても、健常者と比較すると手先の器用さが障害されており、障害の程度は双極性障害の方が有意に重度であった。手先の器用さは単極性大うつ病と双極性障害を鑑別する指標の一つとなり得る可能性がある。
182	Chiba, A., R. Tajima, C. Tomi, Y. Miyazaki, T. Yamamura, and S. Miyake	Mucosal-associated invariant T cells promote inflammation and exacerbate disease in murine models of arthritis	Arthritis Rheum. 64: 153-161, 2012	これまでに新たな免疫制御性細胞であるMAIT細胞が、炎症病態の修飾・制御に関わることを明らかにして来た。今回は同細胞が実験的関節炎の病態を悪化することを示した。
183	Miyazaki Y, Miyake S, Chiba A, Lantz O, Yamamura T	Mucosal-associated invariant T cells regulate Th1 response	Int Immunol 23(9):529-535, 2011	新しい自然リンパ球であるMucosal-associated invariant T cell (MAIT cell) が、多発性硬化症患者末梢血で減少していること、同細胞が異常なTh1細胞反応を制御する能力を持つこと等を明らかにした。
184	Kondo H, Ezura Y, Nakamoto T, Hayata T, Notomi T, Sorimachi H, Takeda S, Noda M	MURF1 deficiency suppresses unloading-induced effects on osteoblasts and osteoclasts to lead to bone loss.	J Cell Biochem. doi: 10.1002/jcb.23327, 2011	骨粗鬆症は、骨芽細胞による骨形成の低下、および破骨細胞による骨吸収の増加により引き起こされる。MuRF1は骨格筋特異的エプキチンリガーゼであり、後肢懸垂などによる微小重力下に筋重量の低下を引き起こす。本研究では、MuRF1が微小重力下に骨量の低下をも引き起こし、骨芽細胞および破骨細胞を介したリモデリングを制御することを示した。
185	Mitsuhashi S, Hatakeyama H, Karahashi M, Koumura T, Nonaka I, Hayashi YK, Noguchi S, Sher RB, Nakagawa Y, Manfredi G, Goto YI, Cox GA, Nishino I	Muscle choline kinase beta defect causes mitochondrial dysfunction and increased mitophagy.	Hum Mol Genet 20(19): 3841-3851, Oct, 2011	コリンキナーゼ欠損マウスの骨格筋筋線維では、ミトコンドリアの巨大化と部分的な消失が見られるが、このマウスのミトコンドリアにおいて、ミトコンドリア膜リン脂質の組成変化、ミトコンドリア機能の障害、およびミトコンドリア特異的オートファジー(シトファジー)が見られることを始めて報告した。リン脂質合成経路の酵素欠損により、ミトコンドリアの機能異常を来たすことを示した。
186	Sukigara S, Liang WC, Komaki H, Fukuda T, Miyamoto T, Saito T, Saito Y, Nakagawa E, Sugai K, Hayashi YK, Sugie H, Sasaki M, Nishino I	Muscle glycogen storage disease 0 presenting recurrent syncope with weakness and myalgia.	Neuromuscul Disord. 22(2): 162-165, Feb, 2012.	エクソン・アレイを用いることで、筋強直性ジストロフィーI型(DMI)の骨格筋において、マオマジンI(MYOMI)遺伝子のエクソン17aがmRNAに取り込まれることを明らかにした。この取り込みはMBNL1-3のみならずCELF1-2でも抑制された。一方、CUGリピート伸長により、MBNL1のMYOMIミニジェンに対する効果は阻害されたが、CELF1の効果は阻害されなかった。このことは、DMI筋においては、MBNLの抑制がMYOMIエクソン17aの異常スプライシングを惹起していることを示唆している。
186	Sukigara S, Liang WC, Komaki H, Fukuda T, Miyamoto T, Saito T, Saito Y, Nakagawa E, Sugai K, Hayashi YK, Sugie H, Sasaki M, Nishino I	Muscle glycogen storage disease 0 presenting recurrent syncope with weakness and myalgia.	Neuromuscul Disord. 22(2): 162-165, Feb, 2012.	世界で3家系目となる糖原病0型(GSD0)の患者を報告した。5歳時より労作後失神を繰り返し、12歳で死亡した。11歳時の筋生検でグリコーゲンが消失していたこと、GYS1遺伝子に変異を認めたことからGSD0の診断を確定した。失神は比較的ゆっくり起こり約11時間継続していたことから、GSD0における意識消失発作は、単なる心原性失神では無いことが示唆された。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
187	Saitou H, Osaka H, Sasaki M, Takanashi J, Hamada K, Yamashita A, Shibayama H, Shina M, Kondo Y, Nishiyama K, Tsurusaki Y, Miyake N, Doi H, Ogata K, Inoue K, Matsumoto N.	Mutations in POLR3A and POLR3B encoding RNA polymerase III subunits cause an autosomal-recessive hypomyelinating leukoencephalopathy.	Am J Hum Genet 2011;89:644-551.	これまで原因の知られていなかった先天性大脳白質形成不全を示す症例の中から、新たな遺伝子変異を見出した。POLR3AとPOLR3BはRNAポリメラーゼIIIのサブユニットである。これらのどちらからの遺伝子変異によりこの疾患が発症することを示した。2年前に我々が独立疾患の可能性を臨床的に提唱した患者群について、今回特異な遺伝子異常をもつ疾患群として確立したことは大きな意義がある。
188	Kawashima H, Ishii C, Yamanaka G, Ioi H, Nishimata S, Kashiwagi Y, Takekuma K, Miyajima T, Hoshika A, Nishino I, Nonaka I	Myopathy and neurogenic muscular atrophy in unexpected cardiopulmonary arrest.	Pediatr Int 53(2): 159-161, Apr, 2011	心肺停止状態で来院した4例の神経・筋疾患罹患乳児を提示した。このうち2例は突然死の前に筋力低下を呈していた。このことは、乳児の突然死では、原因として、神経・筋疾患の可能性も考慮する必要があることを示唆している。
189	Matsuura T, Minami N, Arahata H, Ohno K, Abe K, Hayashi YK, Nishino	Myotonic dystrophy type 2 is rare in the Japanese population.	J Hum Genet. 57(3): 219-220, Mar, 2012.	1型筋強直性ジストロフィーが否定されておりオトニアを伴う34例、既知原因遺伝子に変異のない散在型筋ジストロフィー119例の計153例を対象として、2型筋強直性ジストロフィー(DM2)の原因であるCC1G7A7レム伸長の有無を調べた。全例で伸長を認めなかったこと。本邦では DM2 は希と考えられる。
190	Saito T, Hanai S, Takashima S, Nakagawa E, Okazaki S, Inoue T, Miyata R, Hoshino K, Akashi T, Sasaki M, Goto Y, Hayashi M, Itoh M	Neocortical layer-formation of the human developing brains and lissencephalies: consideration of layer-specific markers expression	Cereb Cortex 2011;21:588-596	複雑の大脳皮質層特異的マーカーで、ヒト発達期脳を観察した。大部分でげっ歯類で報告されている事象と一致していたが、一部では異なっていた。また、溝裂症の三型について観察したところ、それぞれに特徴的な違いがあり、発症病態の違いを反映していることを明らかにした。
191	Hosoda C, Hanakawa T, Nariai, Ohno K, Honda M	Neural substrates for cross-language control	J Neurolinguistics 25(1): 45-61, 2012.	日英後期バイリンガルがアラビア数字を英語読み、日本語読み、数字の解釈をする際の脳活動を比較し、右前頭前野の一部の活動が英語読みにスイッチするときに特異的に活動し、しかもこの領域の活動が英語の流暢性に相関することを示した。
192	Ota M, Obu S, Sato N, Asada T	Neuroimaging study in subjects at high risk of psychosis revealed by the Rorschach test and first-episode schizophrenia	Acta Neuropsychiatrica 23: 125-131, 2011	統合失調症のハイリスク群と初発統合失調症群、および対象健康者のMRI,DTIを比較し、大脳形態の違いを検証した。
193	Yamada H, Inokawa H, Matsumoto N, Ueda Y, Kimura M.	Neuronal basis for evaluating selected action in the primate striatum.	Eur J Neurosci. 卷: 34 号: 3 ページ: 489-506, AUG 2011	我々は意志決定するに当たって行動を行った結果何を得られるのかその価値を計算して予測する。一方、赤信号なら止まるといったように、ルールに従って行動を決める。行動課題を遂行中のマカクザルの大脳基底核の線条体から細胞外記録方を用いてその神経細胞活動を記録したところ、行動の結果報酬が得られたか得られなかったかをコードする細胞が多数見つかった。これらの多くの細胞では、サルが行動を選んだ後にどの程度報酬が貰えるのか、その価値をコードした。加えて、行動の規則を表現する別の細胞も見つかった。この結果から、大脳基底核の線条体が、価値やルールに基づいて意志を決定して行動する過程に関与することを明らかにした。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
194	Kato K, Zhang MR, Minegishi K, Nengaki N, Takei M, Suzuki K	Nitroaldol reaction of nitro[11C]methane to form 2-(hydroxymethyl)-2-nitro[2-11C]propane-1,3-diol and [11C]Tris	J Label Compd Radiopharm 140-144, 2011	迅速なニトロアルドール反応の条件を見出し、 ¹¹ C]Trisの標識合成に応用した。
195	Namba T, Ming G-L, Song H, Waga C, Enomoto A, Kaibuchi K, Kohsaka S, Uchino S.	NMDA receptor regulates migration of newly generated neurons in the adult hippocampus via Disrupted-In-Schizophrenia 1 (DISC1)	J Neurochem. 118, 34-44, 2011	成体海馬におけるNMDA受容体が新生後の幼若ニューロンの細胞移動を制御していることを見いだした。その分子基盤のひとつとして、統合失調症の脆弱性遺伝子として知られているDISC1が関与することを明らかにした。
196	Tsunoka T, Kishi T, Ikeda M, Kitajima T, Yamanouchi Y, Kinoshita Y, Kawashima K, Okochi T, Okumura T, Inada T, Ujike H, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N.	No Association Between GRM3 and Japanese Methamphetamine-Induced Psychosis.	Curr Neuropharmacol. 9: 160-2, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、GRM3 遺伝子多型との相関研究を報告した。
197	Ando T, Ishikawa T, Hotta M, Naruo T, Okabe K, Nakahara T, Takii M, Kawai K, Mera T, Nakamoto C, Takei M, Yamaguchi C, Nagata T, Okamoto Y, Ookuma K, Koide M, Yamanaka T, Murata S, Tamura N, Kirriike N, Ichimaru Y, Komaki G and the Japanese Genetic Research Group For Eating Disorders	No Association of Brain-Derived Neurotrophic Factor Val66Met Polymorphism With Anorexia Nervosa in Japanese.	Am J Med Genet Part B 159B:48-52, 2012.	脳由来神経栄養因子 (BDNF) は脳内神経回路網の形成・発達・維持、シナプスの可塑性、神経細胞死に対する保護作用、摂食調節に関与する。BDNF 遺伝子 Val66Met 多型の Met アレルと Anorexia Nervosa (AN) との関連がヨーロッパの複数の研究で報告されてきた。さらに Met アレルを有する AN では体格指数 (BMI) の最低値が小さいこと、損害回避の得点が高いことが報告された。そこで日本人の AN 患者 689 例と対象群 573 例で Val66Met 多型を解析したところ Val66Met 多型と AN との関連はみられなかった。また最低 BMI との関連もみられなかった。損害回避の得点は Met アレルを有する患者では過去の報告とは逆に低い傾向がみられた。このように先行研究での所見は、日本人では再現できなかった。
198	Kishi T, Fukuo Y, Okochi T, Kitajima T, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Correll CU, Iwata N.	No significant association between SIRT1 gene and methamphetamine-induced psychosis in the Japanese population.	Hum Psychopharmacol. doi: 10.1002/hup.1223, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、SIRT1 遺伝子多型との相関研究を報告した。
199	Muraoka T, Muraok K, Imachi H, Kikuchi F, Yoshimoto T, Iwama H, Hosokawa H, Nishino I, Fukuda T, Sugie H, Adachi K, Nanba E, Ishida T	Novel Mutations in the Gene Encoding Acid α -L,4-glucosidase in a Patient with Late-onset Glycogen Storage Disease Type II (Pompe Disease) with Impaired Intelligence.	Intern Med. 50(24): 2987-2991, Dec, 2011	新規変異を見出した遅発型Pompe病(糖原病II型)の1例を報告した。この例では、四肢近位筋筋力低下、呼吸機能低下に加えて、知的機能の低下を認めた。酸性 α -グルコシダーゼ活性は 1.0 nmol/4 MU/mg/30 min (コントロール 7.3 \pm 2.2) と低下していた。GAA 遺伝子解析では、c.1814 G > A (p.Gly605Asp) と c.1846 G > A (p.Asp616Asn) (ともにエクソン13) のヘテロ接合型変異を認めた。
200	Waga C, Okamoto N, Ondo Y, Fukumura-Kato R, Goto Y, Kohsaka S, Uchino S.	Novel variants of the SHANK3 gene in Japanese autistic patients with severe delayed speech development.	Psychiatr Genet. 21, 208-211, 2011	重度言語障害・精神遅滞を呈する自閉症患者百数十例におけるゲノム解析から、自閉症関連遺伝子であるSHANK3遺伝子に複数の変異を見いだした。本論文は、DNAメチル化に関与するCpG islandや蛋白質相互作用に重要なPDZドメイン等機能領域における初めての遺伝子変異報告である。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
201	Mizoi Y, Yamamoto T, Minami N, Ohkuma A, Nonaka I, Nishino I, Tamura N, Amano T, Araki N	Oculopharyngeal muscular dystrophy associated with dementia.	Intern Med 50(20): 2409-2412, Oct, 2011	認知症を合併した眼咽頭筋ジストロフィー (OPMD) の家系を報告した。発端者は 53 歳発症女性で、63 歳より認知症が出現した。PABPN1 遺伝子解析では GCN1 ビーターが 17 回に伸長していた。発端者の弟も筋症状と認知症を呈していた。これは認知症を伴う OPMD の初めての家系である。
202	Okazaki M, Adachi N, Ito M, Watanabe M, Watanabe Y, Kato M, Onuma T.	One-year seizure prognosis in epilepsy patients treated with antiepileptants.	Epilepsy Behav. 2011; 22: 331-335	しばしば抗うつ薬はてんかん患者で発作を増悪させる可能性があると考えられているが、我々は抗うつ薬で治療後 1 年間にわたり発作が悪化するかどうかをレトロスペクティブに観察した。結果として抗うつ薬投与前後 1 年で発作頻度に有意差は認めなかった。抗うつ薬は適切な抗てんかん薬で治療されている患者において安全に使用できる。
203	Bjerknes M, Khandanpour C, Mörøy T, Fujiyama T, Hoshino M, Klisch TJ, Ding Q, Gan L, Wang J, Martin MG, Cheng H.	Origin of the brush cell lineage in the mouse intestinal epithelium.	Dev Biol. 2012 Feb 15;362(2):194-218.	腸管上皮における幹細胞からは、腸機能を担う様々な細胞が生み出されていることが知られているが、その発生の分子メカニズムについては未だ完全に解明されていない。本研究では、Columnar (吸収性) および Granulocyte (分泌性) の分化の過程において、Atoh1 や Hes1 がパベイナリ-ススイッチとして関与していることが示された。さらに Brush 細胞は、Gfi1b を発現する前駆細胞から生み出されていることが明らかになった。
204	Kanamori Y, Nakashima I, Takai Y, Nishiyama S, Kuroda H, Takahashi T, Kanaoka-Suzuki C, Misu T, Fujiyama K, Itoyama Y	Pain in neuromyelitis optica and its effect on quality of life: a cross-sectional study	Neurology 16;77(7):652-8, 2011	視神経脊髄炎 (NMO) 患者の痛みを主とした QOL を調べた。NMO は MS に較べて高頻度にかつ強い痛みが伴っていた。QOL を高める為にこれを治療することが大切である。
205	Konya, C., Hatanaka, Y., Fujiwara, Y., Uchida, K., Nagai, Y., Wada, K., Kabuta, T.	Parkinson's disease-associated mutations in alpha-synuclein and UCH-L1 inhibit the unconventional secretion of UCH-L1.	Neurochem Int., 59, 251-258, 2011.	UCH-L1 の細胞外分泌を発見した。また、その分泌において神経変性原因蛋白質群と機能的ネットワークを形成していることを示した。
206	Taniguchi-Ikeda M, Kobayashi K, Kanagawa M, Yu CC, Mori K, Oda T, Kuga A, Kurahashi H, Akman HO, DiMauro S, Kajii R, Yokota T, Takeda S, Toda T	Pathogenic exon-trapping by SVA retrotransposon and rescue in Fukuyama muscular dystrophy.	Nature. 478:127-131, 2011	福山型先天性筋ジストロフィーの原因遺伝子である <i>tukutin3'</i> UTR 部に挿入されたトランスポゾン SVA を標的にしたアンチセンス投与により、同疾患の患者細胞とモデルマウスにおいて、フクヤマの発現が回復し、フクヤマとジストロリンカン糖鎖およびラミニンとの結合能が回復することを示した。
207	Malicdan MC, Noguchi S, Tokutomi T, Goto YI, Nonaka I, Hayashi YK, Nishino I	Peracetylated N-acetylmannosamine, a synthetic sugar molecule, effectively rescues muscle phenotype and biochemical defects in a mouse model of sialic acid deficient myopathy.	J Biol Chem. 287(4): 2689-2705, Jan, 2012	モデルマウスを用いて、縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチーの治療薬を見いだした。合成糖化合物である O-アセチル-N-アセチルマンノサミンは、量依存的にモデルマウスのミオパチー症状を回復させ、天然基質である N-アセチルマンノサミンや N-アセチルノイラミン酸よりも高いシリアル酸回復効果を示した。また、この研究から新しい疾患特異的バイオマーカーを見いだすことに成功した。O-アセチル-N-アセチルマンノサミンは、強力な治療候補化合物であると考えられた。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
208	Honma M, Tanaka Y, Osada Y, Kuriyama K	Perceptual and not physical eye contact elicits pupillary dilation.	Biol Psychol. 89: 112-116. 2011.	視線一致(アイコンタクト)の知覚と瞳孔サイズの関係を、対面する2者間において検討した。その結果、自分に向けられた視線の知覚精度は低いことを示した。さらに瞳孔サイズは物理的な視線一致に関係なく、受け手が視線一致と意識した場合のみ拡大することを示した。アイコンタクトは一方のコミュニケーションであることを示唆した。この知見は、視線一致に過剰な行動を示す社会性不安障害の診断・治療につながる可能性がある。
209	Kim Y, Tsutsumi A, Izutsu T, Kawamura N, Miyazaki T, Kikkawa T	Persistent distress after psychological exposure to the Nagasaki atomic bomb explosion.	Br J Psychiatry. 199;411-6. 2011.	長崎の原爆において、同地域住民の原爆体験と関連した精神健康について調査した。原爆投下地近隣での居住は、好ましくない精神健康と関連性がみられた。放射能に関する不安は好ましくない精神健康と有意に相関し(P<0.05)、対象の74.5%は爆発による光が放射能と同一であると誤信していた。原爆体験後半世紀以上経つが、たとえ直接的被曝はなくても、原爆投下地への居住は精神健康に影響している。放射能への恐怖やそのリスクに関する知識の欠乏が、このような関連性を招いている。(雑誌よりpress releaseされる。)
210	Satoh J, Tabunoki H, Ishida T, Yagishita S, Jimnai K, Futamura N, Kobayashi M, Itaru T, Yoshioka T, Katsuhiko E, Arai N, Saito Y, Arima K	Phosphorylated Syk expression is enhanced in Nasu-Hakola.	Neuropathology NEU-11-0107.R2	那須・ハコラ病でリン酸化Sykが強く発現していたことを証明した。
211	Goto A, Hoshino M, Matsuda M, Nakamura T	Phosphorylation of STEF/Tiam2 by protein kinase A is critical for Rac1 activation and neurite outgrowth in dibutyryl cAMP-treated PC12D cells.	Mol Biol Cell, 22, 1780-1790, 2011	PC12D培養細胞はPKAシグナルによってRac1が活性化され、神経突起伸長が起こることが知られている。その過程では、PKAによるSTEF蛋白質のリン酸化が関与しているということを、FRETを用いたライブイメージング技術も使って明らかにした。
212	Goto A, Suzuki Y, Nguyen Q V, Nguyen T T V, Trinh H P, Pham N M, Nguyen T M, Yasumura S & the NDGD Parenting Support Team	Pilot study on a group-based parenting program in a Vietnamese public hospital: Program acceptance among mothers and staff.	Asia-Pacific Psychiatry 4 (2012) 76-83,2012.	ベトナム、ホーチミン市の教育病院において、妊産婦を対象にメンタルヘルスのスクリーニングを行い、リスクが高いと考えられた初回妊産婦を対象に、グループによる育児支援プログラムを実施した。9名の妊産婦がこのパイロットプログラムに参加し、Nobody's perfectプログラムを現地の文化、社会事情にあわせて修正して、実施した。参加した妊産婦および職員を対象としたプログラム評価の結果、介入は好意的に受け入れられ、実施可能であることが明らかになった。
213	Sasaki, R., Aoki, S., Yamato, M., Uchiyama, H., Wada, K., Ogiuchi, H., Okano, T., Ando, T.	PLGA artificial nerve conduits with dental pulp cells promote facial nerve regeneration.	J. Tissue Eng. Regen. Med., 2011, Nov5 (10), 823-830, 2011	顔面神経損傷の新たらしい機能修復法を開発した。
214	Saito Y, Kubota M, Kurosawa K, Kaneko Y, Hattori A, Sakuma H, Komaki H, Nakagawa E, Sugai K, Sasaki M.	Polymicrogyria and infantile spasms complicating a patient with 1p36 deletion syndrome.	Brain Dev 2011;33:437-441.	1p36欠失症候群で、多小脳回とWest症候群を伴った稀な症例

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
215	Hori H, Teraishi T, Sasayama D, Ozeki Y, Matsuo J, Kawamoto Y, Kinoshita Y, Hattori K, Higuchi T, Kunugi H	Poor sleep is associated with exaggerated cortisol response to the combined dexamethasone/CRH test in a non-clinical population	J Psychiatr Res. 45:1257-1263, 2011	動物を対象とした実験などにより、睡眠と視床下部-下垂体-副腎系機能との間に関連があることは知られていたが、ヒトでの実証的研究は少ない。今回、質問紙により調査した健康者の睡眠と、dexamethasone/CRHテストによるコルチゾール反応性との関連を調べた。本研究の結果、CRH投与に対するコルチゾール反応が亢進している人では、睡眠状態(とくに睡眠の質)が悪くなる傾向が明らかになった。本研究は脳プロ事務局よりプレスリリース(http://brainprogram.mext.go.jp/media/press/110513ncnp_kunugi_press.pdf)された。
216	Deng X, Takaki H, Wang L, Kuroki T, Nakahara T, Hashimoto K, Ninomiya H, Arinami T, Inada T, Ujike H, Irokawa M, Tochigi M, Watanabe Y, Someya T, Kunugi H, Iwata N, Ozaki N, Shibata H, Fukumaki Y.	Positive association of phencyclidine-responsive genes, PDE4A and PLAT, with schizophrenia.	Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet. 2011 Dec; 156B(7):850-8.	ラットにフェンチクリジンを投与して発現変化があった遺伝子7つについて統合失調症との関連について検討した結果、PDE4AとPLATは統合失調症リスクと関連することを発見した(患者2224名と健康者2250名のサンプル)。
217	Sasayama D, Hori H, Teraishi T, Hattori K, Ota M, Iijima Y, Tatsumi M, Higuchi T, Amano N, Kunugi H	Possible association between Interleukin-1beta gene and schizophrenia in a Japanese population	Behav Brain Funct. 7: 35, 2011	統合失調症患者533名と健康対象者1136名において、IL-1β 遺伝子の5個のタグSNPをタイピングしたところ、IL-1β 遺伝子rs1143633において患者群とコントロール群でアレル頻度に有意な差が認められた。このことから、IL-1β が統合失調症の病態へ関与している可能性が示唆された。
218	Matsumoto T, Chiba Y, Imamura F, Kobayashi O, Wada K:	Possible effectiveness of intervention using a self-teaching workbook in adolescent drug abusers detained in a juvenile classification home.	Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 576-583, 2011.	少年鑑別所に入所する薬物乱用者85名に対し、我々が開発した再乱用防止のための自習ワークブック「SMARPP-Jr.」を実施し、介入前後の評価尺度上の変化から、薬物問題の重症度と介入効果の相違について検討した。その結果、薬物問題の重症度に関係なく、自習ワークブックの実施後には、問題意識の深まりと治療動機の高まりを反映する評価尺度上の顕著な上昇を見た。しかしその一方で、薬物欲求に抵抗できる自信、自己効力感には著明な変化が見られなかった。以上により、自習ワークブックを用いた矯正施設での介入は、薬物乱用に対する問題意識を深め治療動機を向上させるには有効であるが、薬物依存に対する自己効力感を高めるには、施設出所後に、地域における継続した支援体制が存在する必要があると考えられた。
219	Kim Y, Akiyama T	Post-disaster mental health care in Japan.	The Lancet 378: 317-318, 2011.	J.マツカリーのレポートは、今回の日本の大災害におけるメンタルヘルスマスクアに対して誤解を与える内容である。日本での支援は完璧ではないが、過去の教訓を活かして被災地への心のケアチームの派遣は迅速に行われた。また、彼は初期段階でのカウンセリングの欠如がその後の精神面/行動面での問題につながるとのコメントを引用しているが、初期にトラウマ記憶を掘り下げることは、むしろ有害となり得ることも忘れてはならない。
220	Machida K, Tsuchiya-Suzuki A, Sano K, Arima K, Saito Y, Kametani F, Ikeda S.	Postmortem findings in a patient with cerebral amyloid angiopathy actively treated with corticosteroid.	Amyloid. 2012 Mar; 19(1):47-52.	ステロイド療法中に脳amyloid angiopathyを呈した69歳女性の剖検例を報告した。死亡1年半前の脳生検時と剖検時の脳血管を比較すると、死亡時には血管壁の炎症性細胞浸潤が消失しアミロイド沈着が減少していた。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
221	Suzuki Y, Goto A, Nguyen QV, Nguyen TTV, Pham NM, Chung TMT, Trinh HP, Pham VT, Yasumura S	Postnatal depression and associated parenting indicators among Vietnamese women.	Asia-Pacific Psychiatry 3 (2011) 219-227.	ベトナムの産婦人科専門病院を受診した初妊婦を対象に、うつ状態の頻度を明らかにし、育児関連指標の関係を検討した。うつ状態の把握には、うつ状態、アンヘドニアの2項目を用い、68人(23.1%)の母親が、1項目以上を満たした。このうつ状態には、親、あるいは家族間での問題、出産に関連した転居が関連していた。また育児への自信への不安のなさ、リソースがでないことが主観的健康観を調整した後のうつ状態のリスクを高めていた。
222	Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Hamazaki K, Hamazaki T, Hashimoto K	Potential role of brain-derived neurotrophic factor in omega-3 fatty acid supplementation to prevent posttraumatic distress after accidental injury: An open-label pilot study.	Psychother Psychosom 2011;80:310-312 (DOI: 10.1159/000322980)	ω3系脂肪酸によるPTSD発症予防オープン試験の二次解析として、ω3系脂肪酸によって血清BDNFが変化するかどうかが、そして血清BDNFの変化が精神的苦痛と関連があるかどうかを予備的に検討した。後方視的に精神疾患を発症しなかった者は、PTSD及び大うつ病を発症した者に比して、血清BDNFが有意に増加していた。BDNF増加が精神的苦痛の緩和において何らかの役割を演じている可能性が示唆された。
223	Suzuki K, Shinoda H	Probability effects of response and stimulus on error-related negativity.	NeuroReport, 22(17), 902-905.	3選択反応課題(3種類の刺激を各20%, 40%, 40%の確率で呈示)を用いて、エラー関連陰性電位(ERN/Ne)について検討した。低確率試行よりも高確率試行でエラー修正反応が短く、エラー後に適切な反応が活性化していることが明らかとなった。しかし、低確率試行において、ERN/Neが増大し、さらに、刺激の逸脱に関連してNIが増大した。すなわち、ERN/Neは適切な反応の活性化自体に関連せず、逸脱処理などの刺激処理に関連することが示唆された。
224	T.Kobayashi, M.Inagaki, M.Kaga	Professional Caregiver's View on Mental Health in Parents of Children with Developmental Disabilities: A Nationwide Study of Institutions and Consultation Centers in Japan	ISRN Pediatrics Volume 2012 (2012), Article ID 121898, 7pages doi:10.5402/2012/121898	障害児をもつ保護者のメンタルヘルスに関する発達障害関連施設の実態調査の結果、多くの施設が保護者との対応における困難を経験し、保護者(主に母親)自身の問題(パーソナリティ・メンタルヘルス・理解力などが最大の要因であった。保護者の精神障害は、うつ病(うつ状態)が多く、見の不適切な養育以外に不登園・社会から途絶が問題になった。社会資源の活用は保護者のメンタルヘルスを左右し、福祉的支援の充実、精神障害・発達障害をもつ保護者への具体的対応法の習得が必要と考えられた。
225	Inui T, Saito Y, Sakuma H, Hatakeyama H, Goto Y-I, Arai H, Sasaki M.	Profiles of blood biomarkers in alternating hemiplegia of childhood -increased MMP-9 and decreased Substance P suggest its pathophysiology-	Brain Dev 2012;34:196-200.	原因不明の稀な疾患である小児交互性片麻痺患者の血液で、MMP-9の増加とSubstance Pの減少を見出した。片頭痛との関連性について検討した。
226	Kuki I, Kawawaki H, Okazaki S, Kimura S, Nakano T, Fukushima H, Inoue T, Tomiwa K, Itoh M	Progressive Leukoencephalopathy with Intracranial Calcification, Congenital Deafness and Developmental Deterioration.	Am J Med Genet A 2011; 155:2832-2837	頭蓋内石灰化を伴う進行性大脳白質変性症の症例を、これまでの文献的レビューを含めて報告した。
227	Kameyama A, Matsumoto T, Katsumata Y, Akazawa M, Kitani M, Hirokawa S, Takeshima T	Psychosocial and psychiatric aspects of suicide completers with unmanageable debt: A psychological autopsy study	Psychiatry and Clinical Neurosciences 65: 592-595, 2011.	本研究では、心理学的剖検の手法によって情報収集がなされた自殺既遂事例のうち、負債を抱えた中高年男性事例(負債群)16例の心理社会的特徴を、負債のなかった中高年男性事例(非負債群)23例との比較を通じて明らかにした。負債群では、自営業・社会から途絶が多く、非負債群と年取では差はないものの、経済的問題を抱えていた者が多かった。また、負債群では死亡1年前に精神科受診をしていない傾向が示された。
228	Komine O, Nagaoka M, Hiraoka Y, Hoshino M, Kawaguchi Y, Pear WS, Tanaka K	RBP-J promotes the maturation of neuronal progenitors	Dev Biol 354, 44-54, 2011	RBP-Jを小脳発生後期でコンデインオンノルツクアウトマウスを解析することによって、バスケット細胞および星状細胞が、神経上皮細胞から多段階の前駆細胞を経て分化して行くことを明らかにした。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
229	Takahashi H, Kanesaki H, Igarashi T, Kameya S, Yamaki K, Mizota A, Kudo A, Miyagoe-Suzuki Y, Takeda S, Takahashi H	Reactive gliosis of astrocytes and Muller glial cells in retina of POMGnT1-deficient mice.	Mol Cell Neurosci. 47: 119-130, 2011.	muscle-eye-brain(MEB)病の原因であるPOMGnT1遺伝子変異マウスを解析した結果、POMGnT1によって糖鎖修飾を受ける α -ジストログリカンの異常により基底膜とミエリン鞘で構成されるILMが脆弱になり、また血管周囲を取り巻くアストロサイトの機能が障害されることで、様々な眼病変が引き起こされることが明らかになった。本研究は日本医科大学眼科との共同研究であり、Mol Cell Neurosci誌の表紙にも採用された。
230	Koshiha M, Mimura K, Sugiura Y, Okuya T, Senoo A, Ishibashi H, Nakamura S.	Reading marmoset behavior 'semantics' under particular social context by multi-parameters correlation analysis	Progress in Neuro-Psychopharmacology & Biological Psychiatry, 35: 1499-1504, 2011.	成体オスススマーモセットを出会わせたとときの行動応答を主成分分析によって解析した結果、active, freeze, alert及びvalfintyの4カテゴリに分類されることがわかった。このカテゴリ分類は行動変化とホルモン変化が対応することによって裏付けられた。
231	Jonas B Zimmermann, Seki K, Andrew Jackson.	Reanimating the arm and hand with intraspinal microstimulation.	J. Neural Eng. 8, 号: 5 記事番号:054001,AUG 2011	上肢運動機能麻痺患者を対象とした脊髄刺激による上肢運動再建技術確立のため、刺激パラメータをサル脊髄において検討した。
232	Banno T, Ichinohe N, Rockland KS, Komatsu H	Reciprocal connectivity of identified color-processing modules in the monkey inferior temporal cortex	Cereb Cortex. 21:1295-1310, 2011	色に反応しない大脳皮質側頭葉の高次脳領域同士が、特殊な結合をしているのを見いだした。相当、高次の皮質領域でも色は独立してネットワークを作っていることが推察される。これは、色失認のメカニズム/治療を考える上で重要な研究と考えられる。
233	Natsue Yoshimura, Charles S. DaSalla, Takashi Hanakawa, Masa-aki Sato, Yasuharu Koike	Reconstruction of flexor and extensor muscle activities from electroencephalography cortical currents	NeuroImage, Vol.59, Issue 2, 16 January 2012, pp. 1324-1337	脳情報の正確な読み取りはブレインマシンインターフェイスへの応用に向けた重要な課題である。空間解像度に優れた機能的MRIを用いて運動野活動の空間分布を決定し、時間解像度に優れた脳波を用いて運動中の脳活動を計測することで、運動中の筋活動を脳波情報から非侵襲的に再構成することに成功した。
234	T. Kaido, Y. Moriyama, K Ueda, W. Higashihara, H. Sakaguchi, K. Kichikawa	Recurrent brain abscess induced by pulmonary arteriovenous fistula.	J Infect Chemother 17(4), 552-554, 2011	肺動脈瘻奇形に伴った再発脳膿瘍の治療についての症例
235	Inoue Y, Sakihara K, Gunji A, Ozawa H, Kimiya S, Shinoda S, Kaga M, Inagaki M	Reduced prefrontal hemodynamic response in children with AD/HD during the Go/NoGo task: A NIRS study.	Neuroreport.2012 Jan 25;23(2):55-60.	本研究ではAD/HD児を対象にGo/NoGo課題を行っている際の脳血流応答を調べた。近赤外分光法を用いて、課題条件間の応答抑制の有無の違いを、前頭部における酸素化および脱酸素化ヘモグロビン濃度によって比較した。定型発達児に比べて、AD/HD児は抑制が必要な課題(NoGo条件)では前頭部の活動が有意に低下していた。しかしながら、抑制が求められる課題(Go条件)では定型発達児とAD/HD児に有意な違いはみとめられなかった。本知見から、AD/HD児は応答抑制時に異なる脳血流動態を示し、一方、応答実行時では差はみとめられず、近赤外分光法がAD/HD児における抑制機能障害の評価法として有用であることが示唆された。
236	Takagi S, Iwata K, Nakagawa A	Relationship between body mass index and blood pressure elevation during electroconvulsive therapy	J Clin Anesth. Feb;24(1):33-7, 2012	ECT中の血圧上昇とBMIの関係を検討した
237	Ota M, Nemoto K, Sato N, Mizukami K, Yamashita F, Asada T.	Relationship between white matter T2 hyperintensity and cortical volume changes on magnetic resonance imaging in healthy elders.	Int J Geriatr Psychiatry 26(9):886-92, 2011	T2 WMHの局所的分布量と皮質容量の関連を健常被験者を対象に検証した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
238	Takahashi H, Iwase M, Yasuda Y, Ohi K, Fukumoto M, Iike N, Yamamori H, Nakahachi T, Ikezawa K, Azechi M, Canuet L, Ishii R, Kazui H, Hashimoto R, Takeda M.	Relationship of prepulse inhibition to temperament and character in healthy Japanese subjects.	Neurosci Res. 2012 Feb;72(2):187-93.	本研究では、健康日本人169名において、聴覚性驚愕反射のブレパルス・インヘンション (PPI) 及びTemperament and Character Inventoryで評価された気質・性格との関連について調べた。PPIは、self transcendenceという性格と有意な負の相関を認め、PPIで評価されるsensorimotor gatingの減弱は、自己超越性と関連する可能性が示唆された。
239	Hori H, Teraishi T, Sasayama D, Matsuo J, Kawamoto Y, Kinoshita Y, Kunugi H.	Relationships between season of birth, schizotypy, temperament, character and neurocognition in a non-clinical population.	Psychiatry Res. 2012 Jan 30;195(1-2):69-75.	統合失調症の疫学的研究において、冬生まれが統合失調症発症のリスクを10%程度高めることが知られている。そこで本研究では、健康者の統合失調型パーソナリティ傾向についても出生季節の影響がみられるかを調べた。本研究により、冬生まれの健康者では他の季節に出生した健康者に比べて統合失調型パーソナリティ傾向が有意に高いことが明らかになり、統合失調症と統合失調型パーソナリティの連続性が示唆された。
240	Wang B, Miyagoe-Suzuki Y, Yada E, Ito N, Nishiyama T, Nakamura M, Ono Y, Motohashi N, Segawa M, Masuda S, Takeda S	Reprogramming efficiency and quality of induced Pluripotent Stem Cells (iPSCs) generated from muscle-derived fibroblasts of mdx mice at different ages.	PLoS Curr. 10.1371/currents.RRN1274, 2011	筋ジストロフィーのモデルマウスからiPS細胞を樹立する際のマウスの週齢の影響を検討し、細胞老化がリプログラミング効率を低下させ、それがTGF-betaシグナルの阻害で安定化することを明らかにした。本論文は新世代のon line Journal であるPLoS Currents: Muscular Dystrophyの創刊号に掲載された。
241	Leonides Canuet, Ryouhei Ishii, Roberto D. Pascual-Marqui, Masao Iwase, Ryu Kurimoto, Yasunori Aoki, Shunichiro Ikeda, Hidetoshi Takahashi, Takayuki Nakahachi, Masatoshi Takeda.	Resting-State EEG Source Localization and Functional Connectivity in Schizophrenia-Like Psychosis of Epilepsy	Resting-State EEG Source Localization and Functional Connectivity in Schizophrenia-Like PLoS One, 6 (11) e27863, 2011	てんかん患者で、精神病症状を有する群及びびおさない群各21名の安静時脳波を測定した。eLORETA法で、電位源推定及び機能的結合性解析を行った。精神病症状を有する群は有さない群と比べ、両側頭頂葉領域のθ律動が減弱し、焦点と同側半球の側頭葉-前頭前野のβ帯域の機能的結合が増強しており、この結合は陽性症状と関連し、デフォルト・モード・ネットワークの障害は、てんかんの精神病症状と関連すると考えられた
242	Hoffman EP, Bronson A, Levin AA, Takeda S, Yokota T, Baudy AR, Connor EM	Restoring dystrophin expression in duchenne muscular dystrophy muscle progress in exon skipping and stop codon read through.	Am. J. Pathol.179:12-22, 2011	デュシェンヌ型筋ジストロフィーに対する新規治療法の中で、ジストロフィン遺伝子変異の修復を企図した、エクソン・スキップ治療とリードスルー治療の最新の動向について、前臨床的研究と治療の観点から総括した。
243	Iwai T, Saitoh A, Yamada M, Takahashi K, Hashimoto E, Ukai W, Saito T, Yamada M	Rhotekin modulates differentiation of cultured neural stem cells to neurons	J Neurosci Res 90 : 1359-1366, 2012	これまでに我々は、抗うつ薬の長期投与によるラット脳内の遺伝子変化を網羅的に探索した結果、低分子G 蛋白質Rho の下流分子rhotekin の発現が上昇することを見出した。本論文では、神経幹細胞においてRhotekinの発現をsiRNAを用いて抑制した際の生存率、細胞増殖、細胞周期、神経分化率、下流タンパク質の局在、形態に対する影響を蛍光免疫細胞染色法により明らかにした。
244	Sugiyama A, Saitoh A, Yamada M, Iwai T, Hashimoto T, Makino Y, Ohhashi M, Hamada S, Oka J-I, Inagaki M, Yamada M	Riluzole produces distinct anxiolytic-like effects in rats through blockade of voltage-activated sodium channels.	J Pharmacol Sci 118:Suppl, pp68, 2012.	グルタミン酸神経調節薬であるリルゾールは、全般性不安障害や強迫性神経障害の患者における種々の症状を改善する可能性が示唆されているものの、その作用機序は十分に明らかになっていない。本研究では、リルゾールの抗不安様作用機序を明らかにする目的で、抗不安作用評価可能な動物モデルを構築し、その作用機序について検討した。その結果、リルゾールは、生得的不安の動物モデルで抗不安様作用を示し、さらにその機序にナトリウムチャンネルの関与が示唆された。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
245	Sugiyama A, Saitoh A, Iwai T, takahashi K, Yamada M, Sasaki-Hamada S, Oka J, Inagaki M, Yamada M	Riluzole produces distinct anxiolytic-like effects in rats without the adverse effects associated with benzodiazepines.	Neuropharmacology 62: 2489-2498, 2012.	グルタミン酸神経調節薬であるリルゾールは、全般性不安障害や強迫性神経障害の患者における種々の症状を改善する可能性が示唆されているものの、その作用機序は十分に明らかでない。本研究では、リルゾールの抗不安作用機序を明らかにする目的で、抗不安作用評価可能な動物モデルを構築し、その作用機序について検討した。その結果、リルゾールは、生得的不安の動物モデルで抗不安様作用を示し、さらにその機序にナトリウムチャンネルの関与が示唆された。
246	Takahashi K, Murasawa H, Yamaguchi K, Yamada M, Nakatani A, Yoshida M, Iwai T, Inagaki M, Yamada M, Saitoh A	Riluzole rapidly attenuates hyperemotional responses in olfactory bulbectomized rats, an animal model of depression.	Behav Brain Res. 216: 46-52, 2011.	うつ病治療メカニズムにおけるグルタミン酸神経系の役割の解明をめざして、グルタミン酸遊離阻害薬リルゾールを用いた病モデル動物である嗅球摘出ラットに投与した際の情動行動に及ぼす影響を検討した。ミフラミンは7日間投与により有意な情動過多反応を低下させた。リルゾールは投与1日、7日後ともに有意な情動過多反応を低下させた。従って、riluzoleはミフラミンと異なり急性の抗うつ様効果を有する可能性が示唆された。
247	Maki T, Matsumoto R, Kohara N, Kondo T, Son I, Mezaki T, Nishino I, Ikeda A, Takahashi R	Rippling is not always electrically silent in rippling muscle disease.	Muscle Nerve 43(4): 601-605, Apr, 2011	Rippling muscle現象は通常、電気生理学的には筋活動が認められずとされている。本報告では、rippling muscle病と臨床的・遺伝学的に診断が確定した30歳男性において、詳細な電気生理学的検討を行った。その結果、単一筋線維活動電位様の短持続・低振幅波のパーストが、rippling muscle現象に伴って認められた。このことは、rippling muscle現象が筋線維の過興奮性によってもたらされうることを示している。
248	Tsutsumi A, Izutsu T, Matsumoto T	Risky sexual behaviors, mental health, and history of childhood abuse among adolescents.	Asian Journal of Psychiatry. 5: 48-52, 2012.	少年鑑別所入所者を対象とした自記式質問紙調査により、幼少期に虐待やネグレクトの被害に遭遇した者は、青年期に様々な精神保健的問題、性行動、薬物使用の問題を呈しやすいことが明らかになった。
249	Yamamoto S, Kohsaka S, Nakajima K.	Role of cell cycle-associated proteins in microglial proliferation in the axotomized rat facial nucleus.	Glia. 60, 570-581, 2012	ラットの顔面神経を切断した場合、その核内でミクログリアの増殖が惹起されることが知られている。本論文では、このミクログリアの増殖メカニズムにつき検討し、増殖因子であるM-CSFの下流でJNK、p38の活性化が引き起こされ、更にサイクリン依存性の種々のキナーゼが発現上昇することを明らかにした。
250	Furusawa Y, Mukai Y, Kobayashi Y, Sakamoto T, Murata M.	Role of the external oblique muscle in upper camptocormia for patients with Parkinson's disease.	Mov.Dis. Epub 30 JAN 2012 DOI: 10.1002/mds.24930	パーキンソン病における腰部がり姿勢を変曲点により、上腹部と腰部型に分類し、上腹部の原因筋が外腹斜筋であることを明らかにした。
251	Hori H, Teraishi T, Ozeki Y, Hattori K, Sasayama D, Matsuo J, Kawamoto Y, Kinoshita Y, Higuchi T, Kunugi H	Schizotypal personality in healthy adults is related to blunted cortisol responses to the combined dexamethasone/corticotropin-releasing hormone test	Neuropsychobiology 63:232-241, 2011	統合失調症は視床下部-下垂体-副腎系機能異常と関連することが知られている。しかし、健常者の統合失調型パーソナリティ傾向とHPA系の関連についての検討は少ない。本研究では、質問紙で測定した健常者の統合失調型パーソナリティ傾向と dexamethasone/CRHテストによる cortisol 反応の反応性との関連を調べた。本研究により、統合失調型パーソナリティ傾向が cortisol 反応の低下(過剰抑制)と関連していることが明らかになり、統合失調症と統合失調型パーソナリティ傾向の連続性が示唆された。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
252	Xilouri, M., Kyratzi, E., Pitychoutis, P.M., Papadopoulou-Daifoti, Z., Celine Perier, C., Vila, M., Maniati, M., Ayse Ulusoy, A., Kirlik, D., David S. Park, D.S., Wada' K., Stefanis, L.	Selective Neuroprotective Effects of the S18Y Polymorphic Variant of UCH-L1 in the dopaminergic system.	Hum. Mol. Genet., 21, 874-879, 2012	神経変性疾患原因蛋白質の一つであるUCH-L1の遺伝子多型がドパミン神経細胞の細胞死防御に関わっていることを発見した。チロシン型が防御的であることを示した結果はパーキンソン病などの治療法開発に貢献する。
253	Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M, Hosokawa T	Self-face recognition in children with autism spectrum disorders: A near-infrared spectroscopy study	Brain Dev. 33: 494-503, 2011	本研究は、自閉症スペクトラム障害 (ASD) 児の自己顔認知に関する神経基盤を検討した。対象を健常成人・健常小児・ASD児とした実験研究を行った。自己顔認知課題時の脳血流動態を近赤外線スプレッドライトトモグラフィ (NIRS) にて、また眼球運動を非接触型眼球追跡装置にて、同時計測を行った。結果、ASD児は右側下前頭回周辺の賦活に特異性がみられた。特に、臨床症状が重篤であるほど、賦活の低下が顕著であった。社会性認知の基礎段階に特異性がある可能性を見出した。
254	Kishi T, Fukuo Y, Okochi T, Kitajima T, Kawashima K, Naitoh H, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N.	Serotonin 6 receptor gene is associated with methamphetamine-induced psychosis in a Japanese population.	Drug Alcohol Depend. 113: 1-7, 2011.	我が国では行われている多施設共同研究「薬物依存・薬物性精神病における発症脆弱性に関するゲノム研究」による成果である。本論文では、5-HT6 receptor 遺伝子多型との相関研究を報告した。
255	Kobayakawa M, Inagaki M, Fujimori M, Hamazaki K, Hamazaki T, Akechi T, Tsugane S, Nishiwaki Y, Goto K, Hashimoto K, Yamawaki S, Uchitomi Y.	Serum Brain-derived Neurotrophic Factor and Antidepressant-naive Major Depression After Lung Cancer Diagnosis.	Japanese Journal of Clinical Oncology 41: 1233-1237, 2011	肺がん患者のうつ病性障害と血漿中の脳由来神経栄養因子の関連を検討した。大規模コホート内ケータースコアを用いて Hospital Anxiety and Depression Scale 得点が10点より高い群81名、5点未満の81名の間で比較した。脳由来神経栄養因子の濃度は両群間で有意な違いを認めなかった。副次的に実施した性を層別化した解析では有意ではないものの女性のうつ病性障害患者において低い傾向が認められた。
256	Gamble KL, Motsinger-Reif AA, Hida A, Borsetti HM, Servick SV, Ciarleglio CM, Robbins S, Hicks J, Carver K, Hamilton N, Wells N, Summar ML, McMahon DG, Johnson CH	Shift work in nurses: contribution of phenotypes and genotypes to adaptation.	PLoS One 6: e18395, 2011.	388名の勤務または夜勤の看護師を対象に、睡眠習慣、日周指向性、遺伝子多型を調べた。概日時計システムが、明暗条件や社会・職場時間のスケジュールが頻繁にまた不規則に切り替わる環境に適応する上で、睡眠習慣、日周指向性、遺伝子多型が寄与することが明らかとなった。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
257	Inada N, Kamio Y	Short forms of the Japanese version WISC-III for assessment of children with autism spectrum disorders	Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry, 51 Supplement, 11-19.	背景:ウェクスラー式児童用知能検査(WISC)の簡易版は臨床及び研究的で提案されてきているが、日本ではそれらの妥当性はまだ確認されていない。 目的:日本語版WISC-IIIの7種類の簡易版について、自閉症スペクトラム(ASD)児童に対する妥当性を検討することとした。 方法:まず、海外の先行研究で使用されている7種類の簡易版について、日本人児童の標準化サンプルを用いて信頼性と妥当性を確認した。次に、ASD児童(平均IQ=12.5歳;平均全検査IQ=93.4)のデータを使用して、推定IQと全検査IQの関連を調べること、2つのIQの平均比較すること、知能水準の誤分類率を調べることを、使用した下位検査の評価点と全検査IQの重相関を調べることにより、妥当性を検討した。 結果:3種類の簡易版(「知識」「絵画完成」;「単語」「理解」「積木模様」「組合せ」;「類似」「単語」「絵画配列」「積木模様」)がASD児童のIQのアセスメントには有用であると判断された。 考察:上記3種類の簡易版は、臨床および研究目的において、被験者の精神的、身体的負担を軽減するために役立つが、臨床場面での使用の際には、その解釈に十分注意するべきである 背景:ウェクスラー式児童用知能検査(WISC)の簡易版は臨床及び研究目的で提案されてきているが、日本ではそれらの妥当性はまだ確認されていない。
258	Kandori A, Yamamoto T, Sano Y, Oonuma M, Miyashita T, Murata M, Sakoda S.	Simple Magnetic Swallowing Detection System	IEEE SENSORS JOURNAL. 2012;12(4):805-811	磁気を用いた非侵襲的な嚥下評価装置を開発した。(日立製作所との共同開発)
259	Odagiri S, Meguro R, Asano Y, Tani T, Ichinohe N	Single axon branching analysis in rat thalamocortical projection from the anteroventral thalamus to the granular retrosplenial cortex.	Front. Neuroanat. 5:63, 2011	本研究は、道順の記憶などに関する後部帯状回にある小さなユニット上の構造への粗床からの入力を一軸索レベルで調べた研究である。1ユニットへの入力は、ユニット内では、その中にちよど収まるように広がっているが、ユニットの無い層では、より大きな広がりを見せた。道順記憶のこのユニットの働きを知るための、基盤を作る研究である。
260	Tanaka S, Takeda K, Otaka Y, Kita K, Osu R, Honda M, Sadato N, #Hanakawa T, *Watanabe K (* equal contribution)	Single session of transcranial direct-current stimulation transiently increases knee extensor force in patients with hemiparetic stroke.	Neurorehabil Neural Repair 25: 565-569, 2011	脳への直流電気刺激により脳卒中患者の下肢筋力が増強することを初めて報告
261	Iizuka R, Ueno T, Morone N, Funatsu T	Single-molecule fluorescence polarization study of conformational change in archaeal group II chaperonin	PLoS One. 6:e22253, 2011	シャペロンは、すべての細胞が持つチューブ型をしたタンパクで、他のタンパクの形態を変えて、機能的タンパクにしたり、タンパクの修復に役立っている。このチューブ型のシャペロンは、チューブの部分が開閉するが、そのメカニズムはよく分かっていない。この研究では、蛍光一分子イメージングを用いて、その形態の変化の様子を観察した。シャペロンは、細胞が病的になることを防いでいるため、その障害は、種々の疾患をきたす。そのため、本研究は、この機能を回復させる治療法への第一歩となると考えられる。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
262	Kishi T, Fukuo Y, Kitajima T, Okochi T, Yamanouchi Y, Kinoshita Y, Kawashima K, Inada T, Kunugi H, Kato T, Yoshikawa T, Ujike H, Ozaki N, Iwata N.	SIRT1 gene, schizophrenia and bipolar disorder in the Japanese population: an association study.	Genes Brain Behav. 2011 Apr;10(3):257-63.	SIRT1遺伝子は統合失調症リスクと関連するが双極性障害リスクとは関連しなことを報告した。
263	Ono Y, Masuda S, Nam H, Benezra R, Miyagoe-Suzuki Y, Takeda S	Slow-dividing satellite cells retain long-term self-renewal ability in adult muscle.	J Cell Sci. 125:1309-1317, 2012	筋衛星細胞は生後の骨格筋特異的幹細胞である。我々は蛍光色素PKH26を用いてマウス筋衛星細胞の動態を解析し、非常にゆっくり分裂する細胞分画が高い自己複製能と骨格筋再生能を有することを見出した。この細胞はId1を高発現することも併せて報告した。
264	Furukawa TA, Akechi T, Shimodera S, Yamada M, Miki K, Watanabe N, Inagaki M, Yonemoto N	Strategic use of new generation antidepressants for depression: SUN()D study protocol	Trials, 12:116, 2011.	大うつ病に対する日常の抗うつ薬治療を決定するためのエビデンスが欠けている。第一選択の抗うつ薬はどれか、どの用量が最適かについての情報がない。近年報告されたメタアナリシスから、一部の答えを示唆する結果が得られており、本研究では、単極性うつ病患者に対する第一選択薬と第二選択薬の最適化の確立を目的として本臨床試験を提案した。SUN()D, the Strategic Use of New generation antidepressants for Depressionは、評価者盲検化並行群多施設無作為比較試験である。本研究により、大うつ病の治療に必要な重要な臨床疑問が解決される。本臨床試験はClinicaltrials.govにNCT01109693と登録されている。
265	Yoshino Y, Yamamoto S, Kohsaka S, Oshiro S, Nakajima K.	Superoxide anion contributes to the induction of tumor necrosis factor alpha (TNF α) through activation of the MKK3/6-p38 MAPK cascade in rat microglia.	Brain Res. 1422, 1-12, 2011	活性酸素はミクログリアにおけるTNF- α の産生を促進し、これには細胞内のMAPKの活性化が必要であることを明らかにした。
266	Fuji T, Yamamoto N, Hori H, Hattori K, Sasayama D, Teraishi T, Hashikura M, Tatsumi M, Okamoto N, Higuchi T, Kunugi H.	Support for association between the Ser205Leu polymorphism of p75(NTR) and major depressive disorder.	J Hum Genet. 2011 Nov;56(11):806-9.	われわれは先行研究において、ニューロトロフィン共通の低親和性受容体であるp75(NTR)にSer205Leu多型を見出し、大うつ病と関連することを報告した。今回、独立の比較的大きなサンプルで再現性を検討したところ、特に女性において関連を支持する結果が得られた。
267	Yamada T, Okaniwa N, Saneyoshi H, Ohkubo A, Seio K, Nagata T, Aoki Y, Takeda S, Sekine M	Synthesis of 2'-O-[2-(N-Methylcarbamoyl)ethyl]ribonucleosides Using Oxa-Michael reaction and chemical and biological properties of oligonucleotide derivatives incorporating these modified ribonucleosides.	J Org Chem. 76: 3042-3053, 2011	エクソン・スキップ等の人工核酸治療において、より効果的で安定した新規人工核酸の開発が求められている。今回、リボスクレオシドの2'-O基の修飾を改良した三種類の新規人工核酸を合成し、その安定性・有効性を評価した。2-(N-methyl carbamoyl ethyl)(MCE)で修飾したリボスクレオシドがスクレアーゼ耐性やDNA/RNAへの高い結合能を示し、mdx52マウスを用いたin vivoでのエクソン・スキップにおいて高い効率を示した。
268	Hasegawa T, Konno M, Baba T, Sugeno N, Kikuchi A, Kobayashi M, Miura E, Tanaka N, Tamai K, Furukawa K, Arai H, Mori F, Wakabayashi K, Aoki M, Itoyama Y, Takeda A	The AAA-ATPase VPS4 regulates extracellular secretion and lysosomal targeting of α -synuclein	PLoS One. 6(12):e29460, 2011	パーキンソン病の神経細胞変性のメカニズムをLewy小体の蓄積で考えようとしている研究である。Vacuolar protein sorting 4(VPS4)が細胞変性とその変性の広がり重要な役割を果たしている。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
269	Yoshida T, Sasaki M, Yoshida M, Namekawa M, Okamoto Y, Tsujino S, Sasayama H, Mizuta I, Nakagawa MY, Yoshida T, Sasaki M, Yoshida M, Namekawa M, Okamoto Y, Tsujino S, Sasayama H,	The Alexander disease study group in Japan. Nationwide survey of Alexander disease in Japan and proposed new guidelines for diagnosis.	J Neurol 2011;258:1998-2008.	アレキサンダー病の国内調査を行い、乳児型、若年型、成人型の臨床症状や神経画像所見を再検討した。乳児型は大脳から下方へ病変が拡大し、成人型は延髄・頸髄から上方へ病変が拡大することを確認した。大脳型と延髄型の2型に大別できることを示した。
270	Kishi T, Yoshimura R, Fukuo Y, Kitajima T, Okochi T, Matsunaga S, Inada T, Kunugi H, Kato T, Yoshikawa T, Ujike H, Umene-Nakano W, Nakamura J, Ozaki N,	The CLOCK Gene and Mood Disorders: A Case-Control Study and Meta-analysis.	Chronobiol Int. 2011 Nov;28(9):825-33.	時計遺伝子であるCLOCKの遺伝子多型はうつ病における睡眠の調節障害や抗うつ薬との反応性に関連するという報告がある。本研究は気分障害のリスクとの関連研究を行い、先行研究のメタアナリシスも行ったが、気分障害リスクとの関連は認められなかった。
271	Wang W, Takashima S, Segawa Y, Itoh M, Shi X, Hwang SK, Nabeshima K, Takeshita M, Hirose S	The Developmental Changes of Nav1.1 and Nav1.2 Expression in the Human Hippocampus and Temporal Lobe.	Brain Res 2011;1389:61-70	ヒト新生児てんかんの原因遺伝子であるNav1.1とNav1.2のヒト脳の発育分布を報告した。てんかんの発症病態を解明する手がかりとなった。
272	Takamatsu I, Sekiguchi M, Yonamine R, Wada K, Kazama T.	The effect of a new water-soluble sedative-hypnotic drug, JM-1232(-), on long-term potentiation in the CA1 region of the mouse hippocampus.	Anesth & Analg 113, 1043-1049, 2011	水溶性新規麻酔薬のシナプス可塑性に及ぼす作用を解明した。
273	Ito J, Oshima I, Nishio M, Sono T, Suzuki Y, Horiuchi K, Niekawa N, Ogawa M, Setoya Y, Hisanaga F, Kouda M, Tsukada K	The effect of Assertive Community Treatment in Japan.	Acta Psychiatrica Scandinavica 123(5): 398-401, -2011.5	日本における包括型地域生活支援 (ACT) の効果を、無作為化比較臨床支援によって検討した (介入群=59名、対照群=59名)。追跡期間である12カ月の結果から、対照群と比較し、ACTを受けた介入群では、入院日数 ($t = 2.33, P = 0.02$), 利用者満足度 ($t = 2.08, P = 0.05$), そしてうつ病尺度 (BPRS: $F = 1.85, P = 0.18$) が、有意に改善していた。日本においてもACTは、精神障害者支援に有効な介入と考えられる。
274	Suzuki Y, Kim Y	The Great East Japan earthquake in 2011; toward sustainable mental health care system.	Epidemiology and Psychiatric Sciences 21: pp 7-11, 2012.	東日本大震災における我が国のこのころのケアの在り方について論じた。災害の概要、我が国の精神保健関係者の対応、国際的な動向のなかでの位置づけ、我が国特有の課題について報告した。
275	Rao SM, Auger JL, Gaillard P, Weissleder R, Wada E, Torres R, Kojima M, Benoit C, Mathis D, Binstadt BA.	The neuropeptide neuromedin U promotes autoantibody-mediated arthritis.	Arthritis Res Ther., 14:R29, 2012	神経ペプチドの一つであるニューロメジンUが自己免疫疾患に関わっていることを関節炎を例に示した。
276	Saitoh, A., Sugiyama, A., Nemoto, T., Fujii, H., Wada, K., Oka, J.I., Nagase, H., Yamada, M.	The novel d opioid receptor agonist KNT-127 produces antidepressant-like and antinociceptive effects in mice without producing convulsions	Behav. Brain Res., 223, 271-279, 2011	デルタ型オピオイド受容体の活性化が抗鬱作用と鎮痛作用を有する可能性をマウスで示した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
277	Ikezawa S, Mogami T, Hayami Y, Sato I, Kato T, Kimura I, Pu S, Kaneko K, Nakagome K.	The pilot study of a Neuropsychological Educational Approach to Cognitive Remediation for patients with schizophrenia in Japan. <i>Psychiatry Res</i>	<i>Psychiatry Res.</i> , 195(3): 107–110, 2012.	認知リハビリテーションの一技法であるNEAR (Neuropsychological Educational Approach to Cognitive Remediation)の有効性について、わが国で初めて検証したパイロットスタディである。研究はquasi-experimental designで実施され、統合失調症患者を対象に、NEAR介入群51名、非介入群21名の間で、6ヶ月の間隔で神経心理検査 (BACS-1)を用いた認知機能の評価を行い、両群間でその変化について比較を行った。その結果、NEAR介入群で非介入群に比して運動速度以外の広い認知領域にわたって有意な改善効果を示唆された。わが国でも十分高い有効性が期待される治療法と考えられた。
278	Miyake K, Hirasawa T, Soutome M, Itoh M, Goto Y, Endoh K, Takahashi K, Kudo S, Nakagawa T, Yokoi S, Taira T, Inazawa J, Kubota T	The protocadherins, PCDHB1 and PCDH7, are regulated by MeCP2 in neuronal cells and brain tissues: implication for pathogenesis of Rett syndrome	<i>BMC Neuroscience</i> 2011, 12:81 (http://www.biomedcentral.com/1471-2202/12/81)	レット症候群の原因遺伝子であるMeCP2の下流遺伝子としてプロトカドヘリンのPCDHB1とPCDH7をみつけた。培養細胞のみならず、マウス脳、ヒト疾患脳においてもMeCP2のtargetであることを明らかにした。
279	Deno M, Miyashita M, Fujisawa D, Nakajima S, Ito M.	The relationships between complicated grief, depression, and alexithymia according to the seriousness of complicated grief in the Japanese general population.	<i>J Affect Disord.</i> 135(1-3):122–127, 2011.	本研究は、アレキシサイミア傾向と複雑性悲嘆との関係性が、アレキシサイミア傾向と抑うつとの関係性とは異なるかを検討した。948名の日本人一般群から得られたデータを分析したところ、アレキシサイミアは複雑性悲嘆の症状をほとんど予測しない(2-4%)一方で、抑うつに対しては影響を与えていること(37-38%)が示された。ことから、アレキシサイミアと複雑性悲嘆は、それぞれ別のメカニズムにより症状が維持されている可能性が示唆された。
280	Shimizu Y, Fujihara K, Kubo S, Takahashi T, Misu T, Nakashima I, Yokoyama K, Itoyama Y, Uchiyama S	Therapeutic efficacy of interferon β -1 b in Japanese patients with optic-spinal multiple sclerosis	<i>Tohoku J. Exp. Med</i> 223:211–214, 2011	インターフェロン β は視神経脊髄炎には有効でないといわれているが、症候の類似した視神経脊髄型の多発性硬化症には有効であった。
281	Mikami Y, Shibuya N, Kimura Y, Nagahara N, Ogasawara Y, Kimura H.	Thioredoxin and dihydroliipoic acid are required for 3-mercaptopyruvate sulfurtransferase to produce hydrogen sulfide	<i>Biochem J.</i> 493, 479–485, 2011	生理活性物質硫化水素生還酵素3MSTには補酵素が必要であるが、これまで不明であった。チオレドキシンとジシロリポ酸が補酵素であることを同定した。
282	Morinaka A, Yamada M, Itofusa R, Funato Y, Yoshimura Y, Nakamura F, Yoshimura T, Kaibuchi K, Goshima Y, Hoshino M, Kamiguchi H, Miki H	Thioredoxin mediates oxidation-dependent phosphorylation of CRMP2 and growth cone collapse.	<i>Science Signaling</i> 4 (170) ra26, 2011	セマフォリン3Aによる成長円錐の崩壊過程に、蛋白質の酸化(リン酸化ではない)が重要な役割を果たしているところを示した論文。チオレドキシンの新たな役割(酸化蛋白質をリン酸化の方向へと導く)を見つけた論文でもある。
283	Shitara H, Shinozaki T, Takagishi K, Honda M, Hanakawa T	Time course and spatial distribution of fMRI signal changes during single-pulse transcranial magnetic stimulation to the primary motor cortex.	<i>Neuroimage</i> 56: 1469–1479, 2011	fMRI, TMS, 末梢神経刺激や筋電図などの統合イメージングを駆使してTMSにより誘発される脳活動の時間変化をはじめて詳細に検討
284	Kaido T, Noda T, Otsuki T, Kaneko Y, Takahashi A, Nakai T, Nabatame M, Tani M	Titanium alloys as fixation device material for cranioplasty and its safety in electroconvulsive therapy.	<i>J ECT.</i> 2011 Mar;27(1):e27–8.	頭蓋形成術にチタン合金を用いて安全に電気痙攣法を施行した症例。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
285	Liang WC, Mitsuhashi H, KedukaE, Nonaka I, Noguchi S, Nishino I, Hayashi YK	TMEM43 Mutations in Emery-Dreifuss Muscular Dystrophy-Related Myopathy.	Ann Neurol 69(6): 1005-1013, Jun, 2011	エミー・ドレイフス型筋ジストロフィー(EDMD)類縁疾患患者2人に核膜蛋白質LUMAをコードするTMEM43遺伝子に変異を見いだし、in vitro実験系で変異蛋白質の異常を明らかにした。TMEM43変異はEDMD類縁筋疾患の新規疾患関連遺伝子である可能性が示唆された。
286	Nakashima I, Takahashi T, Cree BA, Kim HJ, Suzuki C, Genain CP, Vincent T, Fujihara K, Itoyama Y, Bar-Or A	Transient increases in anti-aquaporin-4 antibody titers following rituximab treatment in neuromyelitis optica, in association with elevated serum BAFF levels	J Clin Neurosci. 18(7):997-8, 2011	視神経脊髄炎(NMO)の治療としてB細胞除去の作用があるモノクローナルのリツキシマンを投与すると投与直後はAQP4抗体は下がりますが、その後一時的にBAFFとAQP4抗体は上昇するので注意が必要である。
287	Chu, K.Y., Li, H., Wada, K., Johnson, J.D.	Uchl1 is required for b-cell survival and function in prediabetic lipotoxic conditions.	Diabetologia, 55, 128-140, 2012	神経変性疾患原因蛋白質の一つであるUCH-L1が膵臓β細胞の機能に関わっていることを発見した。代謝環境と脳機能の関連性で着目すべき発見である。
288	Tanaka T, Kai N, Kobayashi K, Takano Yand Naoyuki Hironaka.	Up-regulation of dopamine D1 receptor in the hippocampus after establishment of conditioned place preference by cocaine.	Neuropharmacology 61: 842-848, 2011.	コカインによる海馬のドーパミン受容体の変化を報告
289	Honda T, Fujino K, Okuzaki D, Ohtaki N, Matsumoto Y, Horie M, Daito T, Itoh M, Tomonaga K	Upregulation of insulin-like growth factor binding protein 3 in astrocytes of transgenic 4 mice expressing Borna disease virus phosphoprotein	J Virol 2011;85:4567-4571	アストロサイトのボルナ病ウイルスリン脂質タンパクの過剰発現マウスにおいて、インジュリン様成長因子結合タンパク3(IGFBP3)の発現異常を報告した。このマウスでは自閉様行動異常が観察され、発達期の精神神経機構にIGFBP3が寄与していることを明らかにした。
290	Yamamoto T, Ikeda K, Usui H, Miyamoto M, Murata M.	Validation of the Japanese translation of the Swallowing Disturbance Questionnaire in parkinson's disease patients.	Qual Life Res 2011 Oct 5, Published online:07 October	援護障害質問表の日本語版を作成し、バリデーションした。
291	Kobayashi H, Iwata M, Mitani H, Yamada T, Nakagome K, Kaneko K	Valproic acid improves the tolerance for the stress in learned helplessness rats	Neurosci Res., 72(4): 355-363, 2012.	学習性無力ラットをいったん形成し、4週後に回復したラットに対して、バルプロ酸(VPA)あるいは生理食塩水を投与し、54日後のストレス暴露(強制水泳)時の反応を比較して、バルプロ酸のストレス耐性に対する有効性を検証した。その結果、バルプロ酸投与群は生理食塩水投与群に比して、強制水泳時の無動時間が有意に短縮し、海馬におけるシナプシン1の免疫反応レベルが増大していた。バルプロ酸は、ラットにおけるストレスによるうつ病様行動の再現予防に有効であり、前シナプスにおけるシナプシン1の表現象の変化が寄与している可能性が示唆された。
292	Hashimoto R, Ohi K, Yasuda Y, Fukumoto M, Yamamori H, Takahashi H, Iwase M, Okochi T, Kazui H, Saitoh O, Tatsumi M, Iwata N, Ozaki N, Kamijima K, Kunugi H, Takeda M.	Variants of the RELA gene are associated with schizophrenia and their startle responses.	Neuropsychopharmacology. 2011 Aug;36(9):1921-31.	RELA遺伝子が統合失調症のリスクと驚愕反応に関連する可能性を報告した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
293	Umehara H, Fangerau H, Gaebel W, Kim Y, Schott H, Zielasek J	Von der "Schizophrenie" zur "Störung der Einheit des Selbst".	Der Nervenarzt, 82 (9): 1160-1168, 2011.	Schizophreniaに対する精神分裂病という日本語が学術的にも疑義があるだけでなく新たなステイグマを生じさせているとの認識に立ち、精神神経学会では2002年に統合失調症という呼称に変更された。その経緯として、ドイツ語の原語の概念、用法、翻訳の経緯、この疾患に対するステイグマという様々な観点から議論を重ねられ、患者会を含む意見が集約された。この疾患が単一の精神病を構成するか否かについても議論があるが、日本での名称の変更が診断分類の議論に先行する形で進められたことは意義深い。
294	Tokunaga S, Araki T.	Wallerian degeneration slow mouse neurons are protected against cell death caused by mechanisms involving mitochondrial electron transport dysfunction.	J Neurosci Res 90(3):664-671 (2012)	軸索のワーラー変性遅延をフェノタイプとする自然発症変異マウスwildsにおいてNAD産生酵素活性の過剰発現がおきているが、このメカニズムによって神経突起だけでなく細胞体も変性から保護される場合がある。これほどのような場合であるのかにつき、初代培養大脳皮質神経細胞を用いて検討したところ、虚血後の再酸素化刺激モデルにおける保護効果を確認、このメカニズムにはミトコンドリアの機能変化が関与していることが明らかとなった。
295	Kanno S, Abe N, Saito M, Takagi M, Nishio Y, Hayashi A, Uchiyama M, Hanaki R, Kikuchi H, Hiraoka K, Yamasaki H, Iizuka O, Takeda A, Itoyama Y, Takahashi S, Mori E.	White matter involvement in idiopathic normal pressure hydrocephalus: a voxel-based diffusion tensor imaging study.	J Neurol. 258(11):1949-57, 2011	正常圧水頭症(NPH)の大脳白質変化をMRIのDTIイメージで検索した。NPHはアルツハイマー病やパーキンソン病と異なった白質異常を示し、その変化は臨床像と関連していた
296	Wakatsuki S, Saitoh F, Araki T.	ZNF1 E3 ligase promotes Wallerian degeneration by degrading Akt to induce GSK3b-dependent CRMP-2 phosphorylation.	Nature Cell Biol 13(12):1415 - 1423, 2011	神経軸索変性過程においては、ユビキチンリガーゼであるZNF1に依存的なAktのプロテアソーム分解が活性化し、これによってGSK3BによるCRMP2のリン酸化が強まって微小管が不安定化し、軸索変性が誘導されることを明らかにし、さらにこの系の各段階を抑制することによって、ワーラー変性は強く抑制されることを、培養モデル・動物モデルを用いて示した。
297	安西信雄、伊藤敦子	【安全・安心の精神科臨床サーベイス:どこでも役立つリスク軽減の方法と実践】(第1章)総論 精神科臨床サーベイスにおける安全・安心とは? 安全・安心の精神科臨床サーベイス 基本的な考え方と技術(解説/特集)	精神科臨床サーベイス 11(3):308-312, 2011	厚生労働省の「リスクマネジメント作成指針」にもとづいて、医療事故防止のポイントを論じた。医療安全の実践の経験から、安全・安心の医療を推進するためには、「個人の責任を問うのではなく、システムの問題を明らかにし、システムを改善する」など、5つの考え方が基本になることを示した。
298	小山司, 樋口輝彦, 山脇成人, 神庭重信, 寺尾岳, 篠原敦子	Lamotrigineの双極1型障害に対する臨床評価 長期投与試験.	臨床精神医学. 40(7):981-995, 2011	Lamotrigine(LTG)は、双極1型障害患者を対象に日本で実施したプラセボ対照二重盲検比較試験にて気分エピソードの再発・再燃を抑制することが示された薬剤である。他の治療薬を併用可能としてLTGの長期投与時の安全性および有効性を検討するため、二重盲検比較試験の二重盲検期を完了した中止した双極1型障害患者を対象に、52週間の長期継続投与試験を実施し、LTGをオープンラベルにて投与した。本投与開始時にLTGを増量する場合は定められた増量方法に従い、その後併用薬や被験者の症状および忍容性に応じてLTGの投与量が調節された。本投与中の有害事象および副作用の発現率は82%(75/92名)および1%(19/92名)であった。また、双極1型障害の重症度(CGI-S)の平均値は5週間で減少し、その後はほぼ一定の値を示した。以上より、LTGは長期にわたる双極1型障害の維持療法に有用な薬剤となりうるということが期待される。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
299	松本俊彦, 今村扶美, 小林 秘児, 和田 清, 尾崎士郎, 竹内良雄, 長谷川雅彦, 今 村洋子, 谷家優子, 安達泰 盛	PFI(Private Finance Initiative) 刑務所における薬物依存離 脱指導の効果に関する研究: 自習ワークブックとグループ ワークによる介入—第1報—	日本アルコール・薬物医学会誌 46 (2): 279-296, 2011	薬物乱用問題を持つ成人の刑務施設入所者89名を対象とし、一定の待機 期間を経た後に、ワークブックによる自習プログラム、および、グループワー クによるプログラムという2つのコンポーネントからなる、薬物依存離脱指導 を実施し、各コンポーネント実施前後における評価尺度得点の変化を検討 した。その結果、自習ワークブック実施により、薬物の誘惑や渴望を刺激す る状況に抵抗する自信を測定する、薬物依存に対する自己効力感スケー ル得点の有意な低下、ならびに、自らの薬物使用に対する問題意識と治療 必要性の自覚を測定する、SOCRATES-8D得点の有意な上昇が認められ た。しかし、引き続き行われたグループワーク終了後には、自己効力感 スケール得点とSOCRATES-8D得点の両方が有意に上昇した。
300	小林秘児, 松本俊彦, 今村 扶美, 和田 清, 尾崎士郎, 竹内良雄, 長谷川雅彦, 今 村洋子, 谷家優子, 安達泰 盛	PFI(Private Finance Initiative) 刑務所における薬物依存離 脱指導の効果に関する研究: 自習ワークブックとグループ ワークによる介入—第2報: 重症度別による効果の分析—	日本アルコール・薬物医学会誌 46 (3): 368-380, 2011	本研究は、PFI刑務所に服役中の成人男性受刑者のうち、薬物依存症の 問題を抱えた者に対して自習ワークブックとグループ療法を主体とする教 育プログラムによる介入を実施し、その介入効果を薬物依存症の重症度別 に比較検討したものである。その結果、自習ワークブックによる介入は中等 症群に自己効力感の低下と断薬への動機づけの向上をもたらし、重症群 に動機づけの向上をもたらした。グループ療法による介入では、軽症群に 動機づけの向上をもたらし、中等症群には自己効力感の上昇と断薬実行 に向けた意識の向上を、重症群にも自己効力感の上昇をもたらした。
301	瀬戸秀文, 島田達洋, 入野 康, 山本智一, 小泉典章, 吉 住 昭, 竹島 正, 尾島俊之, 野田龍也, 山下俊幸, 小高 晃	医療観察法入院処遇前における精神保健福祉法入院の 現状	臨床精神医学40(11):1495-1505, 2011	医療観察法入院処遇に至った事例に対して、対象行為から医療観察法処 遇決定までの間に、精神保健福祉法に基づき入院したかどうか調査した。 対象行為直後に精神保健福祉法入院が選択された場合、医療観察法の 申立が行われるまでの期間が有意に延長しており、単に病状の問題だけで はなく、警察と検察の連携の問題がある可能性が浮かび上がった。
302	松本俊彦, 小林秘児, 今村 扶美, 赤澤正人, 長 徹二, 松下幸生, 猪野亜朗	うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率: 文献的対 照群を用いた検討。	精神医学 54 (1): 29-37, 2012.	本研究では、2009年12月に5箇所的一般精神科医療機関に入院したうつ 病性障害患者775名に対して、AUDIT (Alcohol Use Disorder Identification Test) を用いて問題飲酒の評価を行い、うつ病性障害患者に おける問題飲酒の併存率を調べた。その結果、男性患者の8.8%、女性患 者の4.7%にアルコール依存症水準の問題飲酒が、また、男性患者の 18.5%、女性患者の11.2%に健康被害の可能性が高い問題飲酒が認められ た。また、地域住民を対象とした文献的対照群との比較から、うつ病性障害 の存在は、20～50代男性と40～50代女性のアルコール依存症水準の問題 飲酒のリスクをオッズ比にして約5.6～7.6倍高め、あらゆる年代の成人女性 における健康被害の可能性が高い問題飲酒のリスクを約4.7～17.6倍高め ることが明らかになった。
303	野田寿恵, 杉山直也, 松本 佳子, 辻脇邦彦, 長谷川利 夫, 伊藤弘人	エッセン精神科病棟風土 評価スキーマ 日本語版 (EssenCES-JPN) の心理測定額的特徴の検討。	精神医学 54 (2): 211-217, 2012.	「エッセン精神科病棟風土 評価スキーマ」の日本語版を作成して、急性期 入院医療を担うスタッフを対象として調査を行い、有用性を検討した。先行 研究と同様に、「治療的な関心」「安全性への実感」「患者間の仲間意識・ 相互サポート」の3因子が抽出された。「治療的な関心」については十分な Cronbach's α 係数が得られ、基準尺度としてのGood Milieu Indexとの相 関も十分であった。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
304	赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 廣川聖子, 立森久照, 竹島正	若年者の自傷行為と過量服薬における自殺傾向と死生観の比較	自殺予防と危機介入 32(1): 34-40, 2012	本研究は、若年者の自傷行為、過量服薬の経験と死生観との関連性を実証的に明らかにすることを目的として、高校生を対象に無記名の自記式質問紙調査を実施した。分析の結果、696名の対象者のうち111名(15.9%)が自傷行為あるいは過量服薬を経験しており、自殺念慮、自殺の計画、自殺企図の経験率は、自傷行為単独の経験群に比べて、自傷行為と過量服薬両方の経験群のほうが高かった。多変量解析の結果、死への関心が高く、死とは何かとよく考えることが、自傷行為単独の経験と関連していた。一方、死は人生における苦痛からの解放であるという考えと、死を恐れないことは、自傷行為と過量服薬両方の経験のみに関連していた。これらの結果から、自傷行為と過量服薬といった自己破壊的行動が進行する中で自殺の危険性が高まり、自傷行為単独の経験と自傷行為と過量服薬両方の経験との背景にある死生観が異なっていることが示唆された。
305	中澤佳奈子、伊藤大輔、巢山 晴菜、鈴木伸一、堀越勝	大学生における罪責感および恥とコーピング方略との関連	早稲田大学 臨床心理学研究 第10巻 第一号 2011年 3月	大学生を対象にした罪悪感の実証研究 我が国における実証的な罪悪感研究は少ない
306	渡辺 さつき、田中 晋、日野慶子、原 恵子、渡辺 雅子	てんかんと誤診されていた失神10症例についての検討	てんかん研究、2011;28:393-400 28号3巻 2011年1月	当院のてんかん専門外来において、前医でてんかんと誤診されていた失神10症例について調査した。意識消失前に失神に多いと誘引があげられたのは9例、前駆症状を伴うものは7例であった。また、随伴症状としてけいれんなどの不随意運動が半数の5例で観察されており、失神に不随意運動を伴う convulsive syncope の存在が十分周知されていないことが示唆された。
307	熊沢 綾、後藤隆章、雲井未敏、小池敏英	ひらがな文の読み障害をもつLD児における漢字単語の読みの特徴。一漢字単語の属性効果に基づく検討一	特殊教育学研究, 49(2), 117-126, 2011.	本研究は32名のLD児と285名の健常児を対象とし、ひらがな文の読み困難をもつLD児の漢字単語の読み特性を検討した。LD児はひらがな文の読み困難をもつLD児(RD児)18名と、ひらがな文の読み困難をもたないLD児(NRD児)14名に分類された。聴覚記憶の弱い子どもは、音韻ループを介しての漢字の読み学習に困難を有するので、読み学習に際して意味ループを用い、視覚的イメージや意味を利用したため、心像性効果や親密度効果が生じたことが推測できる。RD児はNRD児と比べて漢字単語の読みの成績が低かったことから、意味ループの機能レベルが低いことが推測された
308	山本敏之、白井晴美、新庄孝子、市川直美、三好智佳子、村田美穂.	問診によるパーキンソン病患者の誤嚥の評価	嚥下医学 2012:90-98	簡単な問診表でパーキンソン病の誤嚥のリスクをチェックかのうであることを示した。
309	永井 達哉、齊藤 聖、高木俊輔、坂田 増弘、渡辺 雅子、渡辺 裕貴	連日生じるミオクローニー重積に静注用フェノバルビタールのI成人例著効したアンジェルマン症候群の1成人例	てんかん研究、2011;29:44-51 9号1巻 2011年6月	29歳女性のアンジェルマン症候群においてミオクローニー重積がゼパム静注では頓挫できない場合、静注用フェノバルビタールが著効することを報告した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
310	松本俊彦, 尾崎 茂, 小林桜 児, 和田 清	わが国における最近の鎮静剤(主としてベンゾジアゼピン系薬剤)関連障害の実態と臨床的特徴——覚せい剤関連障害との比較——.	精神神経学雑誌 113 (12): 1184-1198, 2011	本研究では, 2009年12月に5箇所的一般精神科医療機関に通院したうつ病性障害患者775名に対して, AUDIT (Alcohol Use Disorder Identification Test) を用いて問題飲酒の評価を行い, うつ病性障害患者における問題飲酒の併存率を調べた。その結果, 男性患者の8.8%, 女性患者の4.7%にアルコール依存症水準の問題飲酒が, また, 男性患者の18.5%, 女性患者の11.2%に健康被害の可能性が高い問題飲酒が認められた。また, 地域住民を対象とした文献的対照群との比較から, うつ病性障害の存在は, 20~50代男性と40~50代女性のアルコール依存症水準の問題飲酒のリスクをオッズ比にして約5.6~7.6倍高め, あらゆる年代の成人女性における健康被害の可能性が高い問題飲酒のリスクを約4.7~17.6倍高めることが明らかになった。この知見は, うつ, 自殺対策においてアルコール問題に注目し, 様々な啓発, 専門治療体制の準備を推進するうえでの重要な基礎資料になると考えられる。
311	松本聡子, 平林直次, 永田貴子, 朝比奈次郎, 瀬戸秀文, 吉住昭	医療観察法入院と精神保健福祉法25条措置入院の運用実態について	精神科, 2012; 20 (1): 89-93	平成20年度における医療観察法入院処遇対象者と25条措置入院者について全国調査を行い, 社会的特性, 診断名, 対象行為の内容などの違いを統計学的に明らかにした。
312	瀬戸秀文, 島田達洋, 入野康, 山本智一, 小泉典章, 吉住昭, 竹島正, 尾島俊之, 野田龍也, 山下俊幸, 小高晃	医療観察法入院処遇前における精神保健福祉法入院の現状	臨床精神医学40(11):1495-1505, 2011	医療観察法入院処遇に至った事例に対して, 対象行為から医療観察法処遇決定までの間に, 精神保健福祉法に基づき入院したかどうか調査した。結果, 831例のうち118例(14.2%)に精神保健福祉法入院が認められた。精神保健福祉法入院が選択された事例には, 殺人, 放火, 強姦がやや多く, 強盗と強姦がやや少ない傾向が認められた。精神保健福祉法入院が用いられる理由は, 興奮, 身体合併症治療, 判決から確定までの「なぎ」, もともと精神科入院中に対象行為, 通院処遇の危機介入, おおれ後に上級審で決定が覆るなどであり, 対象者の病状のみではなく, おおれている状況も, 処遇に影響していると思われた。対象行為直後に精神保健福祉法入院が選択された場合, 医療観察法の申立が行われるまでの期間が有意に延長しており, 単に病状の問題だけではなく, 警察と検察の連携に問題がある可能性がうかがわれた。
313	中村庸子, 村田佳子, 谷口豪, 開道貴信, 渡辺雅子, 渡辺裕貴	外側側頭葉てんかんで一側性眼瞼瞬目を呈した1例	てんかん研究29, 52-58, 2011	一側性眼瞼瞬目は側頭葉てんかんの発作症状のひとつとされている。まれな発作症状である。中村らは, 右眼瞼瞬目から始まり同側の四肢の自動症に移行する右外側側頭葉てんかんの1例で, 右眼瞼瞬目の機序について, 右焦点発作活動により, 左脳が開放されて生じた自動症ではないかと考察した。
314	小林朋佳, 稲垣真澄, 軍司敦子, 矢田部清美, 北洋輔, 加我牧子, 後藤隆章, 小池敏英	学童における呼称能力の発達とひらがな読み書き能力との関連。	脳と発達43:465-471, 2011.	数字や線画を単独あるいは交互に呼称する課題を通常級在籍中の小学1~6年生207名に行い, ひらがな音読能力との関連を検討した。数字呼称時間は小学3~4年まで短縮し続け, 単音読時間と相関していた。一方, 線画呼称は学童期の前半で特に短縮変化が目立ち, 以降はゆるやかに変化した。呼称能力はひらがな音読能力と関連性がみられ, 交互課題は単独音読とより強く相関していた。
315	水野朋子, 中川栄二, 斎藤義明, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 大槻泰介, 長谷川 毅, 山内秀雄, 倉持朗.	限局性皮質形成異常を合併した神経皮膚黒色症の1例.	脳と発達 2011;43:300-303.	メラノサイトの増殖をきたす稀な先天性疾患である神経皮膚黒色症に, これまで報告のない限局性大脳皮質形成異常を合併した男児の症例報告である。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
316	廣實真弓, 森まどか, 千原典夫, 山本敏之	抗MusK抗体陽性重症筋無力症患者の発声発語器官の運動能力改善の経過—薬物治療による治療効果の音響分析を用いた定量的評価	日本コミュニケーション障害学, 28:60-65, 2011	口唇閉鎖不全と舌尖音, 奥舌音の構音のしにくさを訴えた抗MusK抗体陽性重症筋無力症患者(48歳, 女)に対し, プレドニゾロン治療後に定量的な評価としてオーラル・ディアドコキネシスを実施した。/ka/は11か月の治療後改善が見られ, /pa/, /ta/は変化がなかった。治療開始1年後/ka/, /ta/は正常だったが, /pa/は増悪した。治療開始時の重症度から治療効果を予測することは困難だった。
317	坂田 睦, 野田幸裕, 藤田純一, 西田淳志, 三澤史奇, 野田寿恵, 伊藤弘人	抗精神病薬の散剤処方による抗精神病薬の投与量・剤数への影響。	臨床精神薬理 14:1839-1844, 2011.	本研究に同意を得た9病院における18の精神科病院で, 2008年1月調査日に在院し統合失調症の診断の428名を対象とし, 定期処方方抗精神病薬の散剤の有無に分けて分析を行った。散剤を含む群は有意にchlorpromazine換算による投与量が多く, 投与剤数も多かった。散剤の選択が投与量および投与剤数に関連することが示唆された。散剤の選択は最小限にとどめるべきである。
318	吉田有里, 小池敏英, 雲井未敏, 稲垣真澄, 加我牧子	国語学習の低成績の生起に及ぼすひらがな音読困難の影響に関する検討—小学2年生を対象とした検討—	LD研究, 24(1), 116-124, 2012.	国語学習の低成績に及ぼすひらがな音読困難の影響を検討するため, 4種のひらがな音読課題(単音, 意味語, 無意味語, 短文)及び国語基礎テスト(特殊音節の書字, 漢字読字, 漢字書字, 文章理解)を実施した。対象は, 小学校2年生285名で, 音読課題において, 「ややや困難」(平均値+1SD~+2SD)や「困難」(平均値+2SD以上)と評価された児童では, 国語基礎テストの低成績が生じるオッズ比は高いことが示された。さらに, 国語基礎テストの低成績の生起には, 単文課題, 意味語課題, さらに無意味語課題の音読困難が有意に寄与することが多重レジスタアタック分析より指摘できた。
319	伊藤公輝, 中田安浩, 松田博史, 佐藤典子	国立精神・神経医療研究センター 医療用小型サイクロトロロン解体作業報告	核医学 48巻2号 P.109-19 2011	医療用サイクロトロロンの廃棄物管理に関する報告
320	伊藤公輝, 中田安浩, 松田博史, 佐藤典子	国立精神神経医療研究センターサイクロトロロン解体報告	核医学 2: 156-160, 2011	医療用サイクロトロロンの廃棄物管理に関する報告
321	赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 亀山晶子, 横山由香里, 高橋祥友, 川上憲人, 渡邊直樹, 平山正実, 竹島 正	死亡時の職業の有無でみた自殺既遂者の心理社会的特徴。心理学的剖検による76事例の検討	日本社会精神医学会雑誌20(2): 82-93. 2011	心理学的剖検の手法により収集された自殺既遂者76事例の情報をもとに, 有職者と無職者の心理社会的特徴や精神医学的特徴を検討した。その結果, 有職者は既婚の中・高年男性を中心として, 死亡1年前のアルコール関連問題や死亡時点の返済困難な借金といった社会的問題を抱えていた事例が多かった。無職者では, 有職者に比べて女性の比率が高く, 青少年の未婚者が多く認められた。また, 有職者では死亡時点に罹患していたと推測される精神障害としてアルコール使用障害が多く認められた。
322	藤田純一, 西田敦志, 高橋雄一, 新井 卓, 伊藤弘人, 岡崎祐士	児童思春期精神科治療施設の初回エビデンス精神科病に對するサーベイス調査。	精神医学53(9): 891-897, 2011.	本研究は児童思春期の初回エビデンス精神科病患者を治療する機会の多い治療施設が提供する支援と治療の現状把握を目的とした。全国児童精神科医療施設協議会加盟施設と精神科急性期治療病棟もしくは精神科救急入院科病棟を有する病院38施設に治療と支援に必要な構成要素に関するアンケート調査を行った。結果, 訪問支援とケースマネジメントを実施可能な施設が救急・急性期病棟群と比較して児童思春期病棟群で有意に少なかつた。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
323	小高真美, 福島喜代子, 岡田澄恵, 山田素朋子, 平野みぎわ, 島津屋賢子	自殺危機初期介入スキームワークショップの開発とその効果に関する予備的研究	自殺予防と危機介入(31):33-42, 2011	本研究では、自殺予防対策のための新しいゲートキーパー養成ワークショップを開発し、その予備的な効果検討を実施した。ワークショップ参加後は、ワークショップ参加者の、自殺ハイリスク者への初期介入に必要な知識と技術に対する自己効力感の向上および、効果的に自殺予防対策に取り組むための態度の獲得が認められた。ワークショップによる有害事象は報告されておらず、その実施可能性が確認できた。
324	山内貴史, 藤田利治, 立森久照, 竹島正, 稲垣正俊	自殺死亡に対する職業および配偶関係の相乗的関連	厚生省の指標 58(11):8-13, 2011	人口動態調査死亡票および国勢調査を用い、配偶関係と職業の有無を組み合わせた各カテゴリについて年齢の影響を調整した自殺死亡の相対リスクを算出した。ポアソン回帰モデルを用いた分析の結果、調査年度を問わず男女ともに離職および無職は一貫して自殺のリスクを高めうることであり、わけ離別と無職が重なった状態は極めてハイリスクであることが示唆された。
325	稲田尚子, 神尾陽子	自閉症スペクトラム幼児に対する早期支援の有効性に対する客観的評価: 成果と考察。	乳幼児医学・心理学研究, 特集「自閉症スペクトラム障害の早期療育への前方視的研究」, 20, (2), 73-81	本研究では、2歳から3歳まで自治体の一般的早期支援を受けたASD幼児を縦断的に追跡して発達水準と自閉症状態を中心に短期的変化を調べることとを目的として行った。対象は、自治体の1歳半健診または2歳相談会で早期発見されたASD児34名であり、毎週または隔週2時間の自治体の早期支援プログラムを受けた。発達水準の評価には、新版K式発達検査または遠城式乳幼児分析の発達検査を用い、自閉症状態の評価には、自閉症診断面接改定版(ADI-R)、自閉症診断観察尺度(ADOS)を用いた。プログラム参加前(平均24.6ヵ月)と1年後(平均36.7ヵ月)で、発達水準、自閉症状態の改善がみられるかどうかを調べた。その結果、早期支援を受けたASD児の言語・社会領域のDQが有意に向上した。自閉症状態に関して、ADI-R、ADOS両方の相互的対人関係領域得点に有意な改善が認められ、ADOSとADOSによって、2歳時点で何らかのこだわりがあると判断されたASD児は約8割おり、こだわりの種類別に2時点での変化を調べた結果、ものの反復的使用または部分への関心、感覚的な興味、複雑な常同行動が有意に減少した。2歳から早期支援プログラムを受けたASD児は、1年後の3歳時点で言語能力、ASDの三領域において良い変化が認められ、ASD児に対する2歳からの早期介入の重要性が示唆された。
326	赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 廣川聖子, 立森久照, 竹島正	若年者の自傷行為と過量服薬における自殺傾向と死生観の比較	自殺予防と危機介入32(1):34-40, 2012	本研究は、若年者の自傷行為、過量服薬の経験と死生観との関連性を実証的に明らかにすることを目的として、高校生を対象に無記名の自記式質問紙調査を実施した。分析の結果、696名の対象者のうち111名(15.9%)が自傷行為あるいは過量服薬を経験しており、自殺の計画、自殺企図の経験率は、自傷行為単独の経験群に比べて、自傷行為と過量服薬両方の経験群のほうが高かった。多変量解析の結果、死への関心が高く、死とは何かとよく考えることが、自傷行為単独の経験と関連していた。一方で、死は人生における苦痛からの解放であるという考えと、死を恐れていることは、自傷行為と過量服薬両方の経験のみに関連していた。これらの結果から、自傷行為と過量服薬といった自己破壊的行動が進行する中で自殺の危険性が高まり、自傷行為単独の経験と自傷行為と過量服薬両方の経験との背景にある死生観が異なっていることが示唆された。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
327	吉田光爾, 瀬戸屋雄太郎, 瀬戸屋希, 英一也, 高原優美子, 角田秋, 園環樹, 萱間真美, 大島巖, 伊藤順一郎	重症精神障害者に対する地域精神保健アウトリーチサービスにおける機能分化の検討; Assertive Community Treatmentと訪問看護のサービス比較調査より。	精神障害とリハビリテーション, 15(1):54-63, 2011.6	重度精神障害者を地域で支援するアウトリーチサービスであるACT、訪問看護の対象者像・地域支援・支援レベルの観点からサービス内容の比較を量的方法を用いて行い、その異同を検討した。その結果、ACT対照群のGAF得点が訪問看護群よりも低く、コンタクトは比較的長め、高頻度であり、多職種による関わり・地域も含めた訪問支援の展開が行われていた。また、日常的な生活場面での具体的支援の領域では実施率が高い支援項目が多かった。訪問看護群はGAF得点がACT群よりも高く、比較的短い低頻度のコンタクトが特徴であった。また、観察・アセスメント領域の実施率が高く、一度のコンタクトでアセスメントを多面的に行おうとする状況が推測された。
328	熊谷直樹, 向山晴子, 小高真美, 渡部恵子, 谷口禮二, 森泉旬子, 野津真	障害福祉サービスなどにおける精神障害者の自殺と対策の課題—ある大都市近郊地域での事業所調査から	精神医学 52(12): 1193-1202, 2011.	グループホームや地域生活支援事業、社会復帰施設など(以下、障害者福祉サービス)を利用して地域で生活する精神障害者が増加しつつあり、サービス利用者に関する自殺対策が精神保健福祉社における重要な課題の一つとなっている。しかし、これら障害者福祉サービスにおける自殺発生や関連する問題および対策について十分な資料がない。そこで障害者福祉サービスを提供する事業所170か所を対象に、自殺の発生やそれに伴う諸影響について、質問紙を用いた調査を実施した。事業所での自殺対策として、自殺リスクに関する職員の認識、危険要因への配慮、業務マニュアルの整備、外部機関の活用・連携などが課題であることが明らかになった。
329	吉村奈津江, ダサウラチャールズ サヨ, 花川 隆, 佐藤雅昭, 小池康晴	信号源推定を用いた脳波から筋活動信号の再構築	電子情報通信学会 信学技報 Vol.111, No.315, pp.35-40, 2011	脳波から筋活動信号を推定する手法について検討した。
330	栗山健一	精神ストレスの遷延防止-PTSDの発症・悪化防止の為に睡眠医療・特集 睡眠医療と精神医療のリンケージによる効果的な治療プログラムの提案。	精神神経学雑誌 114(2): 136-143, 2012.	睡眠は記憶強化に重要な役割を果たす。情動記憶や恐怖条件付け記憶は睡眠中に強化され、長期間想起しやすいため、暴露直後の睡眠を剥夺することは外傷記憶に近似的性質をもつ記憶が、暴露直後の睡眠を剥夺することによって、記憶強化する機会を奪われる可能性を実験的に検討し、睡眠剥夺の有効性を確認した。これは外傷体験暴露早期の睡眠剥夺介入がPTSDの発症を予防できる可能性を示唆し、外傷体験暴露直後に高頻度で起こる急性不眠の生物学的意義の一端を示す。
331	梶 達彦, 三島和夫, 北村真吾, 榎本みのり, 長瀬幸弘, 李 嵐, 兼板佳孝, 大井田 隆, 西川 徹, 内山 真	精神医学のフロンティア 中高年における抑うつ症状の出現と生活上のストレスとの関連 日本の一般人口を代表する大規模集団での横断研究	精神神経学雑誌 113: 653-61, 2011.	日本の一般人口を代表する大規模集団を対象として、中高年における抑うつ症状の出現と生活上のストレスとの関連について明らかにすることを試みた。2000年に実施された日常生活に関連した21項目の生活上のストレスとその強度、およびCES-D(抑うつ尺度)を含む自己記入式質問紙調査で得られた50歳以上の中高年10,969人のデータを解析に用いた。CES-Dが16-25点のD16-抑うつ症状、26点以上のD26-抑うつ症状の出現と生活上のストレスとの関連をロジスティック回帰分析にて検討した。中高年の約5人に1人がD16-抑うつ症状を、約10人に1人がD26-抑うつ症状を有していた。また、加齢と女性であることが抑うつ症状との強さを関連させていた。ロジスティック回帰分析の結果、D16 およびD26-抑うつ症状の両者の出現と最も強く関連が認められた生活上のストレスは「話し相手がいらない」であった。そのほか、「生きがいがない」「別居・離婚」「することがない」「自分の健康・病氣・介護」などで抑うつ症状の出現と関連が見られた。本研究により、日本の一般人口における中高年の抑うつ症状の出現には社会的な関係の減少、生活目標や人間関係についての喪失体験、健康問題が関連していることが明らかにされた。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
332	岡崎哲也.	精神運動退行と舞蹈アトニーゼを呈する3歳男児. Images in Child Neurology	脳と発達 2011;43:343-344.	非常に稀な乳児期発症DRPLAの脳画像所見を呈示した。
333	伊藤順一郎	精神科医療機関に必要なアウトリーチサービスのスキルと研修.	精神神経学雑誌, 114(1):26-34, 2012.1	「入院中心から地域生活中心へ」の文脈で行われるアウトリーチサービスは、従来のモニタリング中心の訪問活動とは異なり、患者の住む地域社会の生活の様子を良く知り、彼らが市民としての生活を取り戻せるように、暮らしや人生を具体的に応援するための訪問である。このような支援は、精神病棟内での支援とは異なるスキルを必要とする。それは、じかに「生活」に触れていくが故のスキルの違いでもあるが、さらに、アウトリーチを必要とする人々がしばしば医療や支援に抱いている否定的な感情に向き合っていく必要が与えるスキルの違いでもある。 筆者はこのような観点から、アウトリーチに必要なスキルを研修の観点から5段階に分けた試案を提唱した。それは、レベル1: 疾病管理センターから生活中心への視点の転換をする、レベル2: 生活の場を知る。ストレスを減らす。相手に寄り添い信頼関係を築く、レベル3: ストレンジス・モデル、ケアマネジメント、心理教育などの技能に習熟する、レベル4: チームでの活動が円滑に出来る、レベル5: パターナリズムが必要な状況であっても、逃げずに向き合うことが出来る、と整理された。 また、精神科医療機関の地域精神科医療に対する姿勢を「地域化」として、6つのステージに試みに分け、それぞれのステージのために必要なスキルを提示した。
334	関口隆一, 塚本哲司, 深井美里, 菊池礼子, 岡崎直人, 山川敬子, 森宏美, 黒田安計, 杉山一, 松本俊彦	精神科救急医療電話相談における自殺企図切迫例への対応	埼玉県医学会雑誌16(1):291-296, 2011	精神科救急医療電話相談における自殺企図切迫例への対応について、Saitama Suicide Intervention Scale & Guideline(SSISG)と名付けたアセスメントとガイドラインを紹介し、SSISGを用いて対応した事例を紹介する。SSISは全17項目で構成され、相談者本人に自殺念慮があれば、SSIGにある説明に従ってやりとりを行う。平成22年4月-12月までの9か月間に受けた電話相談は4635件で、うち本人からの相談で希死念慮が認められたものは221件(4.8%)であった。SSISGを用いて自殺の切迫度を評価したところ、9件に自殺企図が切迫していると判断され、警察等に本人の安全確保を要請した。SSISGの活用によって、比較的短時間のうちに事例の自殺切迫度を判断し、他機関に介入を要請するなどの対応策を実行しやすくなった。
335	小山明日香, 長沼洋一, 沢村香苗, 立森久照, 大島巖, 竹島正	精神障害を有する人に対する一般地域住民のイメージ	日本社会精神医学会雑誌 20(2):116-127, 2011	精神障害に対するイメージを明らかにした。その結果、精神障害に対するイメージとして「認知的反応」「社会的距離感」「治療可能性」の3つの因子が抽出された。統合失調症やうつ病に比べて、アルコール依存に対するネガティブなイメージがもっとも強かった。また3つの疾患に共通して「怖い」などの社会的距離感をもっとも強かった。
336	野田寿恵, 安齋達彦, 杉山直也, 平田豊明, 伊藤弘人	精神保健福祉資料(630調査)を用いた隔離・身体拘束施行者数の分析.	精神医学 54:317-323, 2012.	隔離・身体拘束施行の現状、および身体拘束の施行と関連する要因を明らかにするために、精神保健福祉資料の都道府県別5年間のデータを用いて分析を行った。その結果、隔離多用と身体拘束多用の地域があることがわかった。また人口当たりの身体拘束施行者数は、老人性認知症疾患治療病棟の整備率との関連を認めた。そして身体拘束施行者数の増加は都道府県によって一様ではなかった。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
337	竹島 正, 小山明日香, 立森久照, 金田一正史, 小泉典章, 松本俊彦, 瀬戸秀文, 吉住 昭	精神保健福祉法による通報実態から見た触法精神障害者の地域処遇上の課題—全国の都道府県・政令指定都市へのアンケート調査をもとに—	日本社会精神医学会雑誌 21(1): 22-31, 2012	都道府県・政令指定都市における、医療観察法導入後の精神保健福祉法に基づく触法精神障害者に対する対応を分析し、触法精神障害者処遇の改善の方策を検討することを目的として、全自治体65か所を対象にアンケート調査を行った。通報となった触法精神障害者は、医療観察法による治療、または精神保健福祉法による措置入院に非該当であっても、日常生活の自立が困難、かつ社会からの支援が届きにくい、孤立しがちな者が含まれている可能性があり、精神保健医療の観点からの実態把握と支援の検討が必要と考えられた。
338	浅野敬子, 小西聖子, 中島 聡美	痴漢被害の援助要請志向に影響を与える要因の検討。	武蔵野大学心理臨床センター紀要(11), 1-11, 2011.	大学生127名を対象に痴漢被害の実態とレイプに対する偏見、自損感情および被害経験時の相対的満足度が援助要請志向に与える影響についてアンケート調査を行なった。全体の37%に被害経験があり、75.4%が被害の相談をしていた。援助要請志向とレイプに対する偏見の強さには負の相関があり、相談後の満足度とは正の相関が見られたことから、レイプに対する偏見を軽減し、適切に相談が行われることが被害者の援助要請を高めることが考えられた。
339	池淵恵美, 後藤雅博, 伊藤 順一郎, 鈴木友里子	中・長期の被災地支援—地域生活支援とリハビリテーションの観点から—。	精神神経学雑誌, 114(3): 233-240, 2012.3	中・長期の被災地支援について地域生活支援とリハビリテーションの観点から以下の項目を解説した。1)災害の精神障害への影響(診療の中で観察されたこと、災害の渦中で病状悪化を防ぐために、2)生活支援とリハビリテーションの視点からの中・長期支援、4)地域生活支援とリハビリテーションの視点からの2つの中・長期支援モデル(精神科仮設診療所における多職種アクトリナーチサービスマodel, 包括型地域生活支援センターmodel) 4)支援者の支援。
340	宇佐美しおり, 中山洋子, 野末聖香, 矢野千里, 樺島啓吉, 中川優子, 和田冬樹, 斎藤ひろみ, 井形るり子, 大島高昭, 大関宏治, 青木聖久, 中西真理子, 伊藤弘人	長期入院となりやすい精神障害者への修正版集中包括型ケア・マネージメント(M-CBCM)の評価に関する研究。	看護研究44(3): 318-332, 2011.	長期入院となりやすい精神障害者への修正版集中包括型ケア・マネージメント(M-CBCM)の効果を検討した。
341	高橋秀俊, 長尾圭造, 神尾陽子	東日本大震災における児童・思春期精神医学的支援活動について。	精神保健研究, 58, 43-48, 2012.	2011年3月11日に三陸沖で発生した東北地方太平洋沖地震は、地震の規模の大きさだけでなく、我が国の太平洋沿岸の広域にわたる津波被害、さらには福島第一原子力発電所問題も併発し、多方面にわたる複雑で甚大な被害をもたらした。未曾有の大震災の中、どのような精神医学的支援を行うのが最も適切であるのか、特に子どもは、いわゆる災害時要援護者(災害弱者)として災害時に特別な配慮が必要であり、その支援には今後も高度な専門的判断が求められると考えられる。今回、国立精神・神経医療研究センターは、地震発生後、医療関係者等の支援者向けに、東北地方太平洋沖地震センターヘルス情報サイトを開設し、また、福島県立医科大学のこのケアチームの一員として福島県いわき市で精神医学的支援も行った。著者らの所属する精神保健研究所 児童・思春期精神保健研究部は、国立精神・神経医療研究センターの一員として、これらの活動に加わり、主に児童・思春期精神医学的支援を行ってきた。支援は今後も継続的に行う必要があると考えられるが、今回、震災発生から半年が経過し、特集論文として掲載の機会を得ることができたため、これまでの活動を報告した。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
342	石郷岡純, 宇都宮一典, 小山司, 田中逸, 中込和幸	糖代謝異常のみられない統合失調症患者を対象とした aripiprazole の糖代謝能に及ぼす影響	臨床精神薬理, 14(8): 1371-1386, 2011.	本試験では、アリピプラゾールの糖代謝に及ぼす影響を、糖尿病およびその既往がない統合失調症患者を対象に検討した。101例の被験者にアリピプラゾールを6-24mg/dayの用量で52週間投与された。投与開始後、空腹時血糖値が110mg/dL以上または随時血糖値が140mg/dL以上を示す被験者は6例認められたが、いずれも一時的な変化であり、試験薬との関連性はないと考えられた。空腹時血糖、HbA1cおよびグリコアルブミンの平均値は、52週間の投与期間を通して変化しなかった。本試験の結果から、52週間の長期投与においてもaripiprazoleは統合失調症患者の糖代謝に影響を及ぼさないと考えられる。
343	中野和歌子, 藤井千太, 新福尚隆, 館農勝, 正宗弥生, 秋山剛, 佐藤創一郎, 中込和幸, 黒木俊秀, Yang Shuyu, Tan Chay-Hoon, 吉村玲児, 中村純	統合失調症入院患者に対する抗精神病薬処方方の最近10年間の変化。-東アジアにおける国際共同処方調査(REAP)の結果から-	臨床精神薬理, 14: 1397-1411, 2011.	2001年、2004年、2008年と3階にわたりの施行された、東アジアの6つの国・地域における処方調査の結果から抗精神病薬の処方について比較検討を行った。全体としては、抗精神病薬の投与量が2001年に比べて2004年、2008年には有意に減少し、多剤併用率は2001年から2004年にかけて有意に減少し、その後2008年には有意に増加していた。その内訳としては、第二世代抗精神病薬同士の併用が増加していた。わが国の平均投与量、多剤併用率はともに減少していた。
344	安藤久美子, 岡田幸之	同意によらない治療的介入に関する「緊急性評価基準」の開発。	司法精神医学6(1):10-20, 2011.	医療観察法対象者に適正かつ円滑な治療を継続して提供するための指針として「緊急性評価基準」を開発した。本クリニックカルパスは、あらかじめ患者の同意能力について確認した後、非同意での治療を開始するにあたって、現在の症状の程度と切迫性について評価する病態軸と、その病態に基づいて治療的介入を行うまでの緊急性を評価する時間軸から構成されている。本クリニックカルパスを利用することにより、対象者の基本的自由と権利が守られるだけでなく、全国の指定医療機関で行われる医療行為の均てん化にも寄与するものと期待される
345	後藤隆章, 熊沢綾, 赤塚めぐみ, 稲垣真澄, 小池敏英	特異的読字障害を示すLD児の視覚性語彙の形成に基づく読み指導に関する研究 - 未指導文の読みの改善を含めた検討 -	特殊教育学研究, 49(1), 41-50, 2011.	本研究では、視覚性語彙の形成を目的とした読み指導を行い、その指導効果と有意味単語の読みの音読反応時間の変化との関係について検討を行った。対象は通級指導教室に通うLD児10名とした。ひらがなの音読に特異的な読字障害を伴うLD児に対する指導の結果、未指導の課題文でモーラ数が多い文節において、流暢に読むことができた文節の数は増加し、読み指導の効果が大きいことを指摘できた。本研究の課題文は、動物に関する説明文を用いており、単語と単語の関係性が明確であるため、視覚性語彙による指導効果が未指導の課題文に波及した可能性があった。
346	最上多美子, 池澤聰, 長田泉美, 木村一朗, 岡純子, 速水淑子, 廣江ゆう, 安井いづみ, 片山征爾, 河野倫子, 加藤明孝, 足立典子, 兼子幸一, 中込和幸	内発的動機づけの役割に焦点化した認知機能リハビリテーションNEAR	精神医学, 53(1): 49-55, 2011.	内発的動機づけの役割に焦点化した認知機能リハビリテーションNEARについてフイービリティスタディを実施した。対象者は計5つの医療機関で受診または入院している統合失調症または統合失調症型感情障害の患者であり、介入群は40名、統制群は22名であった。介入群は統制群に比較して、認知機能やQOLの一部の指標に改善がみられた。また、精神症状には変化は認めなかった。
347	中林哲夫, 玉浦明美, 近野健一	日本における医薬品開発の現状と展望 精神神経疾患領域の臨床開発を中心に	ファルマシア, 9, 793-798, 2011	国内外の医薬品の臨床開発の動向について精神神経疾患領域を中心に調査し、医薬品開発の現状について検討した。今回は臨床試験登録データベースを主体に調査したが、すべての臨床試験が登録されていない可能性と最新の情報に更新されていない可能性が残る事には留意されたい。

	著者	論文名	掲載誌	成果又は特記事項
348	金吉晴	認知行動療法における治療者の技量の重要性。	精神科治療学26(3), 289-294, 2011.	認知行動療法は定式化された技法を繰り返すだけの治療と思われがちであるが、実際には、治療者と患者との精神的な関係の深まりの上に、初めて成立する療法である。実施にあたっては従来の精神療法と同様の患者の心理の洞察や治療関係の構築が必要である。米国では2000時間以上のスーパーバイズを経た上で初めて認知行動療法を学ぶのであり、認知行動療法の技術が基本的な精神療法の代わりになることはない。
349	森田展彰, 数井みゆき, 金丸隆太, 中島聡美	不適切な養育が幼児の自律神経機能に与える影響の心拍変動による評価 — 乳児院児童を対象とした試み —	子どもの虐待とネグレクト13(3), 409-419, 2011.	不適切な養育が幼児の自律神経機能に与えるダメージを評価するため、乳児院入所幼児5名を対象としてストレス負荷を行なった際の自律神経機能を一一般家庭幼児15名と比較した。乳児院の児童は対照群に比べ、ストレス負荷前、中、後の3条件すべてでHRが有意に高く、一方RSA、HF、IBIの値が有意に低かった。この研究の結果から不適切な養育が副交感神経系による制御機能の発達を妨げている可能性が示唆された。
350	鈴木直輝, 堅山真頼, 割田仁, 出泉瑠美子, 西野一三, 青木正志	封入体筋炎の病態と頻度(シンボジウム12-3)筋炎研究最近の進歩。	臨床神経学. 51(11): 964-966, Nov, 2011	近年、本邦において封入体筋炎が増加傾向にあることを明らかにした。
351	費川信幸, 大島 巖, 園 環樹, 小川雅代, 深澤舞子, 伊藤順一郎	包括型地域支援生活プログラム(ACT)のプログラム要素に対する利用者認知尺度の信頼性と妥当性の検討。	精神医学, 53(6):523-533, 2011.6	本研究では、重い精神障害を持つ人々に対する包括型地域生活支援プログラム(ACT)のプロセスを利用者が評価する、ACTのプログラム要素に対する利用者認知尺度の信頼性と妥当性を検討した。千葉県国府台地区で実践されているACT-Jの利用者102名のうち65名から回答を得た(回収率63.7%)。本尺度はほぼ十分な内的整合性と再検査信頼性が確認された($\alpha: 0.67 \sim 0.85$, $r: 0.74 \sim 0.91$)。また、サーベイス満足度の有意な相関が示され、併存的妥当性が確認された($r: 0.35 \sim 0.60$)。本尺度は、ACTの重要要素に対する利用者の認識をとらえられ、ACTの質向上に有用な情報を提供し得ると考えられた。
352	松本俊彦, 嶋根卓也, 尾崎茂, 小林聡児, 和田 清	乱用・依存の危険性の高いベンゾジアゼピン系薬剤同定の試み: 文献的対照群を用いた乱用者・選択率と医療機関処方率に関する予備的研究	精神医学 54 (2): 201-209, 2012	本研究は、乱用・依存の危険性の高いベンゾジアゼピン(以下、BZ)系薬剤を同定するための参考情報を得るために、乱用者における各種BZ系薬剤の選択率と、医療機関における各種BZ系薬剤の処方率を比較し、処方率に比べて選択率が高い薬剤の同定を試みた。対象は、全国の医療機関から収集したBZ乱用患者139例であり、文献的対照群として、中島らによる1大学病院におけるBZ処方患者6,777名に関するデータを用い、8種類の短時間作用型BZについて、各種BZ系薬剤の選択率と処方率を比較した。その結果、triazolam, zolpidem, lormetazepamについては、選択率が処方率よりも有意に高く、brotizolamとniltamazafonについては、選択率が処方率よりも有意に低かった。また、etizolamについては乱用者の選択率と医療機関における処方率との関係が、精神科と一般診療科で異なっていた。

平成23年度 総説一覧表

	著者	総説名	掲載誌
1	Aoki Y, Nagata T, Shimizu-Motohashi Y, Takeda S	Antisense oligonucleotide-mediated exon 51-skipping therapy for Duchenne muscular dystrophy.	International Journal of Advanced Computer Science, Vol. 1, No. 5, pp.209-214, 2011
2	Malicdan MC, Nishino I	Autophagy in lysosomal myopathies.	Brain Pathol. 22(1): 82-88, Jan, 2012
3	Aoki Y, Shimizu Y, Nagata T, Takeda S	Challenges to oligonucleotides-based therapeutics, especially with regards to exon 51 skipping for Duchenne muscular dystrophy.	Modeling, Simulation and Applied Optimization (ICMSAO).2011.5775520.
4	Mitsuhiro Sado, Keita Yamauchi, Norito Kawakami, Yutaka Ono, Toshiaki A. Hurokawa, Masao Tsuchiya, Miyuki Tajima, and Haruo Kashima, On behalf of the WMH- J2002-2006 Survey Group	Cost of depression among adults in Japan in 2005,	Psychiatry and Clinical Neurosciences 2011; 65: 442 ±450
5	Sasayama D, Hori H, Teraishi T, Hattori K, Ota M, Matsuo J, Kawamoto Y, Kinoshita Y, Hashikura M, Koga N, Okamoto N, Sakamoto K, Higuchi T, Amano N, Kunugi H.	Difference in Temperament and Character Inventory scores between depressed patients with bipolar II and unipolar major depressive disorders.	J Affect Disord. 132(3):319-24, 2011
6	Ohsawa K, Kohsaka S	Dynamic motility of microglia: Purinergic modulation of microglial movement in the normal and pathological brain.	Glia 59, 1793- 1799, 2011
7	Takeda A, Sudo A, Yamada M, Yamazawa H, Izumi G, Nishino I, Ariga T	Eponym: Barth syndrome.	Eur J Pediatr 170(11): 1365- 1367, Nov, 2011
8	Nakamura A, Takeda S	Exon-skipping therapy for Duchenne muscular dystrophy.	Lancet. 378:546-547, 2011
9	Kimura H.	Hydrogen sulfide: its production and functions	Exp Physiol 96: 833-835, 2011
10	Kimura H.	Hydrogen sulfide: its production, release and functions	Amino Acids 41: 113-121, 2011
11	Numakawa T, Richards M, Adachi N, Kishi S, Kunugi H, Hashido K.	MicroRNA function and neurotrophin BDNF.	Neurochem Int. 2011 Oct;59(5):551-8. Epub 2011 Jun 24.
12	Miyake S	Minds over cytokine	Clin Exp Neuroimmunol 3:1- 15, 2012
13	Sasayama D, Hori H, Iijima Y, Teraishi T, Hattori K, Ota M, Fujii T, Higuchi T, Amano N, Kunugi H	Modulation of cortisol responses to the DEX/ CRH test by polymorphisms of the interleukin-1beta gene in healthy adults.	Behav Brain Funct. Jul 5;7:23, 2011
14	Higuchi T, Hong JP, Jung HY, Watanabe Y, Kunitomi T, Kamijima K.	Paroxetine controlled-release formulation in the treatment of major depressive disorder: A randomized, double-blind, placebo-controlled study in Japan and Korea.	Psychiatry Clin Neurosci. 65(7):655-63, 2011
15	Hida A, Kitamura S, Mishima K	Pathophysiology and pathogenesis of circadian rhythm sleep disorders	Journal of Physiological Anthropology 2012, 31:7

	著者	総説名	掲載誌
16	Mitsuhashi S, Nishino I	Phospholipid synthetic defect and mitophagy in muscle disease.	Autophagy. 7(24): 1559- 1561, Dec, 2011
17	Takahashi H, Hashimoto R, Iwase M, Ishii R, Kamio Y, Takeda M.	Prepulse Inhibition of Startle Response: Recent Advances in Human Studies of Psychiatric Disease.	Clinical Psychopharmacology and Neuroscience 2011 Dec; 9(3): 102-110.
18	Matsumoto T, Numakawa Y, Richards M, Yamawaki S, and Kunugi H.	Protective action of neurotrophic factors and estrogen against oxidative stress- mediated neurodegeneration.	J. Toxicol. 2011: 405194. 2011 (査読有)
19	Akiko Kaku, Nao Nishinoue, Tomoki Takano, Risa Eto, Noritada Kato, Yuyaka Ono, Katsutoshi Tanaka	Randomized Controlled Trial on the Effects of a Combined Sleep Hygiene Education and Behavioral Approach Program on Sleep Quality in Workers with Insomnia	Industrial Health, 50, 52-59, 2012.3,
20	Hanakawa T	Rostral premotor cortex as a gateway between the cognitive and motor networks	Neurosci Res 70: 144-54, 2011
21	Ichinohe N	Small scale module of the rat granular retrosplenial cortex: an example of minicolumn- like structure of the cerebral cortex	Front. Neuroanat. 5:69, 2012
22	Yamaguchi S, Mino Y, Uddin S	Strategies and future attempts to reduce stigmatization and increase awareness of mental health problems among young people: a narrative review of educational interventions.	Psychiatry Clin Neurosci 65: 405- 415, 2011.
23	Alonso- Vanegas MA, Cisneros- Franco JM, Otsuki T	Surgical management of cavernous malformations presenting with drug- resistant epilepsy	Front Neurol. 2011;2:86. Epub 2012 Jan 3.
24	Popiel, H.A., Burke, J.R., Strittmatter, W.J., Oishi, S., Fujii, N., Takeuchi, T., Toda, T., Wada, K., Nagai, Y.	The Aggregation Inhibitor Peptide QBP1 as a Therapeutic Molecule for the Polyglutamine Neurodegenerative Diseases.	J. Amino Acids, 2011. doi:10.4061/ 2011/ 265084.
25	Rong W, Kimura H, Grundy D.	The neurophysiology of hydrogen sulfide	Inflamm Allergy Drug Targets 10: 109-117, 2011
26	太田敏男、吉田寿美子、鍋島宗助、戸塚貴雄、渡辺貴文、豊嶋良一	「診療選択肢評価図」を用いた精神科臨床意思決定の可視化の試み	精神神経学雑誌 113(7) ,662- 670 , 2011
27	樋口輝彦	【今後の精神医療保健福祉はどうあるべきか】精神保健医療福祉のさらなる改革に向けて.	精神神経学雑誌. 113(5):490- 495, 2011
28	松本俊彦	2.うつ病治療～ベンゾジアゼピンの功罪.	医薬ジャーナル48(4) :1139- 1142 , 2012
29	中込和幸	2.病相期に応じた統合失調症の薬物療法～薬物療法アルゴリズムを日常臨床に用いる～.特集 統合失調症治療における薬物療法の位置づけ	医薬ジャーナル ,47(1) ,73- 80 ,2011
30	神尾 陽子	20年後を見据えた精神医学・心身医学研究の展望特集. 児童精神医学研究の将来展望	学術の動向, 7, pp.15- 19
31	林由起子	A型ラミン.	生体の科学 増大号 細胞核 - 構造と機能 62(5): 404- 405, Oct, 2011
32	玉浦明美	CRCを知ってもらうために！ - 関連部署との連携のために心がけていること-	薬理と治療,1007- 1008,vol .39 .no12 . 2011
33	佐藤孝俊, 西野一三	Dystrophin 解説編.	病理と臨床 臨時創刊号 病理診断に役立つ分子生物学 29: 210- 212, Apr. 2011
34	佐藤孝俊, 西野一三	Dystrophin 診断編.	病理と臨床 臨時創刊号 病理診断に役立つ分子生物学 29: 213- 216, Apr. 2011

	著者	総説名	掲載誌
35	西山尚志 ,武田伸一	iPS細胞と筋ジストロフィー 筋ジストロフィーの細胞移植治療の実現化を目指して .	BRAIN and NERVE, 64:39- 46, 2012
36	千葉麻子	Mucosal- associated invariant T(MAIT) cellと関節炎	臨床免疫・アレルギー科56: 189- 193, 2011
37	林由起子	Myofibrillar myopathyと類縁疾患 .	神経内科 75(1): 52- 59, Jul. 2011
38	太田英伸	NICUにおける光環境を科学する	日本周産期・新生児医学会雑誌47(4) : 758- 762 ,2011.
39	三宅幸子	NKT細胞と自己免疫	炎症と免疫20(2):18- 22, 2012
40	林由起子	Nucleophagy.	生体の科学 増大号 細胞核 - 構造と機能 62(5): 374- 375, Oct, 2011
41	栗山健一, 金吉晴	PTSD:記憶と意識の病理. 第11回八ヶ岳シンポジウム「Fear Circuit Disorderの基礎と臨床」.	分子精神医学 11(2): 46 r48, 先端医学社 2011.
42	金吉晴	PTSDの病態と治療 .	神奈川県精神医学会誌60: 7- 10, 2011.
43	永井義隆, 貫名信行	QBP1を応用した異常伸長ポリグルタミン蛋白質の特異的分解	臨床神経学 51 (11): 1108- 1110 (2011)
44	佐々木征行	SMIDデータベース・システムからみた国立病院機構の重症心身障害病棟の現状 .	日本重症心身障害学会雑誌 2011;36:19- 25.
45	松本俊彦	アディクション概念 ~ その理解と今日的な意義 ~ .	日本アルコール・薬物医学会雑誌 47(1) :13- 23 ,2012
46	松本俊彦	アルコール・薬物問題と自殺予防 .	治療94(4) :515- 520 ,2012
47	松本俊彦	アルコールとうつ病、自殺.	日本アルコール関連連問題学会雑誌 特別号: S12- S13, 2011.
48	松本俊彦	アルコール依存症と嗜癖概念 :DSM- 5ドラフトを受けて	日本精神科病院協会雑誌 30 (4): 298- 305, 2011
49	村山繁雄、齊藤祐子	アルツハイマー病と脳老化の病理学	月刊カレントセラピー 2012 vol.30 No.4 4月号 36- 41
50	高岸治人 ,福井裕輝	うつつきとサイコパス .	こころの科学156 33- 36 ,2011
51	大野 裕	うつの再発予防	Medecine Vol.48,578- 586
52	松岡 豊, 浜崎景	うつ病と 3系多価不飽和脂肪酸.	Depression Frontier 9(1):35- 43, 2011.
53	奥村泰之, 横山和仁 ,伊藤弘人	うつ病における病欠出勤による労働生産性の損失 .	産業医学ジャーナル34(3) :116- 118 , 2011.
54	功刀浩	うつ病にパーキンソン病薬？	日経ドラッグインフォメーション 2012年2月号, p.58

	著者	総説名	掲載誌
55	三島和夫	うつ病の非薬物療法の科学 - 時間療法と選択肢の根拠を探る -	こころのりんしょう 368-72, 2011
56	圓谷理恵	オートファジー関連筋疾患 .	神経内科 75(2): 176-184, Aug, 2011
57	坂本崇 .	眼瞼痙攣・片側顔面痙攣	神経内科 2011;75(5):484-488
58	稲垣正俊	がん患者における自殺と希死念慮	精神科治療学26(8): 959-964, 2011
59	安西信雄	希望とカバリー - 精神科医療におけるその役割	精神医学 54(1):4-5, 2012
60	林由起子	筋原繊維性ミオパチー .	臨床神経学 増大特集 筋疾患 update 63(11): 1179-1188, Nov, 2011
61	佐々木征行	けいれん けいれん重積 .	こどもケア 2012;6:9-13.
62	千原 典夫、山村 隆	ここまでわかった自己免疫疾患- 多発性硬化症・視神経脊髄炎	臨床検査 55: 1241-1248, 2011
63	隅蔵大幸、齊藤祐子	孤発性パーキンソン病の病因仮説	Moderun Physician 2 vol.32 No.2 2012-2 150 パーキンソン病診療の最前線
64	守口善也	コミュニケーション障害 アレキシサイミアと感情認知の脳機能画像解析 社会性の観点から	認知神経科学 13 34-42 ,2011.
65	的場由木 ,川野健治	困窮者支援と被災者	社会精神医学21 ,61-64 ,2012
66	大和 滋	最新文献紹介 「慢性便秘に対するlinaclotideの効果」	日本消化器内視鏡学会誌 vol. 53 (10), 3354, 2011
67	野口 悟	シアル酸の低下により引き起こされる骨格筋疾患 .	生化学 83: 316-320, Apr. 2011
68	大野 裕	自殺対策としての地域精神保健	保健の科学 杏林出版 2011vol.53 (9) 569-600
69	竹島正,松本俊彦,川野健治,稲垣正俊,勝又陽太郎	自殺予防総合対策センターの活動	産業精神保健 19(3), 218-223. 2011
70	須貝研司	重症心身障害児 (者) のてんかんの薬物療法 - 抗てんかん薬の使い方 の実際 -	日本重症心身障害学会雑誌 2011;36: 91-99 .
71	加我牧子	症状からアプローチするプライマリケア .	日本医師会雑誌第 140巻特別号 (2) , 325-329 ,2011.
72	藤掛伸宏, 長野清一, 永井義隆	ショウジョバエなど小動物を用いた筋萎縮性側索硬化症モデル	神経内科 76 (3): 266-274 (2012)
73	永井義隆, 藤掛伸宏	ショウジョバエモデルから解明されたTDP-43プロテインパチーの分子病態	Dementia Japan 25 (2): 129-136 (2011)
74	岡本 智子、糸山 泰人	ステロイド療法の実際	神経 筋疾患 B臨床と研究 88:33-36, 2011

	著者	総説名	掲載誌
75	菊池安希子	ストレス関連障害,解離性障害,身体表現性障害の認知行動療法 - 身体表現性障害 - .	精神科治療学26 (302) :180-184,2011
76	野田隆政	精神疾患の診断ツールとしてのNIRS測定	精神科 18: 528-534, 2011 5月
77	坂本崇 .	世界のボツリヌス毒素製剤	Modern Physician 2011;31(7):800-802
78	中島聡美	大規模災害における行政の地域精神保健活動への支援	精神保健研究58 27-34 ,2012.
79	荒木学,山村隆,	多発性硬化症 新規開発薬を中心に	神経内科 74 539 - 544
80	武田伸一	デュシェンヌ型に対するエクソン・スキップ治療 .	臨床神経 ,51:914-916, 2012
81	青木吉嗣, 武田伸一	デュシェンヌ型筋ジストロフィーに対するエクソンスキップ療法.	生体の科学, 62: 128-33, 2011
82	高橋章夫、大槻泰介	てんかんの脳神経外科での治療	はげみ 855:31-36, 2012-2013
83	三島和夫	冬季のうつ病と睡眠障害	実験 治療 704 39-44, 2011.
84	野田隆政、樋口輝彦	特集気分障害 - 季節の変わり目に出現しやすいうつ病の診断と治療 気分障害研究の最前線 光トポグラフィー検査の有用性	カレントセラピー 29: 43-47, 2011
85	功刀 浩	Dパミン受容体作動薬とうつ病	内分泌 糖尿病 代謝内科 34 (2): 169-175, 2012.
86	峯山智佳, 野田光彦	Hピックス 糖尿病とうつ病 .	Depression Frontier10(1) 69-75, 2012.
87	高橋理貴、北條浩彦	Hプレット・リピー H病原因遺伝子に対するテーラーメイド RNAi ノックダウン	実験医学 ,29: 931-934, 2011.
88	岡崎哲也、登坂雅彦、佐藤典子	Hレコ鞍、傍鞍部	臨床放射線 56:581-590, 2011
89	稲垣正俊	にせの薬が効く? - プラセボとはなにか	こころの科学 156 89-93, 2011.
90	堀越勝	認知行動療法をはじめの前に	こころの科学 160 November 2011 日本評論社 PP37- 42
91	堀越勝	認知処理療法 (CPT) 心的外傷後ストレス障害の治療法	Current Therapy 2012 vol.30 No.2 p76、ライフメディコム
92	大野 裕	認知療法	NPO法人地域精神保健福祉機構 コンボ 2011.7,34-35
93	村山繁雄、齊藤祐子	パーキンソン病と多系統萎縮症における自律神経の病理 (皮膚を用いたレピー小体病の末梢自律神経系病理を含めて)	Annual Review2012 神経 301-8 中外医学社
94	山本敏之.	パーキンソン病の嚥下障害とその治療	Medical Rehabilitation 2011;135:37-44

	著者	総説名	掲載誌
95	古澤嘉彦,村田美穂	パーキンソン病の薬物療法 :その他の薬の使い方、特徴	Modern Physician 2012;32(2):193- 196
96	山本敏之.	パーキンソン病における嚥下障害の造影検査所見 .	Fronti Parkinson Dis. 2012;5(1):34- 38
97	開道貴信、大槻泰介	パーキンソン病の外科治療	Rad Fan 9:38- 40,2011
98	村田美穂.	パーキンソン病の分子病態と治療	Rad Fan 2011;9(5):35- 37
99	村田美穂.	パーキンソン病治療薬の課題と創薬への期待	ヒューマンサイエンス 2011;22(4):22- 25
100	鈴木友理子	東日本大震災後の地域精神保健医療 .	精神保健研究58 21- 26 ,2012.
101	金 吉晴 ,秋山 剛 ,大沼麻実	東日本大震災後の精神医療初期対応について .	精神保健研究58 :15- 20 ,2012.
102	福田正人、吉田寿美子、杉村有司、小川勝、大塚俊幸、樋口智恵、内山智恵、安井多美子	光トポグラフィー検査 (NIRS)による脳機能測定	検査と技術,40,182- 188,2012,3月
103	野田隆政	光トポグラフィーによるうつ病診断補助の現状	Depression Frontier 9:94- 101, 2011
104	坂本崇 .	痙縮のボツリヌス治療	神経治療学 2011;28(5):528
105	中根秀之・大野裕・丸田敏雅	プライマリケア・バージョンICDシステム開発のために	日本精神科診断学会 2011 36- 45
106	菊池達也、加藤孝一	分子プローブで読み解くPETイメージング	化学と教育 6月号
107	菊池達也、加藤孝一	放射線を利用した分子イメージング	化学と教育 6月号
108	和田恵津子、和田圭司	ボンベシン様ペプチド	Clinical Neuroscience、30、218- 219, 2012
109	後藤雄一	ミトコンドリア異常と自閉症の関係解明はまだ先	MMJ 7、163、2011
110	若月修二、荒木敏之	ユビキチンリガーゼNRF1はAKTをプロテアソーム依存的に分解しGSK3BによるCRMP2のリン酸化を誘導することにより神経軸索の変性を促進する	ライフサイエンス 新着論文レビュー , http:// first.lifesciencedb.jp/archives/ 3957
111	坂元千佳子, 岩田泰幸	リールパーマ療法 (LSVT BIG)によるパーキンソン病患者のリハビリテーション	リハビリテーション135(8):61- 65 , 2011.
112	松本俊彦	リストカットする思春期の理解と支援 かわるすべての支援者のために	広島県小児科医会会報 52: 12- 20, 2011
113	三島和夫	リズム障害	Mebio 29(3): 70- 9, 2012.

	著者	総説名	掲載誌
114	立石 貴之	リハスタッフの嗜痰等の吸引	難病と在宅ケア 2012 Vol17, No12
115	岩瀬真生、石井良平、栗本龍、高橋秀俊、中鉢貴行、武田雅俊	レジリエンスに対応する生理的指標	臨床精神医学 41 (2): 135- 141, 2012.
116	松本俊彦	わが国における性被害の実態 少年施設男子入所者の調査から	被害者学研究 21: 89- 100, 2011
117	和田 清, 嶋根卓也, 舩田正彦	わが国における薬物乱用・依存の最近の特徴	日本社会精神医学会雑誌 20(4): 407-414, 2011.
118	竹島 正	わが国の自殺対策・自殺学の方向 - 大原先生の業績を振り返って	日本社会精神医学会雑誌20(2): 138-143, 2011
119	佐久間啓	栗屋福山症候群	小児科診療 .2011 .74 ; 986- 90
120	松本俊彦	依存・嗜癖における強迫性・衝動性と薬物療法	精神神経学雑誌 1133 (10): 999- 1007, 2011.
121	三宅幸子	胃ホルモン グレリンの実験的自己免疫性脳脊髄炎に対する抑制作用	炎症と免疫 19(4):62- 7, 2011
122	岡田幸之	医師の立場からみた「治療反応性」の概念.	司法精神医学7(1) ,73- 79 ,2012.3.
123	菊池安希子, 長沼洋一, 安藤久美子, 岡田幸之	医療観察法の運用状況.	Schizophrenia Frontier12(3) :17-22,2011
124	尾崎 茂, 小林桜児, 松本俊彦, 和田 清	医療施設からみた最近の特徴	日本社会精神医学会雑誌 20(4): 399-406, 2011.
125	小松容子	英国の大学におけるリサーチチューエント育成のためのサポートシステム - マンチェスター大学を例に - .	看護研究45 (01) 32- 38 ,2012
126	圓谷理恵, 西野一三	炎症性筋疾患の病理 .	炎症と免疫 .20(1): 34- 38, Jan, 2012.
127	西野一三, 野口 悟	縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチーのシアル酸補充療法 .	BRAIN and NERVE 特集 :アカデミアから新規治療の実現へ トランスレーショナルリサーチの現状 .64(3): 255- 261, Mar, 2012.
128	西野一三, Malicdan MC, 野口 悟	縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチーの病態と治療戦略 .	神経内科 特集 神経 筋疾患の新規治療 74: 347- 351, Apr. 2011
129	野口 悟, 西野一三	遠位型ミオパチーの治療法開発 .	生体の科学 特集 筋ジストロフィーの分子病態から治療へ 62: 142- 145, Apr. 2011
130	米本直裕	過去の研究報告からみた震災による自殺への影響 ~ 震災後に自殺は増えるのか?	日本社会精神医学会雑誌 21(1) :78-81 ,2012.
131	功刀浩	過敏性腸症候群のおなかの中でなにが起きているのか! ?	栄養と料理 78 (3): 180- 181, 2012.
132	天野 智文	過敏性腸症候群の診かた- 専門領域を越えた、さまざまなアプローチ法とは? 病型分類「混合型」	治療 Vol.94, p852 - 356, 2012
133	勝又陽太郎	海外におけるBPDの地域支援 豪州の場合. 境界性パーソナリティ障害(BPD)の新しい理解と援助のあり方.	精神科治療学, 26, 1111- 1117, 2011

	著者	総説名	掲載誌
134	伊藤弘人	海外諸国の精神保健医療制度 総論 .	日本精神科病院協会雑誌31 (3) :7- 13, 2012.
135	金 吉晴	外傷後ストレス障害 .TODAY `S THERAPY 2012 今日の治療指針 私はこう治療している .	医学書院 .東京 .851- 852. 2012.
136	亀井雄一 ,榎本みのり	概日リズム睡眠障害の診断技法	睡眠医療 5 :29- 33 ,2011 .
137	肥田昌子	概日リズム睡眠障害の病態生理	睡眠医療5 :11- 5 ,2011.
138	肥田昌子 ,三島和夫	概日リズム睡眠障害の病態生理研究の動向	日本生物学的精神医学会誌 22(3) : 165- 70 ,2011
139	三島和夫	概日リズム睡眠障害を鑑別診断するための基本的診察法	診断と治療 99 :1341- 7 ,2011.
140	三島和夫	概日リズム睡眠障害研究における課題	睡眠医療 5 :9- 10 ,2011 .
141	三宅幸子	獲得免疫とは	臨床検査 55(11):1064- 73, 2011
142	小林桜児 ,松本俊彦	覚せい剤・大麻 多薬物依存	精神科 18(6): 607- 610, 2011
143	松本俊彦	覚せい剤依存症の精神療法 患者と家族に対する初回面接の工夫 .	財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター NEWS LETTER 2011.2 第84号: 2-5, 2011
144	松本俊彦	覚せい剤検出時の法的対応 精神科医の立場から	中毒研究 24: 193- 197, 2011
145	竹島 正	革新的な啓発活動を進めるダックスセンター 第1回】革新的な啓発活動を進めるダックスセンター	心と社会 42(4) :94- 99.2011
146	竹島 正	革命的な啓発活動を進めるダックスセンター 第2回】カニンガムダックスコレクションの誕生前 .	心と社会 43(1) :94- 98, 2012.
147	勝又陽太郎	学校でのカウンセリング以前.	こころの科学, 160, 78- 83, 2011.
148	小野さやか,竹島 正	活動の始まりの頃 芸術活動による共生社会の実現を目指す取り組み ~ 芸術活動を続けている精神障害者の活動から ~ .	こころの健康第26(2) :69 - 73,2012.
149	眞崎直子 ,的場由木 ,竹島 正	活動の始まりの頃 高知県駐在保健婦の活動からみる精神保健活動	こころの健康26(1): 47- 50, 2011
150	趙香花 ,野中猛	韓国における精神保健医療福祉の歴史と現状	日本社会精神医学会雑誌21(1): 32- 40, 2012
151	肥田昌子 ,三島和夫	気分障害と生物時計システム - リズム異常をもたらす生物時計機能障害評価法	医学のあゆみ 239(9) :907- 11 ,2011 .
152	臼杵正人 ,西大輔 ,松岡豊	急性ストレス反応 (ASD) , 心的外傷後ストレス障害 (PTSD) 患者への対応 .	救急・集中医療24(1- 2):139- 146, 2012
153	松岡豊	魚油によるPTSD予防への挑戦 .	分子精神医学11(2): 154- 156, 2011

	著者	総説名	掲載誌
154	松本俊彦	境界性パーソナリティ障害の自己破壊的行動への対応.	精神科治療学 26: 1135- 1142, 2011.
155	関口正幸	恐怖応答消去学習のニューロン回路 .	細胞工学30(5) 488- 492, 2011
156	神尾陽子	教育講演 児童期から成人期へ :レジリエンスという視点.	児童青年精神医学とその近接領域, 52(4),379
157	永田哲也 ,武田伸一	筋ジストロフィーの新しい治療戦略 .	神経内科 ,74: 339- 346 ,2011
158	青木吉嗣 ,鈴木友子	筋痛の診断と治療 .	Monthly Book Orthopaedics. 24:143- 152 ,2011
159	西野一三	筋病理の基本 .	臨床神経学 51: 669- 676, Sep, 2011
160	菊地裕絵 ,吉内一浩	緊張型頭痛への心身医学的アプローチ	Modern Physician 31:969- 973, 2011.
161	関口正幸	経験と時間に依存したFear Circuitの再構成	分子精神医学 11(2) 57- 59, 2011
162	神谷昂平 ,佐藤典子	検査からみる神経疾患 Hypertrophic olivary degeneration	Clin Neurosci. 29(11): 1312- 3, 2011
163	松本俊彦	見逃すな! 緊急報告と提言 一般精神科における「うつ×飲酒」「向精神薬」の問題.	季刊Be! 106号2012. 3: 36- 42, 2012.
164	三島和夫 ,北村真吾	現代社会が子どもの脳に及ぼす影響	小児内科 43 819- 23 ,2011.
165	立森久照	現代社会とうつ病(2) うつ病の頻度と社会負担	最新医学 66 (6) : 1196- 1199, 2011
166	福田正人、吉田寿美子、杉村有司、小川勝、大溪俊幸、樋口智江、内山智恵、安井多美子	光トポグラフィー検査 (NIRS)による脳機能測定	検査と技術 40(3), 182- 188, 2012
167	竹島 正	公衆衛生の精神保健、精神保健医療のこれから .	公衆衛生76(3) :237- 241,2012.
168	山田光彦 ,稲垣正俊 ,米本直裕	向精神薬と自殺予防 .	臨床精神薬14(12):1919- 1924,2011.
169	立花直子、有馬邦正、池田修一	抗NMDA受容体脳炎に合併した卵巣奇形腫と正常卵巣におけるNMDA受容体の分布	最新医学 66巻5号 Page967- 972
170	山田光彦	抗うつ薬の開発	こころの科学 158 86- 90 ,2011 .
171	片寄泰子, 三島和夫	抗ヒスタミン薬の睡眠改善効果	睡眠医療 6(1): 76- 7, 2012
172	齊藤祐子、初田裕幸、石井賢二、金丸和富、村山繁雄.	高齢者におけるアミロイド蓄積の意義	Cognition and Dementia 10 (1): 13- 17 , 2011.1

	著者	総説名	掲載誌
173	糸山 泰人	今後の難病対策のあり方について 重症難病患者の療養支援のあり方	保健医療科学 60:94-99, 2011
174	的場由木,川野健治	困窮者支援と被災者.	社会精神医学21, 61-64, 2012.
175	鈴木友理子	災害支援のチーム医療. 災害支援-臨床心理士による包括的支援.	臨床心理学. 11(4): 513-518, 2011.
176	竹島 正,森川すいめい,眞崎直子,的場由木,川野健治,若林秀樹,笹井康典,三輪正敬,勝又陽太郎,立森久照,米本直裕	災害支援の社会精神医学的視点.	日本社会精神医学会雑誌 21(1):48-98, 2012.
177	岡田幸之,安藤久美子	裁判員にわかりやすい精神鑑定結果の報告.	精神医学,医学書院,53(10) 947-953,2011
178	大野裕	産業保健現場における認知行動療法の現状と課題(関西版)	認知療法研究, No.(1), 11-20, 2012.2.
179	岩垂喜貴、亀井雄一	子どもの時差対策	小児科 52:443-448,2011. 4月
180	松本俊彦	子どもの自殺	小児内科 43: 909-914, 2011
181	和田恵津子、和田圭司	子の脳発達に影響を及ぼす母体環境	医学のあゆみ、239, 676-681, 2011
182	松本俊彦	思春期における薬物乱用の危険因子と保護的因子	財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター-NEWS LETTER 2011.2 第85号: 2-7, 2011
183	嶋根 卓也	思春期における薬物乱用の実態と対策	産婦人科治療103(2),144-150,2011.
184	松本俊彦	思春期の自傷行為 その実態と予防を中心に .	精神科治療学 25 (5): 553-559, 2011.
185	千原典夫,山村 隆	視神経脊髄炎 (NMO)における自己抗体産生細胞	医学のあゆみ. 24:534-535, 2012
186	糸山 泰人	視神経脊髄型多発性硬化症 (OSMS) から視神経炎 (NMO) への疾患概念の変遷	脊椎脊髄 23:730-736, 2010
187	西 大輔,臼杵正人,松村健太,松岡 豊	事故後のPTSDの予防に向けて.	精神科18(6):659-663,2011
188	金 吉晴	持続エクスポージャー療法.今日の精神疾患治療指針 編集 樋口輝彦他 19精神療法,	医学書院, P787-788,2012.
189	中込和幸	治療(抗精神病薬)選択肢変更の判断基準	臨床精神薬理, 15, 181-187, 2012
190	三宅幸子	自己免疫疾患研究:関節から神経まで	細胞工学 30(10):1064-5, 2011
191	稲垣正俊,大槻露華,竹島正	自殺とうつ状態	治療 うつ状態を理解する93(12): 2457-2460, 2011.

	著者	総説名	掲載誌
192	勝又陽太郎	自殺の危険の高い人たちの自殺リスクはどのように推移するのですか？支援のあり方にはどのような注意が必要ですか？地域づくりのためのメンタルヘルス講座5	公衆衛生75, 637-640, 2011
193	山田光彦	自殺企図患者をどうして助けなくてはならないの？救急に必要な精神科的知識と対応。	救急・集中治療24(1.2) 249-253, 2012.
194	山内貴史, 藤田利治, 立森久照, 竹島正, 稲垣正俊	自殺死亡に対する職業および配偶関係の相乗的関連	厚生 の指標58(11): 8-13, 2011.
195	竹島 正	自殺予防と地域づくり	こころのけんこ38: 2-13, 2011
196	川野健治, 竹島 正, 白神敬介, 的場由木	自殺予防の枠組みと被災地の地域精神保健	精神保健研究25(58):35-42, 2012
197	松本俊彦	自傷行為の理解と援助～アディクションと自殺のあいだ～	日本アルコール関連問題学会雑誌 13: 18-21, 2011
198	千葉麻子	自然リンパ球と関節炎	Frontiers in rheumatology & clinical immunology 5: 179-184, 2011
199	松本俊彦	若者の自傷行為～その実態と予防教育のあり方。	心と社会 148: 111-121, 2012.
200	伊藤弘人, 奥村泰之	循環器疾患と精神障害：虚血性心疾患に伴ううつを中心	総合病院精神医学23 :11-18, 2011.
201	加我牧子	小児の誘発電位 基礎・特集 脳機能計測法を基礎から学ぶ人のために」	臨床神経生理学39 (4):227-231, 2011.
202	加我牧子	小児聴覚失認の診療。	音声言語医学52 :316-321, 2011 .
203	星野 幹雄	小脳発達の分子機構と小脳無形性モデルマウス 1セベレス	医学のあゆみ Vol.239 No.6 精神発達遅滞・自閉症の分子医学
204	竹島 正	障害者自立支援法 - 制度改正の視点 -	臨床精神医学40(5): 553-557, 2011
205	功刀 浩	心の病と食生活とのかかわり エビデンス急増中。	栄養と料理 78 (1): 180-181, 2012.
206	圓谷理恵, 西野一三	心筋症をきたす筋疾患。	病理と臨床 循環器病理I 1..心筋疾患 話題の心筋症 29: 154-158, Apr, 2011
207	菊地裕絵	心身医学における病歴の取り方と面接法	女性心身医学16(2):134-137, 2011
208	丹野義彦, 奥村泰之, 上野真弓, 高野慶輔, 星野貴俊, 飯島雄大, 小林正法, 林 明明, 磯村昇太	心理師が実施するうつ病への認知行動療法は効果があるか: 系統的文献レビューによるメタ分析.	認知療法研究 4 (1): 8-15, 2011.
209	林由起子	新たな肢帯型筋ジストロフィー。	生体の科学 特集 筋ジストロフィーの分子病態から治療へ 62: 100-102, Apr. 2011
210	稲垣真澄, 太田英伸	新生児以降の評価 発達障害	周産期医学41(11) :1501-1504, 2011.
211	三宅幸子	神経・内分泌・免疫連関から見た脳内免疫応答の誘導と制御	細胞工学 30(10):1018-21, 2011

	著者	総説名	掲載誌
212	武田伸一	神経筋疾患研究の将来の展望 .	学術の動向 ,16:73-77 ,2011
213	稲垣正俊 ,大槻露華	身体疾患に伴う精神障害と自殺予防 .	日本臨牀70(1):151- 156,2012.
214	村山繁雄、齊藤祐子	進行性非流暢性失語 (特集 緩徐進行性高次機能障害の病態) .	BRAIN and NERVE 63(10):1037-1046,2011.10
215	立森久照	震災時の精神保健システム	日本社会精神医学会雑誌 21(1) : 75-77, 2012
216	栗山健一	睡眠と記憶,認知機能 .特集1: 睡眠研究の動向	日本生物学的精神医学会誌 .22(3) 151- 157. 2011.
217	三島和夫	睡眠と生活習慣病	公衆衛生 75(10) :755-9 ,2011.
218	三島和夫	睡眠のメカニズムとその障害	薬局 62(10) :13-9 ,2011.
219	三島和夫	睡眠公衆衛生とは何か 予防的視点の重要性	保健師ジャーナル67(7) 574-8 ,2011.
220	中村 亨,菊地裕絵 ,吉内一浩 ,山本義春	数理科学モデルから精神行動異常を解く	精神科 18 554- 559 ,2011
221	北村真吾	生物リズム障害の視点から見た不眠症	睡眠医療 5 62-7 ,2011.
222	功刀 浩	精神栄養学入門 :アルツハイマー病は食事で予防できるの? 後編 .	栄養と料理 77 (10): 88-95, 2011.
223	功刀浩	精神栄養学入門 :うつは食事で予防できるの?	栄養と料理 77 (5): 81- 89, 2011.
224	功刀浩	精神栄養学入門2 :アルツハイマー病は食事で予防できるの? 前編 .	栄養と料理 77 (9): 89- 96, 2011.
225	堀口寿広 ,伊藤弘人	精神科医療と保護者制度 諸外国の現状 .	精神医学54(2) :145- 154 ,2012.
226	石田重信 ,内野俊郎 ,橋爪祐二 ,大島正親 ,大島博治 ,平野 隆 ,伊藤弘人 ,内村直尚	精神科医療における地域連携 精神障害者にやさしい内科系医療機関一覧 (地域診療ガイドマップ) .	日本精神科病院協会雑誌30(12) 51-62 ,2011.
227	瀬戸屋雄太郎 ,高原優美子 ,佐竹直子 ,前田恵子 ,佐藤さやか ,吉田光爾 ,伊藤順一郎	精神科救急 急性期病棟におけるケアマネジメントの実施状況と今後の課題 .	精神保健研究 ,24(57) 41-50 ,2011.12
228	関口隆一 ,塚本哲司 ,深井美里 ,菊池礼子 ,岡崎直人 ,山川敬子 ,森 宏美 ,黒田安計 ,杉山 一 ,松本俊彦	精神科救急医療電話相談における自殺企図切迫例への対応	埼玉県医学会雑誌 16 (1): 291-296, 2011
229	松本俊彦	精神科治療薬の乱用 依存 医原性の薬物依存 .	財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2012.2 第86号: 2-7, 2012.
230	伊藤弘人	精神科地域連携クリティカルパス 総論 .	日本精神科病院協会雑誌30(12) 5-10 ,2011.

	著者	総説名	掲載誌
231	河野稔明,竹島 正	精神科病院における行動制限の状況とその背景	心と社会42(1): 68-76, 2011
232	岡田幸之	精神鑑定とうそ.	こころの科学156 28-32 ,2011.
233	功刀浩	精神疾患と食生活、生活習慣 (連載 心理臨床家のための脳科学講義12)	臨床心理学 11 (3): 397-404, 2011.
234	安藤久美子	精神障害と暴力犯罪.	Schizophrenia Frontier12(3) :7-12,2011
235	山口創生,米倉裕希子,周防美智子,岩本華子,三野善央	精神障害者に対するスティグマの是正への根拠 :スティグマがもたらす悪影響に関する国際的な知見 .	精神障害とリハビリテーション, 15(1) : 75-85, 2011.6
236	下平 (渡辺)美智代	精神障害者の地域生活支援の二つのあり方 ACTモデルとクラブハウスモデル .	精神科治療学26(11) :1473-1477 , 2011.11
237	小林朋佳,稲垣真澄	精神遅滞 .	母子保健情報 63 :16-19. 2011.
238	岡田幸之	責任能力鑑定のあり方、とくに裁判員制度との関係.	北陸司法精神医学懇話会会報 ,第15号 2-15 ,2011 .
239	小牧 元	摂食障害～心身両面からのアプローチ～	いしかわ精神保健第51号44 58、石川県精神保健福祉協会, 2011
240	有馬邦正,村田美穂,佐藤典子	先端認知症研究 医療施設の現在 国立精神 神経医療研究センター病院	Cognition and Dementia. 10(2): 78-81, 2011
241	井上 健,岩城明子,黒澤健司,高梨潤一,出口貴美子,山本俊至,小坂 仁	先天性大脳白質形成不全症 Pelizaeus- Merzbacher病とその類縁疾患	脳と発達 2011:43(6):435-442
242	関 和彦	素顔のニューロサイエンティストEbhard E Fetz	Clinical Neuroscience Vol.30(3),2012
243	花川 隆	多次元神経イメージングの神経ネットワーク研究への応用	神経内科 74: 406-409, 2011
244	三宅幸子、山村隆	多発性硬化症	実験医学 29(10)増刊:180-6, 2011
245	荒浪利昌	多発性硬化症 視神経脊髄炎に対する免疫療法	細胞工学 30:1060- 1063, 2011
246	三宅幸子	多発性硬化症における免疫制御療法	炎症と免疫 19(6):30-4, 2011
247	三宅幸子	多発性硬化症の病態	医学のあゆみ 237(4):291-5, 2011
248	最上多美子,池澤聡,山崎泰史,中込和幸	対人コミュニケーションが困難な統合失調症	Schizophrenia Frontier, 11(4), 29-33, 2011
249	渡辺真平,秋山志津子,太田英伸	胎児 新生児期における生物時計と光環境の重要性	睡眠医療, 2011;5:47-54.
250	中込和幸	第12回 感情 行動 認知研究会 シンポジウム 「うつ病の最新疫学と臨床」 うつ病の認知機能とNIRS 脳機能画像	分子精神医学 ,11(3), 83-85, 2011

	著者	総説名	掲載誌
251	稲垣真澄	知的障害と災害ストレス	ドクターサロン56 24-27 ,2012.
252	松本俊彦	地域づくりのためのメンタルヘルス講座6 :虐待、暴力を経験した人たちの抱えやすいメンタルヘルス問題の特徴と支援上の注意事項を教えてください	公衆衛生75 :725-728, 2011.
253	竹島 正 ,宇田英典 ,眞崎直子	地域のメンタルヘルスの問題はどのように変わっているのですか？	公衆衛生75(4): 321-325, 2011
254	伊藤弘人	地域中心の精神保健医療福祉の構築に向けた政策 .	精神保健研究24 ,5- 11 ,2011.
255	功刀浩	腸内細菌の改善はうつ病にも効果がある! ?	栄養と料理 78 (4): 180-181, 2012.
256	太田英伸	東日本大震災で研究について感じたこと .	時間生物学17(1) :45-47 ,2011.
257	金 吉晴	東日本大震災における被ばく不安 .特集 :フクシマの教訓 - 放射能被ばく事故に学ぶこころのケア .	臨床精神医学 ,40(11):1461-1465,2011.
258	鈴木友理子	東日本大震災後の被災地における精神保健医療活動 .	日本精神科病院協会雑誌 .30(10); 21-27, 2011.
259	功刀浩	糖尿病とうつ病による負のスパイラル	栄養と料理 78 (2): 180-181, 2012.
260	峯山智佳	糖尿病の療養指導Q & A 糖尿病とうつ .	Practice28(1) :85-87, 2011.
261	中込和幸	統合失調症 :リハビリテーション期 .第2章 薬物療法で生活はどう変わる? 薬にできること 薬ができないこと 特集 生活の視点から薬物療法をとらえなおす	精神科臨床サービス ,12: 24-28, 2012
262	最上多美子 ,池澤聡 ,兼子幸一 ,朴盛弘 ,中込和幸	統合失調症の認知機能障害に対する認知矯正療法の効果	日本神経精神薬理学雑誌 ,31 ,245-249 ,2011
263	最上多美子 ,中込和幸	統合失調症 - 最近の話題 - SCIT (社会認知 対人関係のトレーニング)	精神科 ,18(1) ,44-48 ,2011
264	西大輔 ,臼杵理人 ,松岡豊	頭部外傷後のPTSD	精神科治療学27(3):323-326, 2012
265	佐久間啓	特異な脳炎 脳症後てんかんの一群(福山- 栗屋)	小児内科 .2011 :43 506-08 .
266	峯山智佳, 野田光彦	特集 糖尿病患者のトータルケア 糖尿病とうつ .	診断と治療99(11) :1917-1922, 2011.
267	木村英雄	特集 :シグナル分子および細胞保護因子としての硫化水素序文	日本薬理学雑誌, 139: 5, 2012
268	三須 建郎、高橋利幸、西山修平、高野 里菜、中島一郎、藤原 一男、糸山 泰人	特集 :視神経脊髄炎 (NMO)update NMOの病態機序をめぐる新たな展開	BRAIN & NERVE 62:921-931, 2010
269	和田 信 ,和田 知未 ,金吉晴	特集 医をめぐるトラウマ がん患者における心的外傷とPTSD .	トラウマティック・ストレス9 2 72-80, 2011.
270	加藤英政, 奥田晶彦, 荒木敏之	特集1 神経系におけるiPS細胞 iPS細胞の活用も含めた神経機能修復の現状と将来, ヒトPS細胞を用いた神経系のモデル化とその障壁	脳21 14巻 3号 229-233ページ

	著者	総説名	掲載誌
271	武田伸一	特集に寄せて 骨格筋研究の見通し.	生体の科学, 62: 78, 2011
272	佐藤さやか, 伊藤明美	難治性統合失調症へのアプローチ- 日常生活技能が低下している統合失調症.	Schizophrenia Frontier ,11 (4) 284-288 ,2011.4
273	山本敏之.	難治性嚥下障害に対する治療戦略 .筋萎縮性側索硬化症 ,パーキンソン病に対する嚥下障害の評価と対策 .	臨床神経学 2011;51(11):1072-74
274	亀井雄一	日光浴などの光照射による睡眠改善	薬局 62(10) :113-7 ,2011.
275	宮崎 仁, 松本俊彦	日常診療ケーススタディメンタルヘルス編~見逃さないで! あなたも診ている心の病気~CASE 10 朝から酒を飲まずにいられない人」への対応: プライマリケアで診るアルコール依存症.	日本医事新報 No. 4578; 2012. 1. 21; 36-40, 2012.
276	木村勝智, 松本俊彦	日常診療ケーススタディメンタルヘルス編~見逃さないで! あなたも診ている心の病気~CASE 12 「リストカットを繰り返す人への対応 :プライマリケアで診る自傷行為 .	日本医事新報 No. 4586: 35-39, 2012.
277	木村勝智, 松本俊彦	日常診療ケーススタディメンタルヘルス編~見逃さないで! あなたも診ている心の病気~CASE 8 「この世から消えてしまいたい人」への対応: プライマリケアで診る自殺念慮.	日本医事新報 No. 4569; 2011. 11. 19; 36-40, 2011.
278	加藤忠史, 神庭重信, 寺尾岳, 山田和男, 荒木康夫, 河野健太郎, 後藤慎二郎, 三浦智史, 本村啓介, 秋山剛, 大森哲郎, 尾崎紀夫, 黒木俊秀, 中込和幸, 野村総一郎, 樋口輝彦, 古川壽亮, 前久保邦昭, 宮岡等, 本橋伸高, 渡邊衡一郎, 渡邊義文, 日本うつ病学会気分障害の治療ガイドライン作成委員会	日本うつ病学会治療ガイドライン 双極性障害2011.	臨床精神医学.40(4):507-522, 2011
279	木村 円, 中村治雅, 林由起子, 西野一三, 川井 充, 武田伸一	日本におけるデュシェンヌ型筋ジストロフィー患者登録システム - 国際的な希少疾病データベースモデルとしての Remudy の取り組み - .	生体の科学 [特集] 小脳研究の課題 (2) .63(1): 62-68, Feb, 2012.
280	吉田光爾, 伊藤順一郎	日本における精神保健福祉領域におけるアウトリーチサービスの現在 .	精神保健研究 ,24(57) 33-39 ,2011.12
281	伊藤順一郎	日本のACT :各地で行われているACTの成果の現状 .	精神神経学雑誌 ,113(6) 593-594 , 2011.6
282	中込和幸	認知リハビリテーションに情動の視点を加える .特集 精神療法における認知 行動 情動	精神神経学雑誌 ,113(11), 1102-1108, 2011
283	最上多美子, 中込和幸	認知矯正療法による予後改善 - NEARを中心に .特集 統合失調症の予後改善に向けての新たな戦略	精神医学 ,53(2) ,143-149 ,2011
284	堀越勝	認知行動療法はどんな場合に適応になるか	Pharma Medica Vol.30 no.3 ,p25-29 , 2012
285	松本俊彦	認知行動療法を取り入れた包括的外来治療プログラムの必要性.	日本社会精神医学会雑誌 20: 415-419, 2011
286	堀越勝	認知処理療法 (CPT) 心的外傷後ストレス障害の治療法	月刊カレントセラピー Vol.30 No2 2月号 ,76 ,2012
287	齊藤祐子, 足立正, 村山繁雄 .	認知症学 (上) その解明と治療の最新所見, .基礎編, 認知症の神経病理学各論, 嗜銀顆粒 .	日本臨牀 69(8):161-165, 2011.10

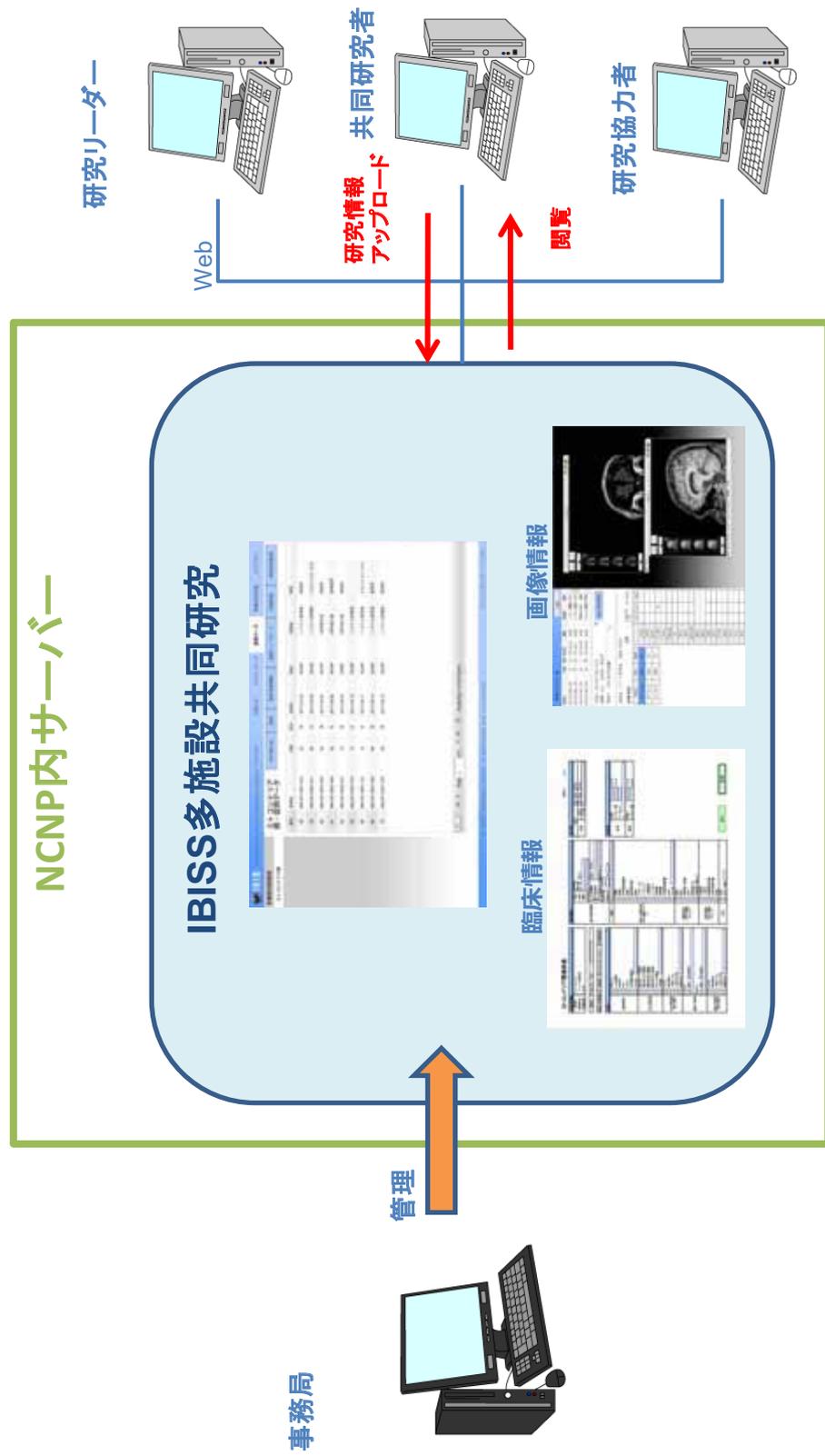
	著者	総説名	掲載誌
288	肥田昌子,三島和夫	認知症患者の概日リズムの乱れに対するメラトニン治療の効果 -せん妄に対しても効果はあるか？	Cognition and Dementia 10(2) 62-3 , 2011.
289	服部功太郎,寺石俊也,篠山大明,功刀浩	脳脊髄液 (CSF)からみた統合失調症のモノアミン代謝産物の解析	精神科治療学 26 (12) 1557-1563, 2011.
290	伊藤順一郎	白衣を捨てよ,町へ出よう 第4回 アウトリーチサービスにおける危機介入について(1).	精神科臨床サービス11(2) 286-291, 2011.4
291	伊藤順一郎	白衣を捨てよ,町へ出よう. 第6回 (最終回)家族の支援.	精神科臨床サービス11(4) 562-566, 2011.10
292	伊藤順一郎	白衣を捨てよ,町へ出よう 第5回 アウトリーチサービスにおける危機介入について(2).	精神科臨床サービス11(3) 418-423, 2011.7
293	加我牧子	発達障害における認知機能障害と神経生理学的所見 .	医学のあゆみ239 609-613 ,2011 .
294	加我牧子	発達障害の認知機能評価 .	認知神経科学別冊13 29-33 ,2011 .
295	中島聡美	犯罪被害者・長期間の虐待被害者に対する治療マネジメント.	精神科治療学(26)増刊号 .神経症性障害の治療ガイドライン .319-323, 2011 .
296	鈴木友理子	被災地における精神保健医療の課題.	特集シリーズ 東日本大震災から .公衆衛生情報. 41(7):pp2-15 ,2011.
297	松本俊彦	非行や死の危険が高まる思春期 衝動行為の増加	児童心理2011年10月号 臨時増刊 No.939: 99-105, 2011
298	齊藤祐子	病理診断医になじみのある疾患関連分子 解説編 - synuclein.	病理と臨床 29:115-117, 2011.4 文光堂
299	齊藤祐子	病理診断医になじみのある疾患関連分子 診断編 - synuclein.	病理と臨床 29: 118-121,2011.4
300	三島和夫	不眠症の診断 治療ガイドライン	LINICIAN 59: 22-9, 2012.
301	三島和夫	不眠症治療のゴールとは何か-今後の睡眠薬に求められること	睡眠医療 6.suppl: 172-8, 2012
302	三島和夫,北村真吾	不眠症治療の考え方と実践 -リズム調節から考える	Life Style Medicine 5(1) 33-40 ,2011.
303	米川貴博,西野一三	封入体筋炎 .	Clinical Neuroscience. 筋炎 - What s new? 30(3): 313-316, Mar, 2012.
304	加我牧子	副腎白質ジストロフィー症の話題.	東京小児科医会報 ,100 :47 - 53 , 2011.
305	松本俊彦	物質依存の強迫性 衝動性 渴望に対する薬物療法 .	臨床精神薬理 14: 607-614, 2011.
306	松本俊彦	物質使用障害と自傷 自殺	精神科20(3) 257-262 ,2012 .
307	嶋根 卓也	薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用 依存の実態把握に関する研究	埼玉県薬剤師会雑誌,37(8)、17-21,2011.

	著者	総説名	掲載誌
308	嶋根卓也	薬剤師から見た向精神薬の過量服薬	精神科治療学27(1),87-93,2012
309	和田 清、小堀栄子	薬物依存とHIV/HCV感染 - 現状と対策 -	日本エイズ学会誌 13(1): 1-7, 2011.
310	松本俊彦	薬物依存臨床から見えてくる精神科薬物療法の課題 全国 の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査 の結果より .	精神科治療学 27 (1): 71-79, 2012.
311	松本俊彦	薬物臨床の最前線 SMARPPが丸ごとわかる! 第3回 スマ ープの実際 セッションはどんな感じ?	季刊Be! 103号2011.6: 58-62, 2011
312	松本俊彦	薬物臨床の最前線 SMARPPが丸ごとわかる! 第4回 タマ ープの挑戦 精神保健福祉センターで	季刊Be! 104号2011. 9: 74-77, 2011
313	松本俊彦	薬物臨床の最前線 SMARPPが丸ごとわかる! 第5回 医療観 察法の「想定外」!	季刊Be! 105号2011. 12: 58-62, 2011.
314	木村英雄	硫化水素 :生成、放出、生理機能	日本薬理学雑誌, 139: 6-8, 2012
315	有馬邦正	臨床医のための神経病理 CARASILの脳動脈病理	Clinical Neuroscience 29巻8号 Page862-863
316	赤澤正人 ,松本俊彦	労働者におけるアルコールの問題と自殺	産業精神保健 19(2): 93-98, 2011
317	村山繁雄,舟辺さやか,齊藤祐 子	嗅覚障害と神経変性疾患	脳21 14(4): 67-72, 2011.10
318	松本俊彦	嗜癮問題と自傷・自殺	アディクションと家族 27 (4): 297-301, 2011

IBISSについて

IBISS多施設共同研究システム概要

WEB技術を使用して遠隔に居る多くの医療研究者がネットワーク上で同時に簡易操作で医用画像情報や疾患情報などを相互に投稿・閲覧・調査・議論し合えることができ、効率的に研究及びプロジェクト管理を進める事が可能になります。医療業界に多大の利益をもたらす、医療研究方法の次世代モデルです。



IBISS多施設共同研究・画面

The screenshot displays the IBISS research portal interface. At the top, there are navigation tabs for 'IBISS 多施設共同研究', 'IBISS 共同研究', 'IBISS 共同研究', 'IBISS 共同研究', and 'IBISS 共同研究'. Below this, there is a search bar and a list of patients. The patient list includes columns for '患者ID', '性別', '年齢', '病期', '検査日', '検査種別', '検査結果', and '検査機関'. A detailed patient record for '高田アイルー丸' is shown, including '患者ID', '性別', '年齢', '病期', '検査日', '検査種別', '検査結果', and '検査機関'. Below the patient record, there is a table of '検査結果' (Test Results) with columns for '検査日', '検査種別', '検査結果', and '検査機関'. The table shows results for 'T1WI', 'T2WI', 'DWI', 'ADC', 'FLAIR', 'DTI', and 'ASL' for the patient '高田アイルー丸'.

検査日	検査種別	検査結果	検査機関
2011.03.31	脳野	MS	PHILIPS Acquire 1.21
2011.01.01	DWI	MR	
2011.04.04	脳野	MR	

高田アイルー丸の検査結果一覧

検査日	検査種別	検査結果	検査機関
2011.03.31	脳野	MS	PHILIPS Acquire 1.21
2011.01.01	DWI	MR	
2011.04.04	脳野	MR	

高田アイルー丸の検査結果一覧

検査日	検査種別	検査結果	検査機関
2011.03.31	脳野	MS	PHILIPS Acquire 1.21
2011.01.01	DWI	MR	
2011.04.04	脳野	MR	

高田アイルー丸の検査結果一覧

進行中の研究 (2012/06/01)
 「脳病態統合イメージングセンター (IBIC) と連携した先天性大脳白質形成不全症の脳画像のデータベース構築に関する研究」
 「脳病態統合イメージングセンター (IBIC) と連携したミオパチーの骨格筋画像解析に関する研究」
 「脳病態統合イメージングセンター (IBIC) と連携したミトコンドリア病の脳MRI画像解析に関する研究」